

七瀬古墳群
田麦中畠古墳群

1989. 3

中野市教育委員会

七瀬古墳群

田麦中畝古墳群

序

昭和62年に策定した中野市第二次総合計画において、本市が目標とする21世紀の都市像を「光と緑の交響都市」と定め、市民一人ひとりの聲きが豊かなハーモニーになるような魅力あるまちを、めざしております。

高速交通時代を迎え、さらに都市化、市街化の進展が予想される本市にとって、今後の発展を左右するとも言えるのが整合性のある土地利用計画であります。このために総合計画の中で西部丘陵地域の複合機能化計画を樹立し、工業団地、及び住宅団地の造成と公園の整備を行って魅力と個性にあふれる北信地域の中核都市づくりを推進しようとしております。

なかでも、住宅団地の造成は、快適な居住環境づくりに止まらず、産業振興により増大する雇用の確保と人口の定着化等本市発展のために重要な意味を持っております。

今回、西部丘陵の一画、七瀬地域等において総合計画に基づく住宅団地造成及び関連事業を計画したところ、丘陵一帯に残る文化財の保護が問題となりました。このため県教育委員会のご指導を得て発掘調査を実施いたしましたが、この過程において当初は計画地内であった古墳を現状保存とする等の計画の一部見直しにより、文化財の保護に配意をしたことは、ご理解をいただきたいと存じます。

この度、これら一連の発掘調査報告書の発刊にあたり、調査に関係された各位のご理解とご協力に対して心から敬意と感謝を申し上げる次第であります。

平成元年3月

中野市土地開発公社理事長 土屋 武則

序

長丘丘陵上には、旧石器時代から近世にかけての多くの遺跡が点在し、七瀬・田麦地区には、県指定史跡七瀬双子塚古墳、市指定史跡田麦林畔1号古墳、山ノ神古墳等県下でも著名な古墳があり、市内では重要な文化財の分布地となっています。

この地に中野市の「新しい都市づくり」の一大事業として、300戸を越える七瀬住宅団地の造成とその関連事業が計画され、昭和61年度から昭和63年度にわたり発掘調査を実施しました。

調査は、日本考古学協会員、中野市文化財保護審議会々長の金井敬次先生にお願いし、七瀬3号古墳については、筑波大学教授、岩崎卓也先生に調査團長を依頼し、より充実した調査を図り、また多くの皆様方の御協力を得て、調査を実施しました。

今回の調査では、遺構及び装身具、人骨、鉄器等の多数の遺物を検出し、地域の先史の生活や文化を解明するうえに貴重な資料を得ることが出来ました。

3年間という長い期間にわたり、調査にあたっていただいた調査團並びに作業員の皆さん、また現地調査において格別なる御理解、御協力をいただいた七瀬・田麦両区の皆さんに心から感謝と御礼を申し上げます。

平成元年3月

中野市教育委員会教育長 鳴田 春三

例　　言

1. 本書は、「七瀬住宅団地」（仮称）の建設にともない、その関連事業とともに、昭和61年度から昭和63年にわたり実施した埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、中野市都市開発課との協議に基づき委託契約（一部）により、中野市教育委員会が担当した。
3. 作図は、地形測量については1/100、遺構及び地層図については、1/10~20、出土遺物については原寸を原則とした実測図より縮図して掲載した。また全体図は「中野市基本図16-4、26-2」1/2500を使用し、実測図より転載した。
4. 本書に関する写真撮影は、主として徳竹雅之、檀原長則によるものである。
5. 資料整理には調査団全員の協力によって行われ、主として復原は檀原、池田実男が、実測は檀原、徳竹。トレースは、栗原よしみ、山崎のり子、中野高校生が分担した。
6. 報告書の執筆の文責は、執筆者にあり、氏名は文末に記した。
7. 七瀬3号、旧4号古墳の調査については、長野県教育委員会文化課の御指導を得、筑波大学教授岩崎卓也先生を調査団長に依頼し、主に筑波大学院生、滝沢誠氏の協力のもとに実施し、執筆分担も合わせて依頼した。
8. 調査にあたり、地元七瀬区、田麦区、市役所各主管課から多くの援助をいただいた。
9. 調査のため実測図、写真、遺物等は、中野市歴史民俗資料館で保管している。

目 次

序	
例 言	
目 次	
I 長丘陵の環境	1
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	3
II 調査の概要	7
七瀬2・6号古墳	
1 調査の概要	7
(1)調査に至るまでの経過	7
(2)調査団の編成	7
(3)調査の経過	8
2 調査の内容	9
2号古墳	
(1)立 地	9
(2)規模・構造	10
(3)遺 物	10
6号古墳	
(1)立地・規模・構造	14
(2)遺 物	15
七瀬5号古墳	
1 調査の概要	22
(1)調査に至るまでの経過	22
(2)調査団の編成	22
(3)調査の経過	23
2 調査の内容	26
(1)立地・規模・構造	26
(2)遺 構	28

a 埋葬施設と供獻、副葬品の位置.....	28
(3)遺物.....	34
A 墳頂部出土の土器.....	34
a 須恵器.....	34
b 土師器.....	35
B 周溝出土の土器.....	37
C 第2主体部出土の土師器.....	39
3 小結.....	39
(1)土師器について.....	39
(2)須恵器について.....	40
(3)平安時代の土師器について.....	41
(4)武器.....	41
(5)装身具.....	42
(6)被葬者と埋葬施設について.....	50
七瀬3号古墳・4号遺跡	
1 調査の概要.....	68
(1)調査に至るまでの経過.....	68
(2)調査団の編成.....	68
(3)調査の経過.....	69
2 調査の内容.....	70
3号古墳	
(1)墳丘.....	79
a 調査前の状況.....	70
b 墳頂部小墳丘.....	73
c 墳丘の構造.....	74
d 周溝.....	78
e 案造過程.....	78
f 遺物出土状況.....	81
(2)埋葬施設.....	82
a 検出状況.....	82
b 第1主体部.....	82
c 第2主体部.....	82
d 第2主体部遺物出土状況.....	84
e 第3主体部.....	84
f 第3主体部遺物出土状況.....	84

(3)出土遺物	88
a 第2主体部出土遺物	88
b 第3主体部出土遺物	96
c 第3主体部盃擺括内出土遺物	97
d 墳頂部出土遺物	97
4号遺跡	
(1)立地	103
(2)各遺構の調査	103
a 1号遺構	103
b 2号遺構	103
c 3号遺構	104
d 4号遺構	106
(3)小結	106
3 小結	
(1)七瀬3号古墳の出土遺物について	108
a 壺 b 銅釧と鉄釧	108
(2)七瀬3号古墳をめぐる問題	110
付論 七瀬3号古墳出土の人骨について 信州大学医学部第二解剖学教室助教授 西沢寿児	
田麦中歟1・2号古墳	
1 調査の概要	127
(1)調査に至るまでの経過	127
(2)調査団の編成	127
(3)調査の経過	127
2 調査の内容	
(1)中歟古墳群の調査	140
(2)中歟1号古墳の調査	140
田麦中歟3・4・5号古墳	
1 調査の概要	153
(1)調査に至るまでの経過	153
(2)調査団の編成	153
(3)調査の経過	153

2 調査の内容	155
(1) 中古3・4・5号古墳の調査前の状況	155
(2) 遺構	157
a 3号古墳の調査	157
b 4号古墳の調査	159
c 5号古墳の調査	164
d 敷石状遺構	165
(3) 遺物	165
3 小結	166
III 考察	175
1 中野平の主な古墳のあり方	175
2 中野平の陪塚にみられる古墳と七瀬双子塚古墳	178
3 七瀬双子塚古墳採集の円筒埴輪について	180
4 長丘丘陵古墳群の主体部のあり方と頭位方向について	181
5 七瀬4号遺跡をめぐる諸問題	184
IV まとめ	188

挿図目次

図1 長丘丘陵の古墳位置図	2
図2 七瀬2号古墳全体図(調査前)	9
図3 七瀬2号古墳全体図(調査後)	11、12
図4 七瀬2号古墳出土遺物	13
図5 七瀬6号古墳全体図	14
図6 七瀬6号古墳出土直刀片	15
図7 七瀬5号古墳墳丘全体図(調査前)	26
図8 七瀬第5古墳墳丘調査測量図(調査後)	27
図9 七瀬5号古墳墳丘断面図	28
図10 七瀬5号古墳墳頂部出土土器分布図	29
図11 七瀬5号古墳第1主体部実測図	30
図12 七瀬5号古墳第2主体部実測図	31
図13 七瀬5号古墳第3主体部実測図	32
図14 七瀬5号古墳主体部位置図	32
図15 七瀬5号古墳主体部実測図	33

図16 七瀬5号古墳出土須恵器高坏・砲実測図	35
図17 七瀬5号古墳出土須恵器甕実測図	36
図18 七瀬5号古墳出土須恵器甕実測図	37
図19 七瀬5号古墳出土土師器実測図	38
図20 新井大ロフ遺跡出土須恵器砲実測図	40
図21 七瀬5号古墳第1主体部出土短刺実測図	42
図22 七瀬5号古墳第2主体部出土直刀実測図	42
図23 七瀬5号古墳出土豎櫛実測図	43
図24 七瀬5号古墳出土白玉実測図(1)	44
図25 七瀬5号古墳出土白玉実測図(2)	45
図26 七瀬5号古墳出土白玉実測図(3)	46
図27 七瀬3号古墳測量図	71, 72
図28 七瀬3号古墳墳頂部方形土壙実測図	73
図29 七瀬3号古墳測量図(表土除去後)	75, 76
図30 七瀬3号古墳墳丘周縁土層断面図(A-A')	78
図31 七瀬3号古墳墳丘土層断面図	79, 80
図32 七瀬3号古墳の築造過程(第1~6次盛土)	81
図33 七瀬3号古墳墳頂部遺物出土状況	81
図34 七瀬3号古墳第2主体部断面図	82
図35 七瀬3号古墳第1・2・3主体部平面図	83
図36 七瀬3号古墳第2主体部遺物出土状況〔左: $\frac{1}{20}$ 右: $\frac{1}{10}$ 〕	85
図37 七瀬3号古墳第1・3主体部断面図	86
図38 七瀬3号古墳第3主体部遺物出土状況〔左: $\frac{1}{20}$ 右: $\frac{1}{10}$ 〕	87
図39 七瀬3号古墳第2主体部出土豎櫛鉄釧〔 $\frac{1}{20}$ 〕	89
図40 七瀬3号古墳第2主体部出土玉類 上段:頭、下段:首(1欠)	91
図41 七瀬3号古墳第2主体部出土玉類 上段から首(78欠)右手、左手(2欠)、位置不明	92
図42 七瀬3号古墳第3主体部出土豎櫛、銅鏡	96
図43 七瀬3号古墳第3主体部盗掘坑内出土刀子	97
図44 七瀬3号古墳第3主体部出土玉類 上段:首(9、26欠)、下段:右手(8欠)	98
図45 七瀬3号古墳第3主体部出土玉類 上段から右手(26欠)、左手(3欠)、その他	99
図46 七瀬3号古墳墳頂部出土遺物実測図〔1: $\frac{1}{20}$ 、2、3: $\frac{1}{10}$ 、4: $\frac{1}{20}$ 〕	99
図47 七瀬4号遺跡測量図	104
図48 七瀬4号遺跡1号遺構、墳丘測量図、土層断面図	105
図49 七瀬4号遺跡1号遺構墳頂部集石実測図	106
図50 七瀬4号遺跡1号遺構墳裾下穿孔検出状況	106
図51 七瀬4号遺跡3号遺構出土石鏡	106
図52 七瀬4号遺跡3号遺構集石土壤実測図	107
図53 田麦地区古墳位置図	139

図54	田麦中歟周辺測量図	141
図55	田麦中歟1号古墳墳丘測量図	142
図56	田麦中歟1号古墳主体部測量図	143
図57	田麦中歟1号古墳墳丘断面図	144
図58	田麦中歟3・4・5号古墳測量図	156
図59	田麦中歟3号古墳配石造構図	157
図60	田麦中歟3号古墳中央集石実測図	158
図61	田麦中歟3古墳配石平面図	159
図62	田麦中歟4号古墳墳丘測量図	160
図63	田麦中歟敷石帯実測図	161、162
図64	田麦中歟4号古墳下層敷石帯実測図	161、162
図65	田麦中歟4号古墳内部実測図	163
図66	田麦中歟1・3・4・5号古墳出土遺物実測図	163
図67	田麦中歟5号古墳トレンチ断面図	164
図68	田麦中歟採集遺物実測図	165
図69	中野平の主な古墳位置図	176
図70	七瀬双子塚古墳出土珠文鏡	179
図71	七瀬双子塚古墳出土円筒埴輪	180
図72	七瀬地区古墳位置図	182
図73	七瀬4号遺跡出土石塔白座石	187

表 目 次

表1	市内地域別古墳分布数	3
表2	七瀬5号古墳整備検査表	42
表3	七瀬5号古墳第1主体部北側の一群玉類計測表	46、47
表4	七瀬5号古墳第1主体部南側の一群玉類計測表	47、48
表5	七瀬5号古墳第2主体部西側の一群玉類計測表	48、49
表6	七瀬5号古墳第2主体部東側の一群玉類計測表	49、50
表7	七瀬3号古墳第2主体部玉類計測表I(頭:白玉)	93
表8	七瀬3号古墳第2主体部玉類計測表II(首:小玉)	94
表9	七瀬3号古墳第2主体部玉類計測表III(右手:小玉、白玉)	95
表10	七瀬3号古墳第2主体部玉類計測表IV(左手:小玉)	95
表11	七瀬3号古墳第2主体部玉類計測表V(手:小玉、白玉)※位置不明	96
表12	七瀬3号古墳第3主体部玉類計測表I(首:小玉)	100、101
表13	七瀬3号古墳第3主体部玉類計測表II(右手:小玉)	102
表14	七瀬3号古墳第3主体部玉類計測表III(左手:小玉)	102
表15	七瀬3号古墳第3主体部玉類計測表IV(白玉)	102

I 長丘丘陵の環境

1 地理的環境

長野県の北部に位置する善光寺平の北端に、延徳低湿地を前面にもった中野扇状地がある。西方を望めば、北西より斑尾山（1382m）、妙高山（2446m）、黒姫山（2053m）、戸隠山（1911m）、飯綱山（1917m）の北信五岳の均整のとれた姿が展望される。中野扇状地北側には、飯山地方とは気候的にも境界をなす高社山（高井富士、1351m）が聳え立つ。東には、上信越高原国立公園・志賀高原内の岩菅山（2295m）、志賀山（2035.5m）、横手山（2305m）、笠岳（2075.8m）などの上信国境の山々が聳え、この山々より流れ出す横湯川は、志賀山・赤石山（2109m）との間にある大沼池より発し、角間川は、横手山と笠岳との間を源流として山ノ内町星川橋附近で横湯川と合流して、夜間瀬川となって、高社山山麓を西へ流れ、さらに北西に向きをかえて、柳沢地蔵で千曲川と合流している。

中野扇状地は、この夜間瀬川によって生成されたものである。この中野地方の地質の研究は下高井教育会『長丘丘陵とその周辺の自然』1988中村二郎「長丘丘陵の地形・地質」に発表され、それによると新生代の第三紀・中新世（約3500万年前）の断層運動によって、日本列島の真中に大きな割れ目ができ、これは中央地溝帯（フォッサ・マグナ）と呼ばれている。このフォッサ・マグナの西縁は、糸魚川～静岡構造線で、東側は、火山噴出物のためにっきりしないが、関東山地の西の麓を結ぶ線とみられている。この北信地方も、フォッサ・マグナの一部に属し、海底に陥没すると同時に活発な海底火山活動がおこり、火山噴出物を主とする緑色凝灰岩が堆積し、その上に別所層（泥や粘土の固まった泥岩層）が堆積した。この別所層の時代から、志賀高原を含む東部山地は、隆起運動をはじめ、これは中央隆起帯とよばれて、下部に石灰岩層、砂岩などの深成岩が入りこんでいる。中野地域は、上昇をつづけた中央隆起帯と沈降をつづけた西部盆地の構にあって、常に隆起と浸食、沈降と堆積、断層運動などを繰り返して成長した。従って中野周辺の地形・地質は複雑だとされている。

長丘丘陵の地質は、下位より大川層、星敷層、豊野層、平出層、とされ標高は400~500mを示す平坦面で、かつて千曲川の浸食作用によって作られた段丘面で、新期ロームⅢ（赤色の軽石「スコリア」と白色の軽石（パミス）とを含む暗褐色～褐色の細粒のローム）と新期ロームⅢ（クラック「裂け目」の発達した赤色の軽石が混入する茶褐色で粘土質のローム）におおわれる。七瀬3号墳の位置では、その上に淡黒色の火山灰土が50~60cm堆積していた。

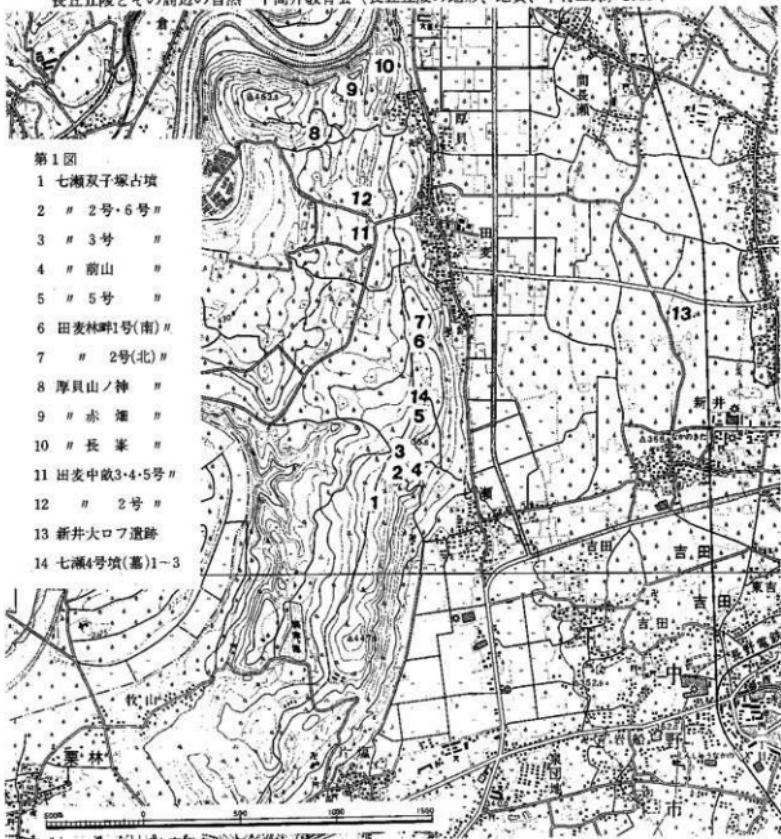
また長丘丘陵の南部及び東部を限る直線上の急崖の成因は、長野盆地をつくる陥没断層運動によって形成されたと考えられている。夜間瀬川附近を扇頂部とする夜間瀬川の氾濫活動によって、中野扇状地が形成され、先端は、間長瀬、江部、新保あたりに達し、東西約4km、南北約6kmの扇形を作っている。中野扇状地末端部西には、長丘丘陵（西部丘陵）が南北にわたって存在する。先端は古牧地域より始まり、堅田、厚貝、田麦、七瀬を経て片塙地区で、やや南西に曲り、安源寺、草間を経て、立ヶ花部落南西の蘿ノ井川と千曲川の合流点附近まで達している。此の間、南北約10km、東西約0.5~2kmで、標高は、350~500m以内で、長丘丘陵のもっと高いのは、壁田城山附近で、488mである。長丘丘陵西側には千曲川が蛇行し、対岸農田村の東側を経て、飯山市の最南端、蓮地蔵の南で東にむかひ、柳沢の西方、夜間瀬川との合流点附近で、左にわん曲し北流している。今回調査された長

丘陵の北部地域を限ってみると、東側の急崖地には、山林、地氷り地形の七瀬北部と丘陵上は、果樹園地帯で、住宅団地造成予定地は中野市では唯一残された、山林地目の開発可能な広い面積が残されていた。

今後、長丘丘陵をめぐる開発が、益々盛んになり、現在予定されている七瀬住宅団地三百有余戸の造成、浜津ヶ池文化公園の開発、上信越自動車道イリーターチェンジの設置、1998年長野冬季五輪中野市・山ノ内間道路開発工事、長丘丘陵経貫道開発予定等々が、目白押しにあり自然保護埋蔵文化財保存等、極めて困難な状勢にあることは否定できない。

参考文献

長丘丘陵とその周辺の自然一下高井教育会（長丘丘陵の地形、地質、中村二郎）1988年



第1図 長丘丘陵の古墳位置図

2 歴史的環境

千曲川は、立ヶ花地蔵で、小峡谷状地帯に流入し、北へ向って曲折を重ね、古牧で川幅を広げて飯山盆地へ向っている。この千曲川の東岸には、立ヶ花から約9km北の古牧へ至る比較的低くながらかな、高丘、長丘丘陵が展開している。

丘陵の東側鞍部には、立ヶ花—草間—安源寺—片塙—七瀬—田麦—厚貝へ通する一本の古道がある。通称「長峯通り」と呼ばれ、原始時代からの要路であったものの如くで、近世、近代までは人馬の往還として重要な役割を果していたが、現代の急速な車社会の進展によって、道はすっかりすれてしまった。

この丘陵一帯は、埋蔵文化財が濃密に分布しており、とりわけ「長峯通り」周辺には旧石器時代から近世までの遺構遺物の宝庫である。

旧石器時代の発掘調査によって知られる浜津ヶ池、立ヶ花遺跡が著名で、草間、安源寺、田麦、厚貝からは、旧石器の表抜が報告されている。姥ヶ沢遺跡は、縄文中期を全体としているが、発掘調査(昭57)によって、北陸地方の影響のみられる土器が出土し、住居跡1、土器、石器のはか多量の土偶の出土をみて、学界から注目されている。安源寺遺跡も発掘によって縄文中期の遺物や土偶片を得ている。縄文時代の遺物の単独出土は、立ヶ花、草間、田麦、厚貝にみられる。

弥生時代中期の栗林遺跡は、県史跡に指定され、栗林式遺物は、広く学界に知られている。「永峯通り」で栗林式遺構遺物の出土地は、立ヶ月遺跡で、住居跡1と遺物、安源寺遺跡において住居跡1と関係遺物の発掘調査報告がある。弥生時代後期(箱清水期)では、安源寺遺跡で4軒の住居跡と土括墓群の検出があった。表抜では、立ヶ花、草間、大徳寺、七瀬、田麦、厚貝が知られている。

古墳は、この丘陵の尾根上に点在し、特に立ヶ花、草間、七瀬、田麦、厚貝に多い。昭和23年秋、故小野勝年博士が調査された田麦林畔2号墳、厚貝山ノ神古墳は、遺構遺物に地域性をもっていた。中野市内には、57基の古墳が所在するが、この丘陵一帯には、30基に及び市内の半数52.6%を占めており、年代や形状、遺構遺物等は、多種多様である。

つぎ市内の地域別の古墳を提示して参考に供したい。

	前方後方墳	方 墓	前方後円墳	円 墓	合 計	備 考
高 丘・長 丘 丘 陵	1	2	1	27	30	県史跡—七瀬双子塚古墳
東 山 墓 墳	0	0	1	14	15	市史跡—田麦林畔1号墳、厚貝山ノ神古墳
高 社 山 墓 墳	0	0	0	10	10	市史跡—蟹沢古墳、金鐘山古墳
中野郡駿地・中野平	0	0	0	1	1	
合 計	1	2	2	52	57	

表1 市内地域別古墳分布数

新井大口遺跡は、田麦の東方約1000mの所にあって、中野扇状地扇央やや下寄りの微高地で、五世紀後半の農耕祭祀遺跡で、昭和44年秋に緊急発掘調査が実施された。古代集落との関係は不明であるが、今後の調査研究によって「永峯通り」に所在する古墳群との関連が期待されている。

奈良～平安初期の須恵器焼成窯は、高丘丘陵中に60余基が確認され、「永峯通り」沿えの立ヶ花、

草間、安源寺、片塩には、トンネル式、半地下式登窓が10余基点在し、古代の一大窯業団地の繁栄振りが推定される。昭和51年の安源寺遺跡の発掘調査では、平安時代の鍛冶屋1軒のほか庶民の堅穴住居址4軒の検出をみた。式内社と推定される小内八幡神社の裏にあたり、「永峯通り」は、この神社の境内沿えに通過していることも、何等かの意味をもつものであろう。

この丘陵には、居館跡5、山城4、砦跡1、があって中世の要塞地帯の貌を呈している。「永峯通り」沿えの戦国時代の茶臼峯着跡（草間）、立ヶ花城山（山城）の発掘調査が行われて、戦国期の遺構と遺物が検出された。江本庄一郎氏（田麦）宅の庭からは、昭和21、27年の2回にわたって、合計303貫（1136kg）の古銭が、偶然に発掘されたが、埋納者や埋納事情については不明であって、今後の究明が待たれる。

このように、この丘陵は、中野地方の歴史の流れと連動して、原始時代の居住域、古墳の營造地、古代の窯業産地、中世の城館の構築などの遺地として、地域の歴史に登場し、現在は、高速道と新幹線の開通が待望されている。今、工業適地や住宅団地造成に向けて、開発の波が押し寄せているのがこの丘陵の現状である。

（金井 游次）

七瀨2・6号古墳

II 調査の概要

七瀬 2・6 号古墳

1 調査の概要

(1) 調査に至るまでの経過

中野市は、北信濃の商業の中心地であり、自然条件に恵まれた農業地域として現在まで発展してきました。しかし、今日の社会構造の急速な変化は、当市においても新しい都市づくりを求めて来ました。中でも、高速交通網の発展が、当市に与える影響は大変に大きなものとなることが予想されます。

それらの都市構想を推進する意味において道路整備及び居住空間の供給等の開発計画が当市内最適地とされ長丘丘陵において実施されることが決定され、丘陵上に残存する古墳等の文化財保護について、開発側並びに保護側との間で協議が開始され、何回かの協議の結果の末、県指定史跡である七瀬从子塚古墳及びその陪塚と思われる2基の古墳については、公園内に現状保存し、残りの古墳については発掘調査を実施し、記録保存をはかることに決定した。

まず昭和61年6月19日に、中野市西部丘陵土地利用計画に基づく七瀬住宅用地への取付け道路として市道七瀬・大俣線の道路改良工事に伴う保護協議を県教育委員会文化課担当指導主事の立ち会いのもと実施し、昭和61年9月1日から9月30日までの予定で、七瀬2号古墳の発掘調査を決定、実施しました。

2号古墳調査中、地元の方から、以前2号古墳より、やや下がった地点において開墾のため斜面を削平した際に、鉄器片が出土したことがあるという連絡があり、その地点の調査を追加し、七瀬6号古墳として残存状況を確認した。

(2) 調査団の編成

調査責任者 鳴田 春三（中野市教育委員会教育長）

調査団長 金井 浩次（日本考古学協会会員・中野市文化財保護審議会会長）

調査主任 横原 長則（日本考古学協会会員）

調査員 池田 実男（長野県考古学会員）

事務局 酒谷 康雄（社会教育課長）

小野沢 拓（同課長補佐）

徳竹 雅之（同課歴史民俗資料館学芸員）

協力団体 七瀬区

参加者 古田 茂、山上嘉一、田川照生、藤沢英夫、金井英男、阿藤英奈、渡辺金治、正井 治雄、湯本栄一、栗原よしみ、山崎のり子、中野高校生（順不同、敬称略）

調査の実施にあたり、協議の段階から御指導をいただいた長野県教育委員会文化課、七瀬区長、地主各位の皆様には、格別なる御配意をいただき、また調査参加者には誠意協力を賜わり、調査が完了できたことを記して感謝申し上げる次第である。

（徳竹 雅之）

(3) 調査の経過

- 8月28日（晴） 七瀬2号古墳発掘調査、器具、器材を安源寺遺跡より運搬し、テントの設営を完了する。
- 29日（晴） 古墳および周辺の草木伐採及び清掃を始める。
グリット設定クイ打ち。平板測量の準備に入る。
- 30日（晴） 煙灌貯水池北方の三点、標高435.6mにレベルを求めて、B・M標高443.6mを設置する。
- 9月1日（晴） 中野市教委、小野沢社会教育課長補佐等による発掘に至る経過説明、調査団結団式、祈願祭を行い、統いて1/50の現墳丘測量に入る。
- 2日（曇） 昨日に続き、2号古墳1/50の全体平板測量を実施し終了する。
- 4日（晴） 1/100の地形全体測量に入る。
- 5日（晴） 測量に並行して墳丘西側にトレンチを入れて、規模範囲確認調査に入る。
- 6日（曇） 全員にて、墳丘北側にトレンチを入れて規模範囲の確認調査に入る。
- 8日（晴） トレンチ内に、落ち込みのある断面が確認される。
グリットI-6、I-7、グリットF-6、F-8、いずれも1/10地層断面実測を行う。
- 9日（曇） 溝状遺構中に落ち込んでいる土を振り上げ、落ち込みに添って土を取り除く。
溝内より、国分期、内黒環他3片検出する。
- 本墳、東方下段に、段平地あり、古墳ではないかと話題となる。
- 10日（金） 周溝全体にわたり、埋土を取り除き作業、周溝内より黒曜石片、安山岩片など出土。
- 現在の墳頂の主体部位置と思われる個所、発掘開始する。
- 11日（金） 周溝全体が、ほぼ完掘する。
南北断面及びG-6地層断面実測を行う。
- 墳頂部、盛土面浅く、遺構、遺物の検出なく、強粘質土の地山層まで掘削する。
主体部は、すでに崩落の災害に会っていたと判断された。
- 16日（金） 「前山古墳発掘調査報告書」の記載や現地形からみて、下段の畳を6号古墳と名づけ、道路予定地のための調査に入り、七瀬、小池長重氏宅に赴き、刀片出土当時の状況を開く。「昭和の始め頃、父親と山の桑畠のさく切作業をしていたら、銀の先に刀片が当り家に持ち帰った。」
- 6号古墳の清掃作業に入いる。
- 17日（金のち雨） 6号古墳の平板測量を始めるが、雨のため午前中にて作業中止する。
- 22日（晴） 6号古墳のトレンチ及び周溝の1/60平板実測、測量、周溝、西壁断面実測、東一西、南一北、断面実測図作成する。
- 23日24日（晴） 6号墳東一西E-5、F-5間、1/30断面実測、2号墳墳丘及びトレンチ、周溝1/50平板実測、2号古墳1/100平板測量に入る。
午前、記念撮影、午後、テント撤去し、高梨館遺跡に移転する。
- 9月25日26日（晴） 4名にて2号古墳全体図1/100平板測量を完了し調査を終了する。

（池田 実男）

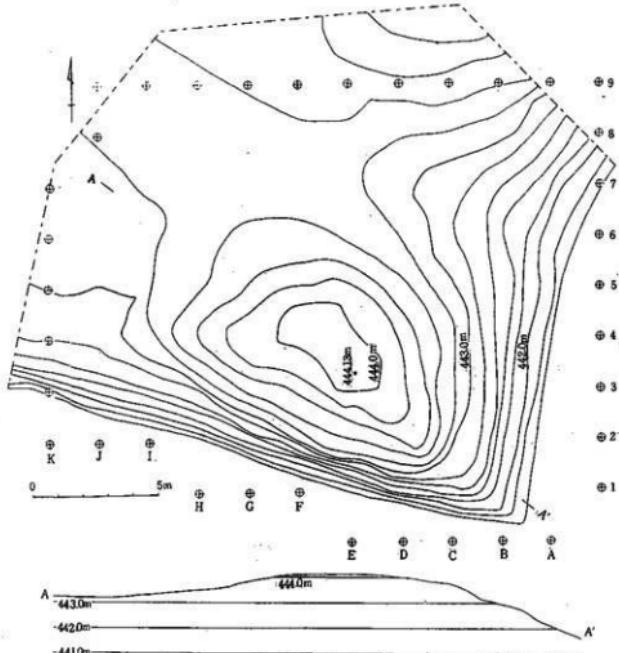
2 調査の内容

七瀬2号古墳

(1) 立地

長丘丘陵東の平坦部の田園地帯を南北に通じる国道292号線がある。七瀬集落の終る北方で、この国道から進入路を設けて、地すべり地形の緩傾斜面に住宅団地への道が造成されることになった。この道路予定地内に入ったのが、2・6号古墳である。2号古墳は、丘頂部東端部に、6号墳は、その崖下東30mの位置にあり、昭和50年に発掘調査した前山古墳は、北東50mの位置にあった。

2号古墳は、長野県史跡指定、七瀬双子塚古墳の北々東直線距離で、約150m地点の北緯 $36^{\circ}45'17''$ ・東経 $138^{\circ}20'52''$ 附近に位置し、標高は444mで、七瀬前山1247-1番地、保科孝一氏所有の松及び椎木の混じった山林であった。2号古墳南側約1/2程は、すでに崩落してなく断崖の様相を呈している。南側は、古くからの地にり地で、(正確には、表層の地崩れ)地元では通称、蛇抜け又はじやごやと呼称されている。融雪の季節及び長雨、豪雨の季節には、大なり小なりの地にりが起き、近年1976年(昭和51年)には、舗装道路に段差が出来て、交通不能となる災害も起きている。古墳の築



第2図 七瀬2号古墳全体図(調査前)

造による周溝の設置などの、地形の改変も助長されて、長年月の間に南半分が消失したものとみられている。

この附近の自然の層序は、第一層・腐植を含む暗褐色土、第二層・火山灰土の黒色土層、第三層・粘質土の黄褐色土層、第四層・黄色土で、以下砂礫など含む新第三紀の洪積層となっている。

(2) 規模・構造

七瀬3号古墳の西側の丘頂部の道（長峯街道）を南に100m程登ると、道路東側に、東西20m、南北18mの平坦面がみられた。この南東縁に七瀬2号古墳が所在した。古墳の南側半分は崩落して無く東側は、傾斜面となっていた。この様に原形は損失されていたが、復元すると、東・北17m、高さ0.7m程の円墳と考えられる。墳堀の北西側と北側は凹んでいたが、境界線は明確でなく埋没していた。ここにトレンチを入れて精査した。黒色土の落ち込みが見られたので、徐々に土を取り除き拡張した結果、周溝状の造構が、南西より北側、東側に向って半円形に巾約1.2m、深さ0.8m、長さ22mの規模で存在し底辺部は、ゆるいU字形を呈していた。

トレンチの層序は、C-C'で表土腐植土30cm、第二層・黒褐色土60cm、第三層・黒色土60cmを測る。B-B'北側で、表土40cm、第二層・黒褐色土40cm、第三層・黒色土90cmで、何れも周溝中央部附近の計測である。周溝からは、黒曜石片や赤切底の土師器片が検出された。この周溝造構は、墳丘聖域と周囲の隔絶の役割を果していたが、築造当初は予定されなかった土地の改変と崩落地形のため、周溝の降雨水の滞留が動機となったと推察され、南側半分の崩落をさせ、その地にリ面（滑面）は、約30mに及んでいる。

墳丘の築造をみると、残存していた墳頂部で盛土部分が約35cmしか確認されず崩落のため不明確であるが、盛土部分は僅かであり、掘削整形が大部分とみられている。従って残存の墳頂部分を掘り下げて調査したが、主体部の存在は確認できず、すでに崩落した部分に存在したと想定せざるを得ない状況であった。

（池田 実男）

(3) 遺物

土師環（第4図1）

周溝内より出土した内黒の环片で、口縁部から胴部にかけての1辺3cm程度の小片である。残部より推測するに、口径12cm程度、器高5cm程度を計る。

内黒の塗彩は、口縁より1cm幅位で、表面にまで及んでいる。また表面の口縁端部から1cm幅で、母指による横ナデ成形のため、若干外反する形態をとる。

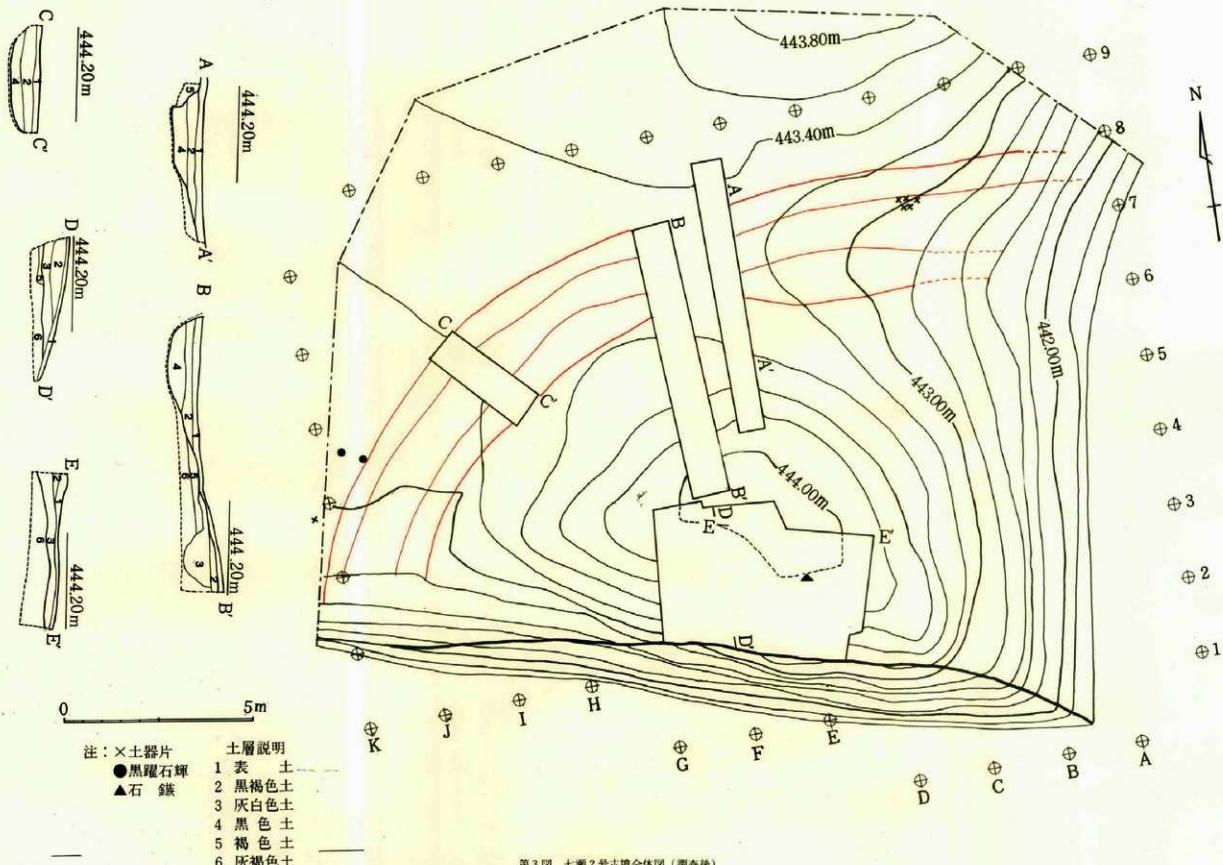
石鑑（第4図5）

粘板岩製の石鑑で、長さ3.5cm（欠損値）、幅1.5cm（最高値）、厚さ0.5cm（最高値）を計る。縁辺に極めて丁寧に刃部作り出しのための調整剝離が、ほどこされており全長と幅との比からも、スマートな美しい石鑑である。

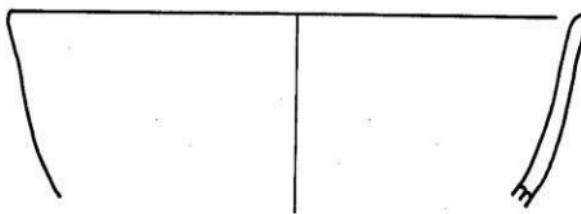
剝離片（第4図2～4、6）

2、3、6は黒曜石で、4は粘板岩製であり、すべて周溝より出土した。6については、端部に調整的な剝離が確認できるが、エンドスクラーバーであると断定してよいか若干疑問が残る遺物である。

（徳竹 雅之）



第3図 七瀬2号古墳全体図(調査後)



1



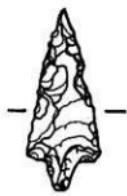
2



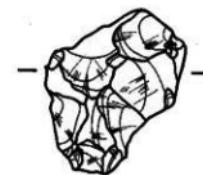
3



4



5



6



第4圖 七漸2號占墳出土遺物

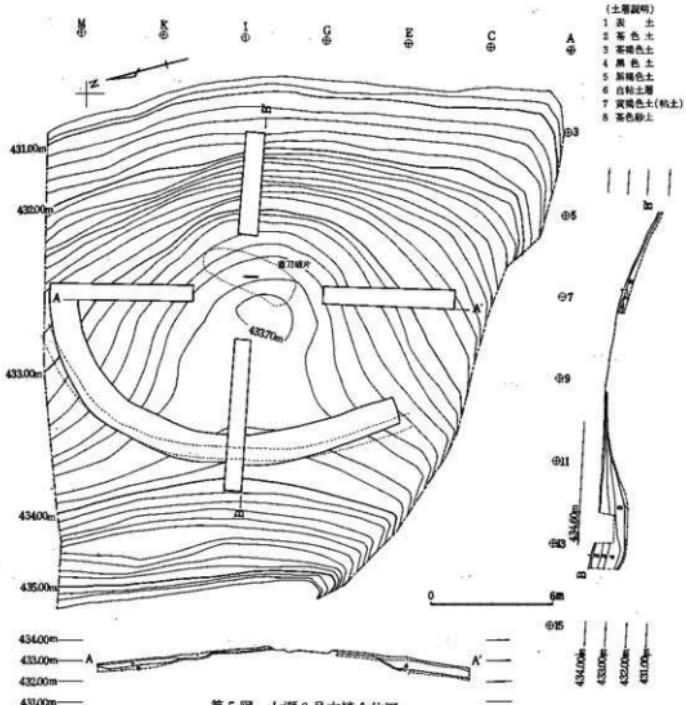
七瀬6号古墳

(1) 立地・規模・構造

6号古墳は、七瀬2号古墳中心附近から直線距離で、約35mの北緯 $36^{\circ}45'16''$ 、東経 $138^{\circ}20'44''$ 附近に位置し、標高は約433.7m。2号古墳との比高差は、約10.3mで七瀬前山1472ノ2番地、小池長重氏所有の畠地で、りんごが栽培されていた。この畠の東面は傾斜地であるが、西側は比較的なだらかで、畠地に隣接する北側は山林で、南側は急傾斜をなしている。

『七瀬前山古墳発掘調査報告書』に、小池長重氏が、昭和の始め頃（1929年頃）調査予定地の七瀬前山1472ノ2の畠より鉄刀の破片が出土したと、金井調査団長の報告文に記載されている。このため1986年9月16日（昭和61年）2号古墳の調査に続き、小池長重氏宅に赴き当時の様子を詳細に聞いて調査を開始した。本調査地は畠の開墾により、かなり改変をうけており中央が高い小さな段平地形を呈していた。

調査は先づ中心部とみられる地点にトレーニチを設けて表土（耕作土）を取り除いたが、下層は白灰色の粘土層で地山と判断された。ここに10cm内外の落ち込み面があり墓壙面と判断され中央部附近よ



第5図 七瀬6号古墳全体図

り鉄刀片が検出されたが、他の遺物の検出は、できなかった。墓壇は、長さ4.8m、幅1.7m、深さ5cmの検出面で、梢円形に近く主軸方向磁北45度東であり、前山古墳主体部と同じ方位で、高社山の山頂に向っていた。このように墳頂上は、ほとんど盛土がみられない状態だったが、墳丘調査のため十字形にトレーンチを入れた。

西側（山側）B-B'の層序は、第1層、表土耕作土10cm、第2層、茶色土40cm、第3層、茶褐色土30cm、第4層、黒色土60cm、第5層、黒褐色土20cm、第6層、黄褐色粘土層（地山）であり、現地表面から1.5mに周溝底面に達し、山側に半周して周溝がめぐらされていることが、その後のトレーンチ調査で判明し、幅約0.8m、深さ1.5m、長さ20m及んでいた。

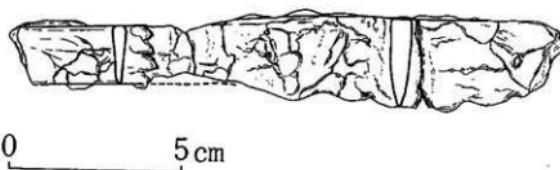
古墳造営は、この山側を半円形に切断して封土を造成し、この周溝線を墳丘の限界とすれば、東西18m、南北18mの西側より高さ1.2m（現在高）と思われる。（池田 実男）

注 参考文献

中野市教委 前山古墳調査報告書 1975年（昭和50年）

（2）遺 物（第6図）

墳丘中心部より出土した直刀である。欠損があり全長は不明である。幅は刃部で2.5cm、柄部で2.0cmを測る。



第6図 七瀬6号古墳出土直刀片

図版

図版 1



1 七瀬 2号古墳
(西北方より)



2 同 上
周溝部分



3 同 上
調査風景

図版 2

1 七瀬 6号古墳
2号古墳より撮影



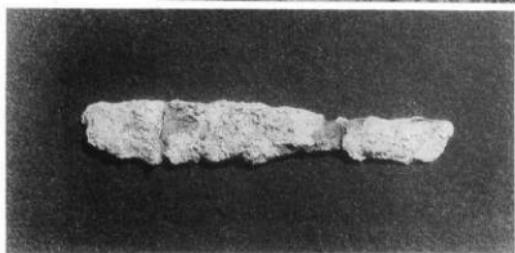
2 同 上
主体部位置図



3 同 上
直刀片出土状態



4 同 上
直刀片



七瀬 5 号古墳

七瀬5号古墳

1 調査の概要

(1) 調査に至るまでの経過

今回の調査は、一連の中野市西部丘陵土地利用計画にもとづき、七瀬住宅団地造成のため昭和61年6月19日に、長野県教育委員会文化課指導主事・地元学識者及び市開発事業担当課の出席のうえ協議した結果、発掘調査をし、記録保存を図ることで保護策案が決定されました。

その後、七瀬5号古墳は、その規模、保存状態等から考え現状保存ができないか再度協議があり、今後の長丘陵上の文化財の保護に関する対応を考えていく意味も含め、昭和62年6月30日に開催された中野市文化財保護審議会の席上で、この問題について検討をいただき、当市の新しい都市づくりを目指す基本構想に基づく西部丘陵の開発の公共性並びに重要性からも七瀬住宅団地造成の計画変更を及ぼす、現状での保存は不可能であるとの最終判断がなされ、発掘調査を実施し、記録保存を図ることに正式決定がなされました。そして、この決定に基づき昭和62年8月17日から同年9月30日までの予定で調査が開始されました。

(2) 調査団の編成

調査責任者 鳴田 春三（中野市教育委員会教育長）

調査団長 金井 淩次（日本考古学协会会员、中野市文化財保護審議会々長）

調査主任 檜原 長則（日本考古学协会会员）

調査員 池田 実男（長野県考古学协会会员）

酒井 健二（　　〃　　）

事務局 小野沢 振（社会教育課長）

小林 紀夫（同課、歴史民俗資料館管理係長）

徳竹 雅之（同課、学芸員）

協力団体 七瀬区

参加者 藤沢英夫、春日英男、樋口政勝、高山一雄、中村宗一郎、清水さゆり、神戸由美子、豊田美紀、割田弥生、湯本浩子、小越美智代、小山有里、市川和美、山崎健一、古田茂、根岸桂太、三浦四郎、金井英男、市村きよ子、藤沢高広、池田ひさい、渡辺金治郎、田中さだ子、三井博茂、馬場恒夫、阿藤英奈、阿藤千代江、山上嘉一、湯本栄一、栗原よしみ、山崎のり子、（順不同、敬称略）

調査の実施にあたり、長野県教育委員会文化課指導主事・小林季、小林秀夫両氏には、格別なる御指導をいただき記して感謝申し上げます。

(3) 調査の経過

- 8月11日（晴） 墳丘及び周辺の草刈り、清掃作業、三角点標高435.6mよりB・M標高433.01mを設定する。
- グリットを設定する。磁北線を南北方向にして、南周溝部より北へ番号で定め、東西線をアルファベットで東より始点として東北の杭をグリット番号とする。
- 8月17日（曇） 清掃、グリット設定作業、外形平板測量を実施する。
- 8月19日（曇） 清掃とグリット設定作業。
- 外形測量1/100、20cmコンタにて続行。
- 8月20日（晴） 清掃作業、枝払い、ほぼ終る。
- 平板測量、続行中。
- 8月21日（曇のち晴） 測量を続ける。
- 8月24日（晴） 現地にて調査団結団式、祈願祭を行う。市教委社会教育課、酢谷課長、小野沢課長補佐、ほか調査団出席。
- 外形測量続行。
- 周囲の清掃作業、テントを設営する。
- 8月25日（晴） 外形測量、終了する。
- 南北、東西線珪を残し、表土剥ぎ作業。
- 墳頂部は、暗赤褐色の粘土質で覆われている。
- 南周溝縁上部標高433.39m、同底部432.89m、墳頂部433.91m、北側墳裾端底431.89m、北側周溝端431.48mで、丘頂、尾根の自然勾配を切断し、盛土約1mの低平な古墳と、周溝発掘前のため、特に印象づけられた。
- 9月9日（晴） 周溝部、バックホーにて表層排土、墳頂部、表層剥土、須恵片、陶色I型式、和泉式高环、出土す。
- 9月10日（晴から曇） 周溝表土バックホーで排土、表土剥ぎ、
周溝内から土器片出土する。東側を除いて周溝がめぐっている。
- 10月5日（晴） 周溝精査。
- 第2回の墳丘測量を開始する。
- 10月8日（晴） 測量続行する。
- 10月9日（曇のち晴） 周溝精査、墳丘表土剥ぎ、測量続行、遺物の測点記入。
- 10月10日（晴） 前日に同じ、午前中で作業中止する。
- 10月13日（晴） 1日測量作業。
- 10月14日（晴） 測量作業と墳頂部発掘開始する。
- 10月20日（晴のち曇） 墳裾より断面レンチを掘り始める。
(この間、高梨館、田麦3、4、5号墳の調査を行う。)
- 12月15日（晴） 調査開始。
- 松株をチェーンブロックで抜く。
- 根の観察により、1m下に黒色土の存在が判明する。
- 墳頂部にテントを張る。

- 和泉式高坏、逆位にて坏面は、-30cmの位置にあった。
- 12月16日（曇・しぐれ）墳頂部掘り下げ、
　　烽火のあとか、北側2ヶ所確認。
　　墳頂部、土師、高坏、数個体、須恵器確認、土層平面観察の結果、高社山の方
　　向に縦状に土の色が変化（墓壙）の線が確認できた。
- 12月17日（雪）
　　墳頂部、堀り下げ続行。
　　西側薄黒色土層まで達する。
- 12月18日（晴）
　　西側、薄黒色土層。
　　墳頂より一m（旧地表土）に達するが、遺構発見できず。
　　土層断面の実測、用意する。
- 12月19日（晴）
　　土層断面図完成後、薄黒色土の東側の濃黄褐色土に、第一主体部を確認、短剣
　　1、竖櫛3、を検出する。
- 12月20日（晴）
　　第1主体部清掃。
　　構大小5、6枚、白玉、髮の部分と腕の部分の2群あり、連結した部分があつ
　　た。割竹形粘土床、方位、高社山方向。
　　写真撮影、実測を行う。
　　見学者、長針功、藤岡謹、土屋積。
- 12月21日（曇々晴）
　　第1主体部清掃、写真撮影、横断面を掘る。
　　取材、市秘書広報係 原、北信タイムス 黒島、朝日 進藤、信毎 依田記者。
　　視察、市教育委員、島田教育長、徳武次長、酢谷課長、
- 12月22日（晴）
　　第1主体部1/5実測図、1/10墓壙断面図、横断面トレンチ掘り、
　　見学者、畔上宣雄
- 12月23日（晴）
　　第1主体部遺物とり上げ
　　東列、竖櫛（6）の下に（9）の櫛があり、齒の残存部分の長さが4cm、剣の
　　南の群、白玉108個、北群84個検出。
- 12月24日（晴）
　　第1主体部は、原表土（薄黒土）を除去した面に構築されていた。墓壙は、南北3.9m、東西1.3mの規模と判明。
　　横断面トレンチ削掘で、東側に並列して、第2主体部の存在を確認、確認面の
　　差、約27cm上部に存在。
　　第2主体部上層土、暗赤褐色土、下層土、明灰黃褐色土、東側、墓壙界線、北
　　側も、ほぼ確認する。
　　見学者、市開発公社 城倉・黒崎両氏、阿藤英奈夫妻。
- 12月25日（晴）
　　第2主体部発掘、3個、直刀1振、櫛5枚、白玉、東西2群確認。
　　墓壙、深さ（確認面）-55cm、長さ4.2cm、幅1.5cm。
　　主体部、長さ約4m、幅80cm前後と推定され、南頭位に伸展幕されていたと想
　　定された。
　　見学者 畔上宣雄氏外2名、歴民 山田伊都子氏。
- 12月26日（晴）
　　第2主体部、遺構、遺物、写真撮影、

主体部北には、空間部あれど、遺物検出できず、
地層断面図作製。

取材、信毎 依田記者、市秘書広報係 原氏。

見学者、市開発公社、黒崎・城倉、高見沢氏、樋口政勝、古田茂、阿藤雄三夫
妻、栗原よしみ、阿藤英奈、高山一雄、渡辺正子、市村きよ子、

12月27日（晴）

第2主体部、方眼測量

主体部遺構、平板測量

第3主体部確認、墳頂部より-75cmの位置、小形堅櫛3枚、墓壙中央部分で検出。
縦横断土層図作製

見学者、土屋積、岡本定夫、渡辺正子、柴本義枝

12月28日（晴）

第2主体部、遺物とり上げ、直刀本質部残存、堅櫛、東4枚、西3枚、臼玉、
東群90個、西群121個、破片2個確認

第3主体部実測

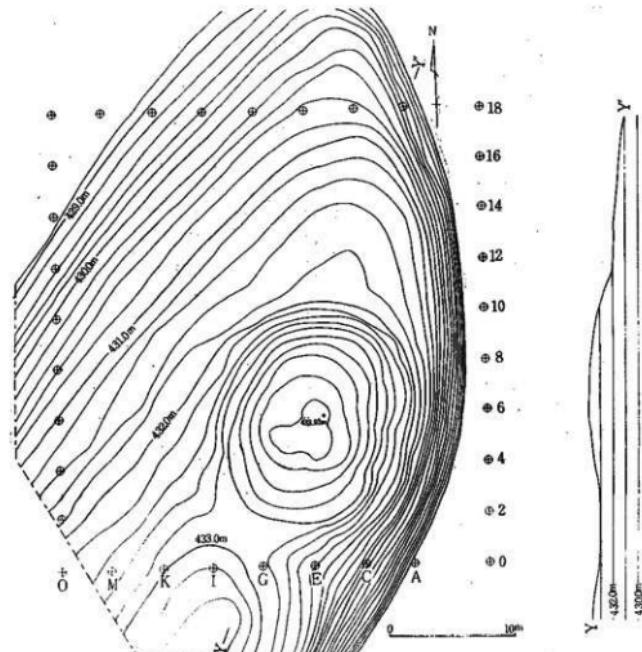
遺構全体写真撮影

調査終了につき、テント、器材、を撤収する。

2 調査の内容

(1) 立地・規模・構造

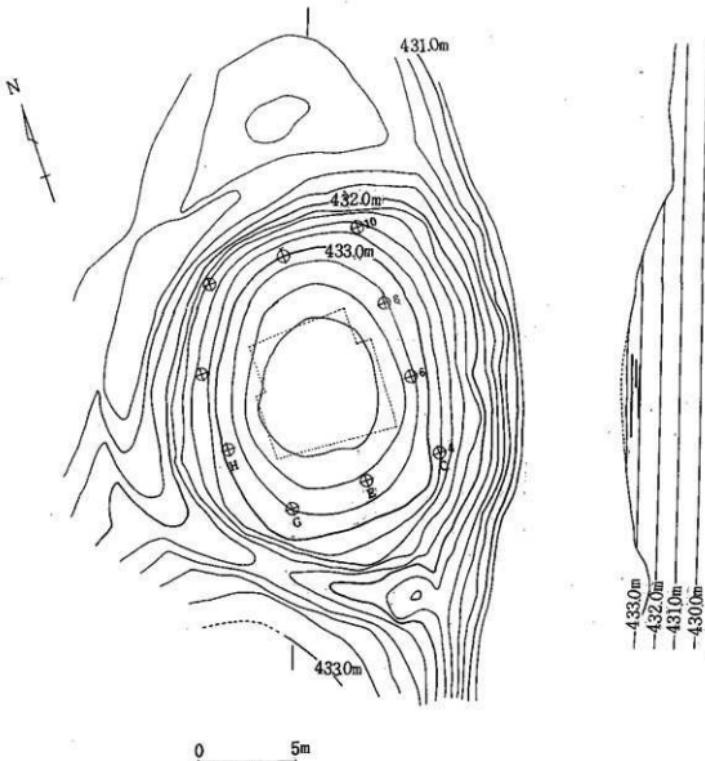
七瀬集落の北方、通称五輪窓（櫻畠）地籍は、段平地形をなしている。長丘丘陵の東側は概して急崖地形を呈するのに対し、ここは地すべり地形を呈している。これは5号古墳の所在する丘陵頂点を中心として、岩樊の壇出によって、隆起したもので、西方は、緩傾斜地形をなしている。東側の壇面が、急崖をなしているが、崩落せずに安定しているのは、墳頂下、約10mの位置に露出を見る安山岩の基盤上に存在するためと思われる。この下方、標高差32mの段平地（畠）には、土盛状の造構がみられ、昭和40年代の畠地造成時に消滅したと伝えられている。七瀬3号古墳との距離は、直線で1500m離れており、その間は、東方に向けてU字状の谷地形をなしており、中間地点の丘頂の三角点の標高は、435.6mを示し丘頂の傾斜は、北方に向って降下している。墳上からは、古代からの信仰の山高社山（1351.5m）を北東に望み、東方は、長野盆地の北端、中野平の扇状地から、山ノ内盆地を望み、背後の志賀高原をはじめ上信国境の三国山脈の山々を望み、右手の前面にみるピラミット形の三沢山（1504.6m）の姿は印象的である。西方は、千曲川の低平地を越えて前面の低い山なみの上に北



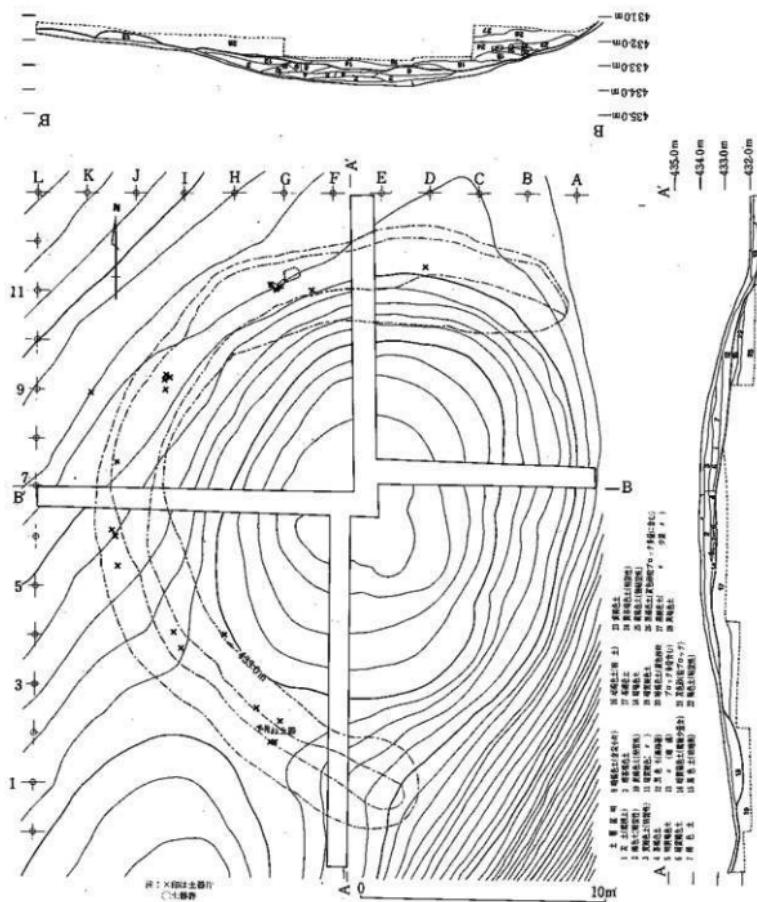
第7図 七瀬5号古墳墳丘全体図（調査前）

信五岳の均整のとれた雄姿を望むことができる。

また墳丘の規模は、北方に下降する丘頂平坦面を利用して墳丘を構築し、基底部の長さは、南北20m東西は18mを計測する。墳頂端線を画するように、東側を除いて幅2mの周掘がめぐっているが、東の墳頂端線は、明確でない。基底部のレベルに差があり、古墳の高さは、南側で1.7m、北側で2.5mを計測する。従って墳丘の築造に当っては、南側の高い丘頂部を切断、掘削して盛土に用い、西方北方も周溝を造り、若干の切土をして封土に用い、東側はそれに合せてアランを造成している。このように、墳上の最高点より、約0.7mで、旧地表面に達し封土構築は、見かけ上よりは、土の移動量が少ない。また規模の割に低平な古墳との印象をうけ、築造時の被葬者の背景を窺せるものがある。この僅かな封土も、版築の方法で築造していた。封土は、土のみで築かれ、葺石などの外護施設は検出されず、埴輪なども、みられなかった。



第8図 七瀬5号古墳墳丘調査測量図（調査後）

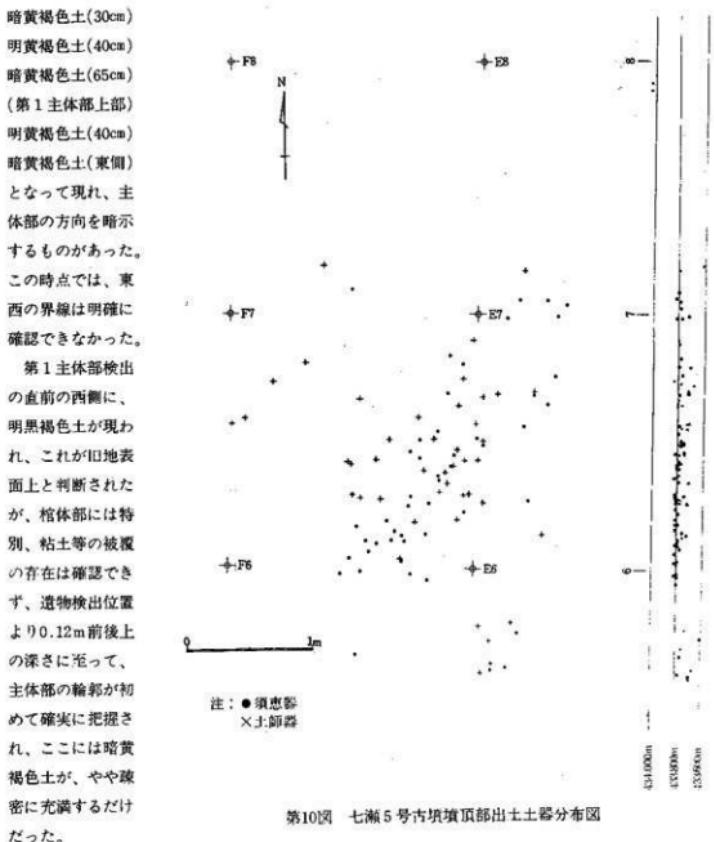


第9図 七瀬5号古墳 墳丘断面図

(2) 遺構

a 埋葬施設と供献、副葬品の位置

墳丘の中央部E 7 ~ E 6の3mには、供獻祭肥に用いられたと思われる土器が、破碎された状態で検出され、一部は墳頂線まで転落していた。墳頂部の土器を取り上げ、掘り下げるに、高社山の第2峯(滝の沢山)に向って走行する異なる土の色の界線が、西側より明黒褐色土(幅40cm以上西側)、

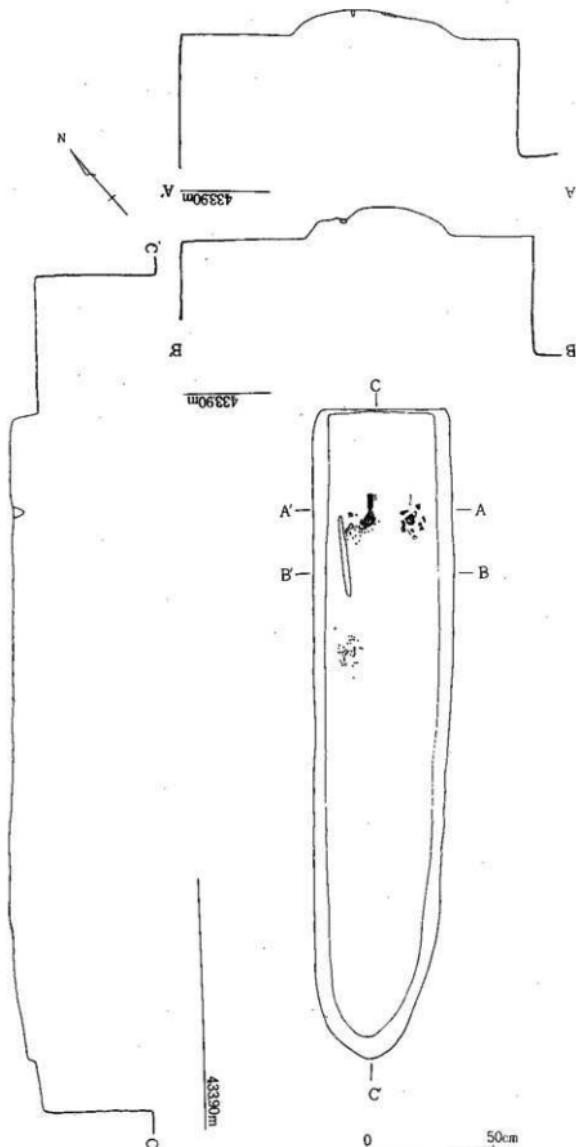


第10図 七瀬5号古墳墳頂部出土土器分布図

これより前、墳頂部より0.4m掘り下げた面は後に確認した墓域北側の部分で、木炭片の集中する個所が検出された。(第15図 (●)の部分)、東側のものが、やや大きく不整形で、最大0.7×0.4m、これより西、2m離れて同じく0.5×0.35mの痕跡が認められた。

第1主体部確認後、土層の切り合関係を照合した結果、墓壇は、磁北よりE40°振れる方向で、長さ(南北)約3.9m、幅(東西)約1.4m、深さは墳頂部最高点より約0.85mである。その中央に、地山土に特別に加工せず、U字状に掘り凹めた状態で、長さ2.5m、幅約0.6mの削竹形の棺体部が所在し、中に、やや軟らかい暗黄褐色が埋設していた。この面の地山土は、明黒褐色土で旧地山面の黒土層を約0.2m取り除いて掘り凹めた位置で墳頂部より検出面で-0.9m、棺体部の最新部で-1mを計測する。この主体部は、幅約0.6mは確定値といえるが、南側の長さは、やや明確を欠いた形

となっていた。検出された遺物は、主体部北側より0.33m南西側に、豊櫛大小2枚以上と白玉84個が、一団となっており、中には連なっていたと思われる状況で、滑石製白玉が検出され、それに接して長さ0.33mの短剣が、茎を北にして西側に置かれていた。豊櫛は、西側と対になって東側にも一群があり、大形品3個体以上確認されたが東西群とも長年の根株の活動等によって細片化したものが多く、実数は不明である。滑石製白玉は、短剣の先の0.15mからの位置にも一群があり、これも連結した状況の個所もあり、108個検出された。このような遺物検出状況から美豆良に結った被葬者が、北頭位に伸展葬され、右手位置に短剣を置き、滑石製白玉は玉の模造品として棺内



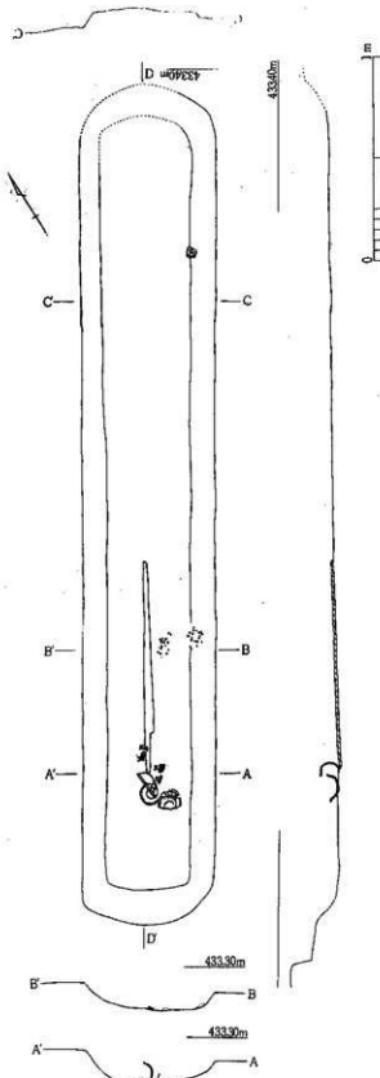
第11図 七瀬5号古墳第1主体部実測図

に埋納されたと考えられ、地山をやや掘り凹めた所に、割竹形の木棺本部（舟形？）を安置し、埋葬したものと考えられる。

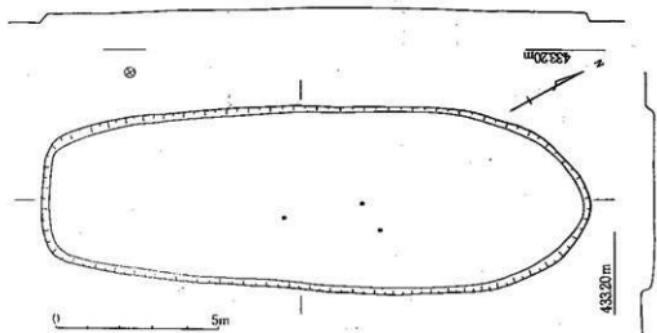
第1主体部の遺物のとり上げが終了し、横断面を作成するため、東方に幅0.3mの試掘杭を掘り進めていると、直刀の鏃を見見した。これは、第1主体部墓坪東側上、0.25mの位置で、第1主体部とは、北側がやや狭く並列しており、中央部で二者は約0.8m離れていた。埋葬の深さは、III地表面の薄黒色土を掘り凹めた程度で、主体部には、赤褐色土が被覆し、確認できる深さや状態も第1主体部で記述した如くであった。

墓坪の大きさは、長さ4.7m、幅は中央部で1.95m程度と推定され、深さは確認面より0.2m強と計測されている。これは墳頂部より0.55mの位置に相当する。中央に位置する主体部の長さ4.05m前後、幅約0.8mで、方向は、磁北E30°であった。

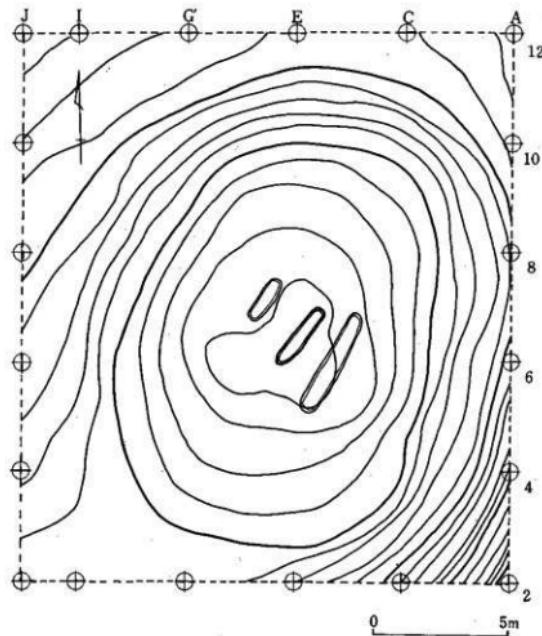
遺物は、南側、主体部造部より北に0.55mの位置で、まず笠形土器が確認された。盤は3個で、南側のものは、1/3強の欠損があり（第19図1）これと平行して正位に1個あって（第19図2）その上に、この3個中、最大な盤が内部を斜め西面向けて横位にあつた。この盤にはば接して直刀の茎が接しており、その茎を中心にして東西に分けられる二群の經營が存在し、斜位にあつたり細片化していたが西群は大中小4枚以上確認



第12図 七瀬5号古墳第2主体部実測図

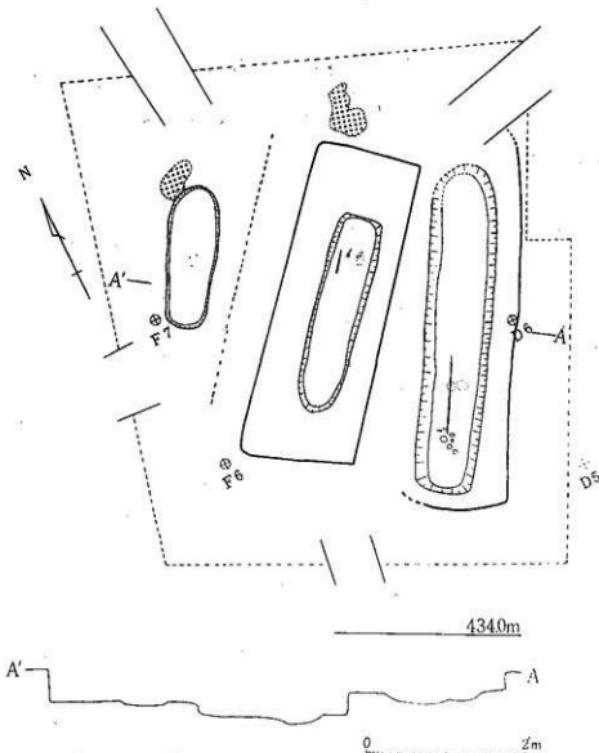


第13図 七瀬5号古墳第3主体部実測図



第14図 七瀬5号古墳主体部位置図

され、内、
小形櫛は、
茎下に銹化、
附着してい
たもので、
東群も、大
中5枚以上
存在してい
たと思われ
る。直刀は、
最大幅4.7
cm、長さ1.
01mの長大
なもので、
刃部を東に
向け、茎を
南にして置
かれていた。
この直刀の
刀身の中辺
東側に滑石
製白玉が、
やはり二群
に分かれて
存在し、両
群121個(破
片とも)東



第15図 七瀬5号古墳主体部実測図

群97個が数えられ、連結した個所もみられた。

この様にみてくると、第2主体部の被葬者は南頭位に伸展葬されたと思われ、頭位の櫛は、その下より櫛の検出がみられなかった点から推して今後に検討の余地を残すが、土器枕の可能性も考えられ、横位の櫛は、顔面上から転落したともみられ、墳頂部の供獻された盤とは異質のもので、これによって被葬者の性格が検討される材料となる。白玉2群は、ほぼ手の位置にあり、両手に纏っていたとみられ、直刀は、被葬者の胸部を中心に上に置かれていたものと思われ、前述の直刀の茎下に、小形の堅櫛の附着も、これも裏付けている。

第3主体部は、第2主割部の発見によって、第1主体部の西側に埋葬部が存在する可能性が大きくなつたため、西に拡大して検出されたもので、明確に平面に顯在化したのは、墓壙の底より僅かに5cm上層で、周囲は黄褐色土に黒色土が僅か混在するのに対し、ここは、黄褐色土が單一で間隙のみられるプランを確認したもので、第1主体部より西、1.4mの位置で、磁北よりE28°振れた方向で、

確認面は、墳頂部より0.75m下で、長さ1.75m、最大幅0.6m、南は隅丸、北は階円状を呈する墓壙で、確認面より5cm下が、平面の墓壙底で、この平面上には中央部に小形の堅拂3個があり、歯部を南に向けた状態で、検出されたのみであった。これによって、納棺材の存在は、墓壙の形状より否定的で、櫛の検出位置により、被葬者は、屈葬されていたと考えられるが、老幼、身分などの問題は、今後の検討課題である。

この様に第1主体部の被葬者は、北頭位、第2主体部の被葬者は、南頭位、第3主体部の被葬者は屈葬と、それぞれ進った埋葬法が1つの古墳にみられる結果となり、その主体部の方向も、前山古墳の調査以来時、高社山の方向に向いているのは、神宿る山（神奈備山）としての信仰の歴史が、古代に、さかのばることを示している。

(3) 遺 物

今回の調査で、検出された遺物は、次の通りである。

○墳丘部

〔須恵器〕	縹 1	短頸壺 2	無蓋把手付高环 1	
〔土師器〕	(和泉期)	高环 15個体以上	器台 3個体以上	盤3個体以上
		壺3個体以上	手づくね壺形土器 2個体 破片	
	(国分期)	环 4個体以上		

○第1主体部

短剣 1	堅拂大形 4枚以上	小形 1	白玉 192個
------	-----------	------	---------

○第2主体部

直刀 1	堅拂大 8 中 1 小 1	白玉 218個	鏡 3個
------	---------------	---------	------

○第3主体部

堅拂小 3

A 墳頂部出土の土器

a. 須恵器

小形無蓋把手付高环 (第16図1)

細かく破碎され、环部のみ約1/2接合できただけで、把手は凸帯の上下につけられるが、基部から、欠損し、脚の接合部には4ヶ所の透しが認められる。环部の直径12.1cm深さ3.6cmで、半球状に近い。

环部の立ち上りをみせている。外面の口縁部2cm下に凸帯が1条めぐっており、内外とも回転ヘラ削り痕がみられるが、脚内はヘラ削りによって正して焼かれ、环内は、黄褐色（黄赤の黒づんだ色）の自然灰釉がみられ、外面と胎土は、青灰色を呈して粗粒である。

縹 (第16図2)

破碎されており、口損部から上は、波状文が僅かに観察される程度で、他は失われて口縁部の形態は不明である。推定器高13.6cm 残存の口縁基部の頸部までの高さ9.1cmで、最大幅は、櫛拂波状文と凹線の間にあり15.3cmを計測する。肩部は、自然灰釉で黄褐色を呈し他の内面、下半部、胎土は、青灰色を呈している。胴上半部に10本単位の波状文がめぐり、これの上下を回転ヘラ削りによって上下の部分を擦り消し、上下に凹線をめぐらしている。内面は、擦り消しされて叩打痕はみられず、外

面の脇、下半部には、指紋が薄く残されているほか、削りとナデ整形されたままである。

圖 (第17圖)

破碎をうけて45片が残されていた。口縁部、底部が発見されず形状は不明である。復元の頂部の直径20cm、最大幅は胴上半部にあり、42cmと推定される。口頂部から肩部は、黄褐色で、以下は青灰色を呈し、内面と胎土は、灰白である。外面には、右斜状に平行叩打痕が、全面に残されている。内面は、同心円叩き痕が、僅かに見られるほかは、横方向へのラözによって、丁寧に擦り消し調整を行っている。

図 18 (第18図)

破片数は50片を数えるが、口縁端部を除いて推定復元が可能である。残存高さ26cm、最大幅は、胴上半部にあり、32.6cm、胴部は丈のつまつた球状を呈し底部は扁平に変化している。なお口

頸部には、接合痕がみられる。頸基部の破断面に凸帯の凹部が観察され、口頸部から胴上半部までは、黄褐色の自然釉が器面に附着し、地色はセピア色を呈する。胎土と底部内面も同色である。胴下半部は暗青灰色で、内面は主として青灰色を呈している。外面の胴中部と底部には、平行叩き目が残されているが、擦り消された部分が多くみられる。内面も叩打痕は、擦り消されて下部においては、波だって、器面があれいる部分が見え隠れされる。胎土のセピア色は、還元焰焼成されたもので、他の須恵器とは、焼成法や窯が異なっていることを示している。なお火熱によって剝離した破片も存在する。

b 土師器

土師器には、和泉式に比定されるものと、平安時代の国分期に属するものとの二種類がある。前者は、胎土に砂粒が少なく赤褐色を呈し、器面にはヘラ磨き痕が、顯著にみられ焼成はやや軟質である。

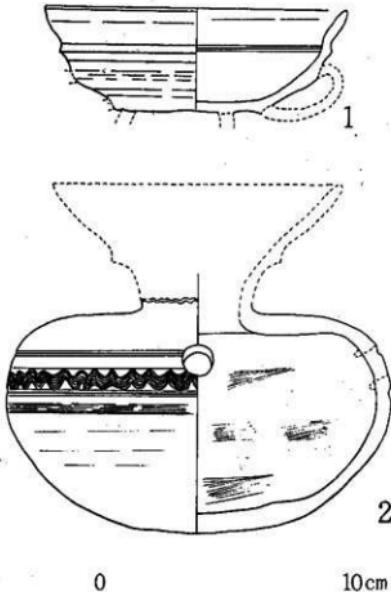
後者は、赤褐色と、黄褐色を呈する坏の破片で、石英、長石粒が胎土に多量にみられ、底部に糸切痕を残す。

高坏

形態により次の如く分類した。

(a) (第19図13・14)

復元しても完成品ではなく、坏部との形状が不明のものばかりである。脚部が比較的短かく大きく「八」字状(約30°)に、開脚し襠の接地部が僅かに大きく聞く器形で脚内部には、指頭痕、ヘラ削痕を残している。坏部との接合は、連続している。14の残存法量は、脚部径11.2cm、脚部の高さ約6cmで



第16圖 七瀨5号古墳出土須惠器高杯健南酒器



第17図 七瀬5号古墳出土須恵器裏実測図

ある。破片数を検証すると、この種の高環が多数派を占めているとみられ、在地色の強い高環の型式とみられている。

(b) (第19図16、20)

形態は、a種より脚部が長く中ほどが膨みをもっている。裾部は、円盤状をなし、脚部とは緩い傾斜で接合させている。环部外面下部には、大きな稜を作り出し、ここより大きく外反するが、口縁端部は直立ぎみであり、环内下部は、中程が高い平坦面に、つくられている。この高环の造型をみると、裾部の円盤部と脚部は、基本的には「T」状につくられて、その上に环部をのせる作業工程を経て、成型されたとみられる。20は、口径16.7cm、復元推定器高17cmの大形品である。この種の高环は3個体程度存在したとみられる。

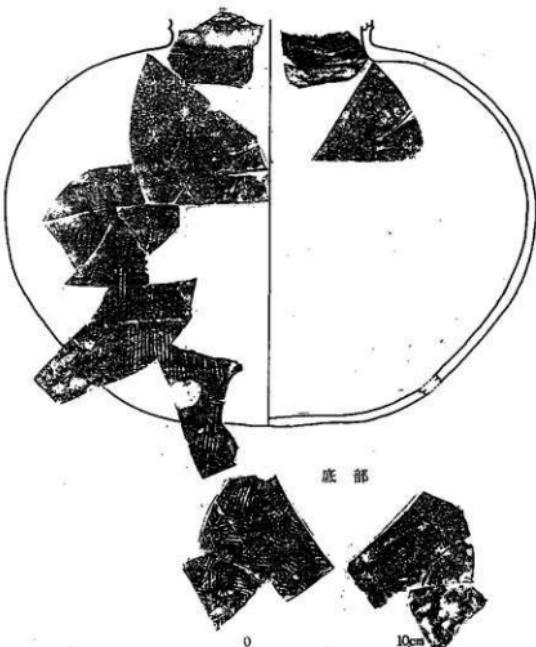
器台 (第19図15・17・19)

15・17は、天地が逆転し高环脚部の可能性もみられるが、器面の観察により、19は脚部の装飾的要素により器台として図示した。後の部分の接合は、接合面に平行な刻みをつけ、接合を容易にする作業工程を経て製作されている。19は脚部の接合復元で、底部直径22.7cmの大形品で三段の稜をもち、稜の部分の接合は、先に述べた如くで、この上に円筒状の脚部が附着されていたと観察され、外面の接合部下には、ヘラ状工具による擦痕が、左斜状に密に継らしているほか、ナデによる擦痕が稜の間の円周に顯著にみられ、回転力によるものと観察され、この様な稜の存在は、須恵器の器台の凸帯の

盛行に影響をうけて
製作されたとみられ
る。

盤 (第19図4・
5・6)

外形は、半球状に
成型され、いずれも
底部は厚く、口縁部
は器壁が薄く、直立
または、やや内弯し
安定度に優れている。
4の法量は口径13.1
cm、高さ6.1cmで外底
中央が、直径1.3cm、
深さ0.4cm程凹んで
いる。内面は良く撫
でられているが、外
面は、ハケ目痕や、
指頭による整形痕が
みられ、器面の調整
は、粗である。他の
5・6の土器も、ほ
ぼ同様の成形によっ
ている。



第18図 七ヶ所5号古墳出土須恵器裏実測図

壺 (第19図7・10)

7は壺の口縁部の破片で、胸部のふくらんだ器形が想定される。口縁部は短く、外反するが器厚は、内面より減じて、薄い口縁端部をつくっている。推定口径15.8cmで、口縁基部には、接着痕がみられ、口縁部には、回転による擦痕が残されている。10は底部が突出しない壺の底部破片で、外面の赤褐色に比べて内面は、暗黄褐色を呈している。これも胸部のふくらむ器形が想定され須恵器からの影響が考慮される底部破片である。その他に底部直径約8cmの突出する底部の破片も存在する。

坏 (第19図8・9)

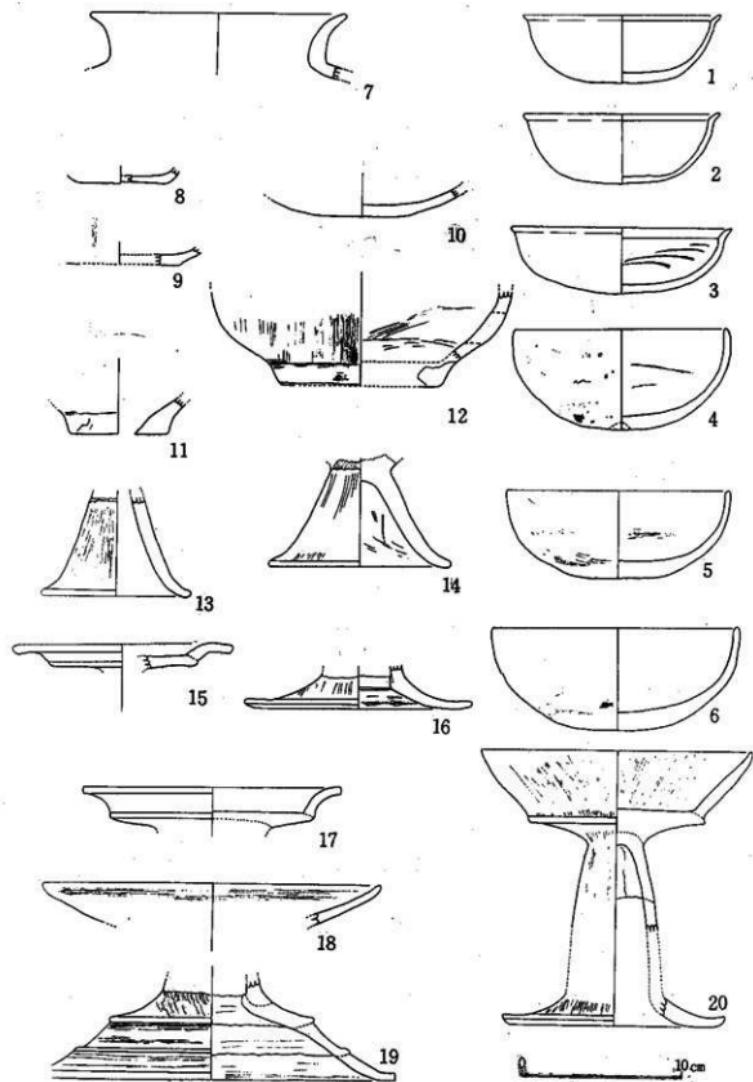
平安時代の国分期に属すると思われる坏の破片が續かなくて墳頂部より混在して65片、4個体以上、検出された。赤褐色から黄褐色に属する色調で、胎土には、石英粒など多く認められている。

糸切底の破片もみられるが、総的に磨滅が進んだ坏の破片が多い。

B 周溝出土の土器

手づくね土器 (第19図11・12)

周溝の南側の細片で検出されたもので、いずれも胴下半から底部の手づくね土器で、祭祀の色彩が



第19図 七瀬5号古墳出土土師器実測図

濃い粗製品である。胎土には、多量の石英粒を含み、焼成は脆弱で底部は突出している。11は明茶褐色で黒斑もみられ、12は薄黒色を呈している。11は底部の中央の器厚が薄く穿孔されていたごとき状態で、内外に指頭の整形痕を残している。12の外面は、構造工具の整形痕を残し、内面は指頭圧痕八ヶ目痕を残している。

C 第2主体部出土の土師器

盤（第19図1・2・3）

1は1/2強の欠損のまま、2、3は完形品で埋納されていた。色調は黄褐色を呈するが、1、2は外底部に、3は内外底部に黒斑を有する。焼成は脆弱で、砂粒の混入度は、墳頂部検出の和泉式土器より顕著である。1は口径12.2cm、器高4.2cmで、内外とも丁寧にヘラ磨きされており、口縁端部が外反している。2も、ほぼ同様である。3は口径13.6cm、器高4.1cmで前者に比べて浅く皿状を呈しており、外面は整形が、やや粗で削痕などみられるが、内面は良好磨かれているが、ヘラによる痕せきも残されている。この盤の形態的特徴は、口縁部に面をつくって大きく外反することであり、墳頂部の土器と胎土、色調が大きく異なることである。

3 小 結

（1）土師器について

中野平地方で確認された、古墳時代中期の土師器の指標は、昭和44年秋、畑地灌漑の工事中発見され、緊急発掘調査が行われた。新井大ロフ遺跡の農耕儀礼に伴う祭肥址に多量に埋納されていた、和泉式（新）に併行すると思われる土師器の土器群である。高环は、比較的足が短かく稜線が形骸化の方向にあり、底では、確実に須恵器の模倣したものが存在し、盤は内面に黒色処理が施されたものがあり。初期須恵器の範疇に属する蓋環、底も検出されている¹¹。従ってこの前の段階ぐらいに、この地方に須恵器が搬入受容されていたことを示唆される。さてこの大ロフ遺跡の前段階の土器は、長野駒沢新町遺跡の祭祀址で発見されており、1号址発見の高环に、七瀬5号墳の高环（第19図20）の裾部、环部の形態が、きわめて類似している。これは畿内の布留式土器の後半の段階に併行するとされており、初期須恵器の出現と期を同じくしており、同じ1号址併出の土師器底の鋸歯文（三角形内斜線入文）は、和歌山県六十谷遺跡出土の家形埴と壺の外面、大阪府野中古墳の有蓋高环の蓋、岡山県駒山古墳（全国4番目の前方後円墳造山古墳の陪塚）の造り出し部採集の有蓋高环の蓋にあたる小破片など、それぞれの文様が、朝鮮半島慶尚南道華明洞7号古墳土器台の文様と共に通し、同じ系譜上につらなることが認められている¹²。現在のところ、駒沢新町遺跡では、須恵器は確認されておらず、未発見か、出現前夜の様相を示している。

稜線部で3段に接合している器台の脚部（第19図19）同じく器受部の稜線で接合している（15・17）は、規格化された中で土器製作が行われたことを示し、各部位の製作が、分業的に行われ乾燥に合せて多量に製作してゆく専門工人集団の存在を示唆し、省略化がみられ、在地色の強い新井大ロフ遺跡の土器様相に比べて搬入品の色彩が濃いと考えられる。また高环（13・14）は、在地色の強い高环の脚部とみられる。盤の口縁部の形態も、直立縁のものと、面をもって外反する二種類が存在し、これは駒沢新町段階から新井大ロフまで継続してみられ、今回の調査では、両者の用途が区分されてい

た。これは偶発的なことだったか意識されたものかは、今後の検証をまたねばならないが、後者の形態は、先に挙げた華明洞の2号墳出土の須恵器高杯の杯部口縁に類似しているのが注目される。一般的な通説に従えば、和泉期は五世紀第3四半葉まで、鬼高窓の開始は、五世紀第4四半葉とされており、従って新井大ロフ遺跡は、鬼高窓開始併行の土器が、みられるから墳頂部検出の土器の様相は、この前段階とみられ、駒沢新町段階と一部併行した後続段階と考えられる。なお、七瀬双子塚出土の土器に（第19図15・17）と同じ形態の破片がみられることを附記しておく。

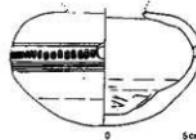
（2）須恵器について

古墳時代に属する初期須恵器が、中野平地方で確認されている出土地は、今回で4例目である。昭和61年秋、金鎧山古墳発掘を記念して植えられた桜の老樹が、前年の台風で倒れ、その大きな根株中より須恵器、土師器の破片が採集され、以後機会があるたびに採集に、つとめられている。検出位置は、西南の墳裾で、主として地山層上に存在した黒土が覆っていた。把手付無蓋高環、环蓋、胞、器台、有蓋壺、広口壺、二重胞などの破片が採集されており¹²、二重胞は、長野県で3例目で鳥羽山洞穴出土品より新しく森2号墳出土品と同時期とされ、陶邑I型式3段階期と比定されるが、やや剥落する製品も見受けられ、器種の構成も高環が3個体以上、器台の存在、二重胞など供献祭祀に用いられた器種も多く優品が使われている。この様に主体部の副葬品の多彩さと合せて、被葬者の生前の身分を示しており、須恵器の組合せ年代に差のあること、主体部副葬品よりも須恵器の年代が、やや剥落する様相を示しているのは、製品が陶邑産とみられることから被葬者の定着、或いは権力者としての成長が前段階に行われていたと考えられる。

新井大ロフ遺跡では、壺環、小形胞などが検出されている。蓋環は、やや軟質な青灰色の焼成で、金鎧山古墳の环蓋と似た焼成であり、小形胞は胴部の刺突文の上に一条の凹線、下に三条の凹線のみられるもので、口部の大きさの割合が大きいなどの特色から陶邑I型式4段階の製品と思われるが、土師器の破片、完成品合計1235個のうち、須恵器が3個体の検出にとどまっている。なお図示した他の胞の下半部の底に「+」字の箇記号が、みられる。

紫岩古墳は、中野市と山ノ内町の行政界の夜間瀬川左岸の箱山より分れた、尾根上に所在し小口積と平盤石を用いた小石室内と、破壊され散乱する石の間から、須恵器が検出され、石室内から高環、土師器盤、その他から蓋環、胞、などの中破片が採集されている。

蓋環は、陶邑I型式5段階の製品に似ており、高環は陶色には、みられないもので地方窯の製品といわれている¹³。胞は自然灰釉によって黒黄色の釉に、おおわれた製品で、表は焼成が軟質な暗灰青色を呈している。この様に胞は陶邑産の可能性を残しているが、他は地方窯の製品とみられ、陶色産に似た製品が、地方窯では時期が下ってみられる¹⁴と、されているが高環の脚部が長大化されなく須恵器が石室内に副葬された、この地方の初見の古墳とすれば、陶邑I型式5段階か、II型式のI段階の併行と考えられ現在は金鎧山古墳の須恵器の時期からは、尾張などの地方窯も操業を開始しているとされている。さてこの様な限られた地域の初期須恵器のあり方から、本古墳出土品をみると、表は、（1）は還元焰焼成、（2）は高温で焼かれたままの胎土で、少なくとも同一窯同時の製作でないことは明らかであり、技法も外面の平行叩き目そのままで、半分擦り消しの違いと、内部のヘラ拂での方法も違っている。次に胞をみると、丸い器体で、胴部に、凹線と横描波文がみられる。このタイ



第20図 新井大ロフ遺跡出土須
恵器胞 実測図

アは、陶邑では高蔵（TK）23型式の段階で姿を消すが、地方窯では、次の段階にも残るとされ⑩体部の櫛描波状文は、陶邑には比較的少ないとされている¹¹。本例と似た鉢は、埼玉県松山県東古凍下山出土品¹²（埼玉県立歴史資料館蔵）に見られるが、本古墳出土墳は、陶色釉に近い様相を示していると考え。小形無蓋把手付高環の、凸線、环内の自然灰釉など、需要地の置かれた環境によって器種の組み合せ、内容の貧富など、さまざまな問題を提起するのが、本古墳例とすべきだが、陶邑I型式3段階の併行するが妥当と考えられ、現在のところ中野平の古墳祭祀にみられる須恵器の初見と考えてよいだろう。

（3）平安時代の土師器について（第19図 8・9）

墳頂部より平安時代の国分期に該当すると思われる环片が、網片となって65片存在した。このことは、後の時代になって、偶発的に遺棄されたとも思われるが、時間的経過の中で、不確定な要素が否定できないが、私の体験したことが次の二件ある。

昭和62年8月、金鐘山古墳の土地所有者で、大正14年发掘された、中野市新野の松山寺住職の後嗣、本藤秀明氏に、出土品が東京国立博物館に収蔵されなかった遺物の残片を所有しておられるということで、お訪ねしたことがある。即ち、鐵鏃破片多数、ヤリカンナ破片？、直刀破片5片以上、劍破片3片などがあり、これと一緒に糸切底の环破片があった。この時は、混入品と思って特に留意もしなかった。長野県考古学会に須恵器研究部会ができて、この地方の須恵器の資料を収集することを目的として、夜間瀬の畔上秀雄氏の紫岩古墳出土の須恵器を再点検してみると、ここにも同様の环が存在した。今回の七瀬2号の周溝からも、内黒环の破片が検出されたが、これは、特に古墳祭祀とは結びつくとは思われないが、5号墳の場合は墳頂部出土なので、特に注意が必要で今後類例の増加をまって、確定できる性質のものであろう。墓制は、保守的色彩が強い事は、誰しも異論のない處である。律令制が崩壊し、興亡流離の中世の時代を迎えるまでは、祖靈を祭ることが、同族の紐帶を強化する意味からも継続された、と推論したいのである。更に今後の検討課題としたい。

（4）武 器

短剣（図21図）

第1主体部より検出されたもので、全長33cm、身の長さ24.7cm、茎の長さ8.3cmを数え、関は片側は直角をなして柄部より0.5cm、片側は0.25cmで斜状の関である。茎部は、中心部で厚さ0.4cm、幅1.3cmの長方形で、目釘穴は確認できない。身の長さは0.6cm、最大幅2.2cmで銃は、銹化が著しい面もあるが、確認されてない。身は木製の鞘に入っていたらしく木質部の腐朽物が附着し、茎部にも同様に残っている。鰐口部に幅0.3cmの管状の痕が銹に附着し、下げ緒と思われる痕も認められた。この短剣の大きさは、弥生時代の銅剣と同じ長さで、形式の上からは、古い様相を示していると思われる。

直刀（図22図）

第2主体部より検出されたもので、長さ101cm、身の長さ82.5cm、棟の厚さ0.9cm、茎の長さ18cm、関部の長さ0.5cm、茎は、目釘穴の部位で厚さ0.6cm、幅2.2cmの長方形で、茎部に木質の腐朽が附着し、身の部分にも附着して殺た。目釘穴は、中心に一孔認められ、身は、平棟、平造り、鈍はふくら切先の長大なものである。片面の茎に堅柄（幅2.2cm）が、齒部を刀身に向けて附着している。田麦林畔2号古墳出土の長さ110cmの直刀には及ばないが、それに次ぐ長大なものである。まだこの時代は、儀伏用と丘伏用（実戦）の二者に分かれず、從って接も簡素であるが、これだけの直刀になると、身分や出自を誇示する要素が秘められていたと思われる。

(5) 装身具

豎櫛

結歯式の飾櫛といわれているもので、竹ヒゴを糸で編んで黒漆を塗った歯の長い櫛で、漆の被膜だけが残っている。上に、つまみ（角状突起）のあるもの（第23図2・4・8・9）と無いものの二種類がある。遺存状態の良い（第23図3）の櫛をみると、幅最大径4cm、縦が歯部まで3.7cmを計測する。この残存部の観察によれば、横0.12cm、縦0.2cmの隅丸長方形の断面の竹ヒゴ13本を頭部より1.4cmの所で糸で編み、U字形に曲げて、頭部より3.70cmの位置で、直徑0.15cm程の竹ヒゴを軸（質）にして横に糸で編んで固定している。その上に帯状に糸を約1cm巻いて更に固定している。歯の長さは残存せず、不明であった。（第23図2）の櫛は、長さ2.3cm以上、幅0.6cm、厚

第21図 七瀬5号古墳第1主体部出土 短劍実測図



第22図 七瀬5号古墳 第2主体部出土 直刀 実測図

	図版番号	位 置	大きさ	備 考
第一主体部	1	東 側	小 形	
	2	"	大 形	(6)の下の櫛
	3	"	"	(6)
	4	西 側	"	南
	5	"	"	北
第二主体部	6	西 例	大 形	南
	7	"	中 形	
	8	"	大 形	
	9	"	"	北3
	10	東 側	"	南2
	11	"	"	北1
	12	西 側	"	
	14	東 側	"	南
	15	"	中 形	
	16	"	大 形	11の櫛の内面実測図
	17	西 側	小 形	直刀茎部
第三主体部	13	中 央	小 形	

第2表 七瀬5号古墳豎櫛検出表

さは、つまみの部分で0.25cmの楕状の竹を先述の櫛に編む部分に上下に当てて糸で編んで、U字形に曲げ以下は前者と同じ手法で歯部に至っている。櫛先から帶まで0.7cm、帯の幅0.8cm、その下を径0.15cmの竹ヒゴ(貫)を上下に当てて歯の部分の固定と調整を図っており、竹ヒゴと糸の漆の被膜の径は、0.22cmを計測する。この櫛の現場の観察(写真)によれば歯の長さは4cmの残存が認められたに過ぎない。山形県漆山古墳出土の堅櫛は、前者の形式のもので長さ9.5cmを計測されている。¹⁹⁾小形の櫛(第23図1)は、最大幅1.5cm、縦は横帶部までの残存で1.4cmである。

この長丘丘陵で、学術发掘された田麦2号墳、厚貝山の神古墳、七瀬3号墳からは、すべてこの種の櫛が検出されており、七瀬3号墳からは、新形式の櫛が検出された。また前二者の古墳からは、報告書で見る限りでは、つまみのある堅櫛は図示されていない。この種のものは、栃木県七里塚古墳出土品に類例がみられ²⁰⁾、装身具としての櫛が、美豆良などの髪形にどのように飾られていたか、性別、地域別、時代差など今後も検証を重ねていく必要が認められる。

白玉

検出位置

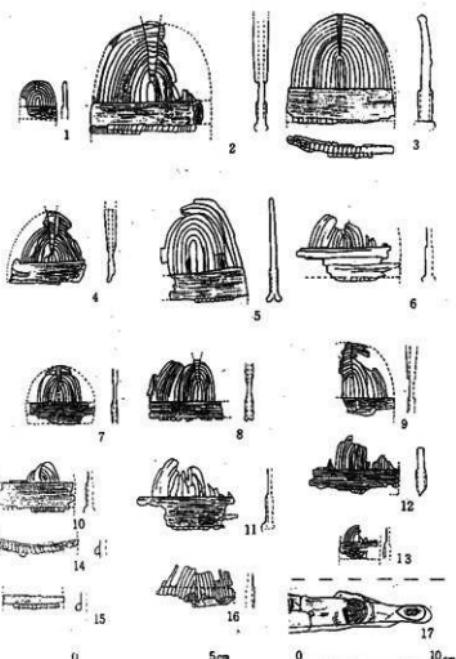
第1主体部

北側の一群	84個
南側の一群	208個

第2主体部

東側の一群	97個
西側の一群	121個(破片も含む)

滑石製の模造品といわれているもので、色調は白灰色から青灰色を呈し、径が0.4cm前後と、やや統一事がみられるが、長さは0.15~0.3cmと差があり切断面も形状の整わないものが多い。円錐形のものもあり、縦方向に研磨痕を残しており、穿孔も片側の大きいもの、均等のものなどの存在から管



第23図 七瀬5号古墳出土 堅櫛 実測図

第2主体部 東側の一群

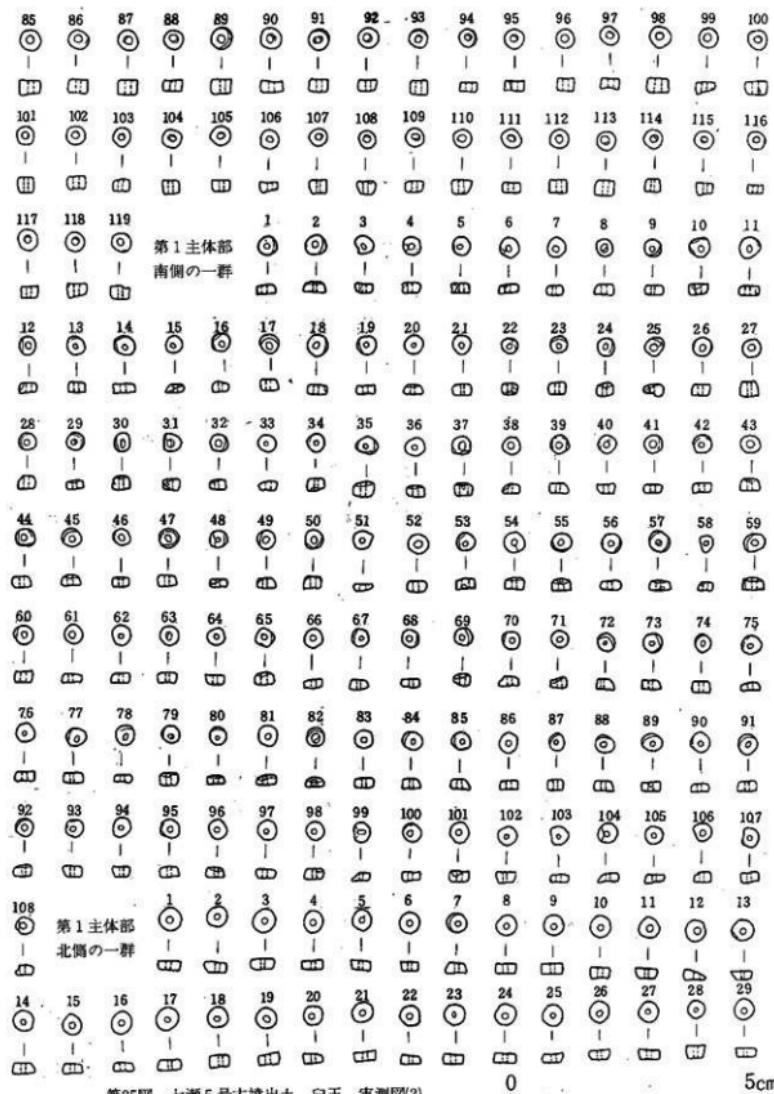
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	—	1	2	3	4	—
○	○	○	○	○	○	○	○	○	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
■	■	■	■	■	■	■	■	■	—	—	—	—	—	—	—
5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

第24図 七瀬5号古墳出土 白玉 実測図(1)

0

5cm

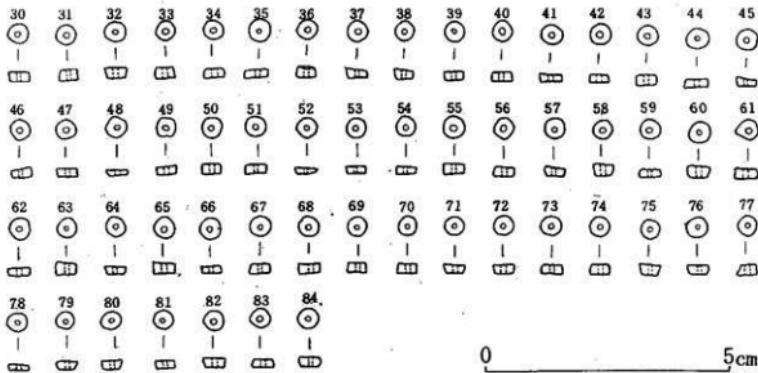
第2主体部 西側の一群



第25図 七瀬5号古墳出土 白玉 実測図(2)

0 5cm

第1主体部 北側の一群



第26図 七瀬5号古墳出土 白玉 実測図(3)

玉状に整形後、穿孔して輪切にした（鋸で切断した如き痕もみられる）と考えられるもので粗雑なつくりのものが多く、新井大ロフ遺跡出土品とすべて同一の類品であり、田麦2号墳、厚貝山の神古墳にも副葬されていた。農耕儀礼の祭祀址と古墳祭祀が、共通する側面をもっていた証拠であろう。

第3表 七瀬5号古墳第1主体部 北側の一群五類計測表

番号	色調	材質	直径	厚さ	質量	16	灰白色	滑石	4.40	1.80	0.07	32	灰白色	滑石	4.20	2.00	0.04
1	灰白色	滑石	4.40	1.80	0.04	17	"	"	4.00	2.30	0.06	33	"	"	4.00	2.30	0.06
2	"	"	4.10	1.80	0.05	18	深緑色	"	4.00	2.50	0.07	34	"	"	4.05	2.20	0.06
3	"	"	4.20	1.90	0.05	19	"	"	4.00	2.10	0.04	35	"	"	4.05	2.00	0.06
4	"	"	4.00	1.60	0.04	20	灰白色	"	4.00	2.00	0.04	36	"	"	4.20	1.90	0.04
5	深緑色	"	4.00	1.70	0.02	21	"	"	4.10	2.10	0.06	37	"	"	3.90	2.00	0.04
6	"	"	4.40	1.80	0.07	22	"	"	4.00	1.90	0.04	38	"	"	4.10	1.80	0.03
7	灰白色	"	4.00	2.40	0.06	23	"	"	4.10	2.30	0.05	39	"	"	4.10	2.00	0.04
8	深緑色	"	4.00	1.80	0.05	24	"	"	4.00	1.80	0.03	40	"	"	4.00	2.10	0.06
9	灰白色	"	4.20	2.00	0.06	25	"	"	4.00	2.20	0.04	41	"	"	4.20	2.00	0.06
10	深緑色	"	4.10	2.10	0.06	26	"	"	4.10	2.10	0.05	42	"	"	4.00	2.00	0.04
11	灰白色	"	4.30	2.20	0.06	27	"	"	4.00	1.90	0.05	43	"	"	4.10	2.00	0.05
12	"	"	4.00	2.30	0.03	28	"	"	3.95	2.60	0.04	44	深緑色	"	4.30	1.70	0.04
13	"	"	4.30	2.30	0.05	29	"	"	4.30	2.10	0.04	45	灰白色	"	4.10	1.70	0.03
14	深緑色	"	4.10	2.10	0.05	30	"	"	4.10	1.70	0.04	46	"	"	4.10	2.00	0.03
15	灰白色	"	4.20	2.00	0.05	31	"	"	4.30	2.10	0.05	47	"	"	4.10	2.00	0.04

第4表 七瀬5号古墳第1主体部南側の一群玉類計測表

番号	色調	材質	直径	厚さ	質量	1	灰白色	滑石	4.50	1.90	0.06	40	深緑色	滑石	4.00	2.00	0.03
48	灰白色	滑石	4.00	1.40	0.03	2	"	"	4.25	2.20	0.07	41	"	"	4.05	1.95	0.04
49	"	"	4.00	2.00	0.04	3	"	"	4.00	1.85	0.05	42	"	"	4.10	1.70	0.02
50	"	"	4.00	2.00	0.04	4	深緑色	"	3.95	2.20	0.05	43	"	"	4.20	1.80	0.06
51	深緑色	"	4.00	2.00	0.05	5	灰白色	"	4.15	2.15	0.06	44	"	"	4.00	2.05	0.04
52	灰白色	"	4.20	1.30	0.02	6	深緑色	"	3.90	1.80	0.04	45	"	"	4.40	1.95	0.06
53	深緑色	"	3.80	1.80	0.03	7	灰白色	"	4.50	2.00	0.08	46	"	"	3.95	2.00	0.05
54	"	"	4.20	1.50	0.02	8	深緑色	"	4.00	2.20	0.06	47	"	"	4.05	2.25	0.06
55	灰白色	"	4.10	2.00	0.05	9	灰白色	"	3.85	1.85	0.05	48	"	"	3.75	1.65	0.03
56	"	"	4.00	2.00	0.04	10	深緑色	"	3.95	2.15	0.06	49	灰白色	"	4.00	2.15	0.04
57	深緑色	"	3.95	1.40	0.03	11	灰白色	"	4.60	1.90	0.07	50	深緑色	"	4.10	2.15	0.05
58	"	"	4.00	2.20	0.05	12	"	"	3.90	2.20	0.04	51	"	"	4.10	1.40	0.03
59	"	"	4.00	1.50	0.04	13	深緑色	"	4.05	1.90	0.05	52	"	"	4.50	1.90	0.05
60	"	"	4.10	1.80	0.03	14	"	"	4.55	1.90	0.07	53	"	"	3.85	2.20	0.05
61	灰白色	"	4.60	2.40	0.06	15	"	"	3.95	2.00	0.04	54	"	"	4.20	2.15	0.07
62	"	"	4.10	1.50	0.03	16	灰白色	"	3.90	2.05	0.05	55	"	"	4.20	2.25	0.07
63	深緑色	"	4.00	2.30	0.06	17	"	"	4.05	2.25	0.07	56	"	"	4.25	1.70	0.07
64	灰白色	"	4.20	1.50	0.03	18	深緑色	"	4.55	2.05	0.07	57	"	"	4.55	1.90	0.07
65	"	"	4.00	2.20	0.06	19	"	"	3.90	1.95	0.05	58	"	"	4.00	2.10	0.04
66	"	"	4.05	2.00	0.04	20	灰白色	"	4.00	2.55	0.06	59	"	"	4.35	2.35	0.08
67	"	"	4.10	2.05	0.06	21	深緑色	"	4.35	2.20	0.05	60	"	"	4.20	2.30	0.06
68	"	"	4.10	2.05	0.06	22	"	"	3.70	2.00	0.02	61	"	"	4.10	1.70	0.04
69	"	"	4.00	2.05	0.05	23	"	"	4.00	2.15	0.04	52	"	"	4.30	2.25	0.07
70	"	"	3.95	2.30	0.06	24	"	"	3.90	1.85	0.03	63	"	"	4.10	2.10	0.06
71	"	"	4.20	2.00	0.05	25	"	"	4.00	1.90	0.06	64	灰白色	"	4.00	2.00	0.06
72	深緑色	"	4.00	1.95	0.04	26	"	"	4.00	2.00	0.04	65	深緑色	"	4.15	2.20	0.07
73	"	"	4.00	2.00	0.05	27	"	"	3.85	2.55	0.06	66	灰白色	"	4.30	1.90	0.05
74	"	"	4.20	2.10	0.05	28	"	"	4.05	2.20	0.05	67	深緑色	"	3.90	2.10	0.03
75	"	"	4.05	2.00	0.05	29	"	"	4.10	1.60	0.05	68	"	"	4.05	2.10	0.05
76	灰白色	"	4.10	2.00	0.05	30	"	"	3.90	2.35	0.06	69	灰白色	"	3.95	2.20	0.04
77	深緑色	"	4.05	2.10	0.05	31	"	"	4.35	2.40	0.06	70	深緑色	"	4.20	2.20	0.06
78	"	"	4.00	1.40	0.04	32	"	"	3.85	2.00	0.02	71	灰白色	"	3.85	2.05	0.04
79	"	"	4.00	1.70	0.05	33	"	"	3.95	1.95	0.03	72	"	"	3.95	2.05	0.04
80	"	"	4.20	1.80	0.04	34	"	"	3.80	2.50	0.03	73	"	"	4.30	2.00	0.05
81	灰白色	"	3.95	2.05	0.05	35	"	"	4.25	2.20	0.06	74	"	"	4.05	2.05	0.05
82	深緑色	"	4.20	2.05	0.04	36	"	"	4.10	1.90	0.06	75	"	"	4.30	2.80	0.07
83	灰白色	"	4.30	2.10	0.06	37	"	"	4.05	2.40	0.06	76	深緑色	"	4.20	2.15	0.06
84	"	"	4.30	2.00	0.06	38	灰白色	"	3.80	1.75	0.03	77	"	"	4.25	2.35	0.07
85	深緑色	"	4.20	2.15	0.07	39	深緑色	"	4.20	2.15	0.07	78	灰白色	"	4.10	1.80	0.04

番	色調	材質	直徑	厚さ	質量	備考
79	深緑色	滑石	4.05	2.85	0.07	
80	"	"	3.80	1.70	0.03	
81	灰白色	"	4.35	2.05	0.07	
82	深緑色	"	3.80	1.80	0.05	
83	灰白色	"	4.15	2.20	0.06	
84	"	"	4.00	2.30	0.05	
85	深緑色	"	4.20	2.20	0.06	
86	"	"	4.20	2.05	0.07	
87	灰白色	"	3.70	1.90	0.05	
88	深緑色	"	4.20	2.20	0.07	
89	灰白色	"	4.20	2.35	0.07	
90	"	"	4.40	1.85	0.05	
91	深緑色	"	4.15	2.20	0.06	
92	"	"	3.95	2.10	0.06	
93	"	"	4.00	1.95	0.04	
94	灰白色	"	4.25	2.20	0.06	
95	深緑色	"	4.00	2.20	0.05	
96	"	"	4.00	1.95	0.04	
97	"	"	4.30	1.95	0.06	
98	"	"	4.00	2.20	0.06	
99	灰白色	"	4.10	2.60	0.04	
100	"	"	4.00	1.65	0.04	
101	深緑色	"	4.20	2.20	0.06	
102	"	"	4.30	2.50	0.07	
103	灰白色	"	4.10	1.80	0.04	
104	深緑色	"	4.15	1.85	0.03	
105	"	"	3.70	1.75	0.06	
106	"	"	3.85	2.15	0.04	
107	"	"	4.00	2.15	0.07	
108	"	"	4.00	1.55	0.05	
6	暗緑色	滑石	4.00	2.00	1.10	
7	"	"	3.90	2.10	1.20	
8	"	"	4.00	1.50	1.20	
9	"	"	4.00	2.50	1.10	
10	"	"	3.90	1.50	1.00	
11	深緑色	"	4.10	2.50	1.40	
12	"	"	4.00	1.80	1.00	
13	"	"	4.10	3.00	1.20	
14	白	"	4.00	2.50	1.00	
15	暗緑色	"	4.00	2.50	1.00	
16	深緑色	"	4.20	2.70	1.20	
17	"	"	4.00	2.00	1.20	
18	"	"	4.00	2.50	1.20	
19	"	"	4.20	2.60	1.40	
20	"	"	4.10	3.00	1.20	■■■■■
21	"	"	4.00	3.00	1.00	
22	"	"	4.00	2.70	1.10	
23	"	"	4.00	2.90	1.10	
24	"	"	4.10	3.00	1.20	
25	"	"	4.00	2.20	1.20	
26	"	"	4.00	3.00	1.00	
27	"	"	4.00	2.50	1.00	
28	"	"	4.10	2.00	1.10	
29	"	"	4.10	2.60	1.50	
30	"	"	4.00	2.60	1.10	
31	"	"	4.00	3.00	1.10	
32	"	"	4.00	2.90	1.10	
33	"	"	4.00	2.90	1.20	
34	"	"	4.00	2.90	1.00	
35	"	"	4.00	2.80	1.50	■■■
36	"	"	4.10	2.00	1.10	
37	"	"	4.00	2.50	1.10	
38	"	"	4.00	3.00	1.10	
39	"	"	4.10	2.80	1.10	
40	"	"	4.00	2.00	1.20	
41	"	"	4.00	2.90	1.10	
42	"	"	4.00	2.90	1.10	
43	"	"	4.00	2.90	1.10	■■■
44	"	"	3.90	2.00	1.50	■■
45	深緑色	滑石	4.00	2.80	1.10	
46	"	"	3.90	2.00	1.20	■■
47	"	"	4.00	2.00	1.10	■■
48	"	"	4.00	2.00	1.00	
49	"	"	4.00	2.00	1.20	
50	"	"	4.10	2.10	1.10	
51	"	"	3.90	2.10	1.20	
52	"	"	4.00	2.80	1.10	■■■
53	"	"	4.50	2.00	1.10	■■
54	"	"	4.00	2.10	1.10	
55	"	"	3.90	2.90	1.20	
56	"	"	4.00	1.60	1.10	
57	灰白色	"	4.00	2.80	1.20	■■
58	深緑色	"	4.10	2.20	1.10	
59	"	"	4.00	2.90	1.10	
60	"	"	4.10	2.80	1.20	
61	灰白色	"	4.00	2.90	1.10	■■■
62	深緑色	"	4.00	2.10	1.10	
63	"	"	4.10	2.80	1.10	
64	"	"	4.10	2.80	1.10	
65	"	"	4.00	3.00	1.10	
66	"	"	4.00	3.00	1.10	
67	"	"	4.00	2.25	1.00	
68	"	"	4.00	3.00	1.00	
69	"	"	4.00	2.90	1.10	■■
70	"	"	4.00	2.50	1.10	
71	"	"	4.00	2.10	1.10	
72	"	"	4.00	2.60	1.20	
73	"	"	4.50	3.00	1.10	■■■
74	灰白色	"	4.10	2.60	1.10	
75	深緑色	"	4.00	2.00	1.00	
76	"	"	3.70	2.90	1.00	
77	"	"	3.80	2.50	1.00	
78	"	"	4.00	2.60	1.10	
79	"	"	4.00	2.20	1.10	
80	"	"	4.10	2.00	1.10	
81	"	"	4.10	2.10	1.10	
82	"	"	4.00	2.20	1.10	0.05 ■■
83	灰白色	"	3.90	2.50	1.10	0.03

第5表 七瀬5号古墳第2主体部
西側の一群玉類計測表

番	色調	材質	直徑	厚さ	大きさ	質量	備考
1	暗緑色	滑石	3.50	1.50	"		
2	"	"	3.502	2.20	1.10		
3	"	"	3.902	2.50	1.20		
4	"	"	4.002	2.00	1.20		
5	"	"	4.102	2.00	1.10		

第6表 七瀬5号古墳第2主体部東側の一群玉類計測表

番号	色調	材質	直径	厚さ	質量	備考	番号	色調	材質	直径	厚さ	質量	番号	色調	材質	直径	厚さ	質量
84	深緑色	滑石	4.00	2.80	1.20	0.04	1	深緑色	滑石	4.20	1.90	0.05	39	深緑色	滑石	4.05	2.40	0.06
85	"	"	4.00	2.50	1.00		2	"	"	3.90	2.90	0.06	40	"	"	3.80	2.35	0.04
86	"	"	4.10	2.50	1.20		3	"	"	4.10	2.70	0.08	41	"	"	3.70	2.30	0.06
87	"	"	4.10	3.00	1.10		4	灰白色	"	3.80	2.00	0.03	42	"	"	4.00	3.75	0.05
88	灰白色 墨分あり	"	4.00	2.50	1.20	0.04	5	"	"	3.90	2.70	0.03	43	灰白色	"	4.10	2.80	0.06
89	深緑色	"	4.10	3.00	1.10	0.04	6	深緑色	"	3.95	2.40	0.04	44	"	"	4.15	2.95	0.07
90	"	"	4.10	2.10	1.10		7	灰白色	"	4.05	2.40	0.05	45	"	"	4.00	3.15	0.06
91	"	"	4.00	2.20	1.10		8	"	"	4.00	2.20	0.06	46	深緑色	"	3.85	2.20	0.03
92	"	"	4.00	2.20	1.10		9	深緑色	"	3.70	2.90	0.07	47	"	"	3.95	2.55	0.06
93	"	"	4.00	2.90	1.20	0.06	10	"	"	3.90	2.20	0.04	48	"	"	3.90	3.00	0.07
94	"	"	3.80	2.10	1.10	0.04	11	"	"	4.00	2.50	0.05	49	灰白色	"	3.80	2.25	0.04
95	"	"	4.00	2.00	1.10	0.03	12	"	"	4.10	2.60	0.07	50	深緑色	"	3.95	2.70	0.06
96	"	"	4.00	3.00	1.10	0.04	13	"	"	4.20	2.70	0.08	51	灰白色	"	3.95	2.20	0.04
97	"	"	4.00	2.20	1.10	0.04	14	"	"	4.00	2.60	0.02	52	"	"	4.00	2.40	0.06
98	"	"	4.20	2.90	1.10	0.05	15	"	"	3.95	2.20	0.06	53	"	"	4.10	1.90	0.03
99	"	"	4.10	2.00	1.10	0.04	16	"	"	3.90	2.20	0.05	54	深緑色	"	3.85	2.55	0.05
100	"	"	3.90	2.80	1.10	0.06	17	灰白色	"	3.80	2.40	0.05	55	灰白色	"	3.90	2.75	0.06
101	"	"	4.00	3.30	1.10	0.06	18	深緑色	"	4.00	3.80	0.08	56	深緑色	"	3.90	3.05	0.06
102	"	"	3.90	2.50	1.30	0.04	19	"	"	3.90	2.30	0.05	57	"	"	4.10	2.60	0.06
103	"	"	4.00	2.50	1.10	0.04	20	"	"	4.30	2.40	0.06	58	"	"	3.90	2.50	0.06
104	"	"	4.00	2.50	1.10	0.06	21	"	"	4.00	3.90	0.07	59	"	"	3.90	2.10	0.03
105	"	"	4.00	2.30	1.10	0.04	22	"	"	3.90	2.20	0.05	60	"	"	3.70	2.20	0.04
106	"	"	4.00	2.00	1.20	0.02	23	"	"	3.95	2.80	0.04	61	"	"	4.50	3.70	0.08
107	"	"	4.00	2.80	1.20	0.05	24	"	"	3.80	2.40	0.06	62	灰白色	"	3.80	2.40	0.05
108	白灰色	"	4.00	2.90	1.20	0.05	25	"	"	4.30	2.75	0.06	63	深緑色	"	3.90	2.80	0.06
109	深緑色	"	4.00	2.10	1.20	0.05	26	"	"	3.90	2.90	0.08	64	灰白色	"	3.90	2.95	0.06
110	"	"	4.00	2.90	1.30	0.05	27	"	"	3.80	2.00	0.04	65	深緑色	"	3.80	2.90	0.05
111	"	"	3.90	2.20	1.20	0.04	28	"	"	4.10	2.30	0.05	66	"	"	4.00	2.10	0.04
112	"	"	4.00	2.60	1.10	0.04	29	"	"	4.00	2.60	0.04	67	灰白色	"	3.90	2.95	0.05
113	"	"	4.00	2.90	1.10	0.06	30	"	"	4.05	2.65	0.07	68	深緑色	"	4.55	2.85	0.07
114	"	"	3.80	3.00	1.10	0.03	31	"	"	3.85	2.80	0.05	69	"	"	4.00	2.20	0.05
115	"	"	3.90	2.50	1.10	0.03	32	"	"	4.00	2.60	0.06	70	"	"	4.20	2.70	0.06
116	"	"	3.90	2.00	1.10	0.02	33	灰白色	"	3.90	1.85	0.04	71	灰白色	"	3.85	2.65	0.06
117	"	"	4.20	2.90	1.10	0.05	34	深緑色	"	3.50	2.00	0.03	72	"	"	4.10	3.75	0.05
118	"	"	4.10	3.00	1.20	0.05	35	"	"	4.05	2.20	0.04	73	"	"	4.00	2.80	0.05
119	"	"	4.10	3.00	1.10	0.04	36	"	"	4.05	2.35	0.05	74	深緑色	"	4.00	2.70	0.06
120	千枚片	2個体					37	灰白色	"	3.70	2.10	0.04	75	"	"	4.10	3.00	0.06
	121個体	他破片					38	深緑色	"	3.70	3.00	0.04	76	灰白色	"	4.30	2.85	0.06

番号	色調	材質	直径	厚さ	質量						
78	深緑色	滑石	4.10	2.45	0.05	82	深緑色	滑石	3.80	2.80	0.04
79	"	"	3.90	2.50	0.05	83	"	"	3.90	2.20	0.03
80	"	"	4.45	3.20	0.07	84	"	"	3.90	2.70	0.05
81	"	"	3.95	2.25	0.04	85	"	"	4.00	2.95	0.06
						86	"	"	3.85	2.10	0.03
						87	深緑色	滑石	4.00	3.00	0.07
						88	"	"	3.85	2.10	0.05
						89	"	"	4.15	3.00	0.06
						90	"	"	4.40	2.20	0.04

(6) 被葬者と埋葬施設について

調査開始当初、低平な盛土墳の印象をうけた、この古墳も幸い未発掘で保存されていた。従って、地域の古代史を充実する資料の類例の増加、新しく判明したことなど多くの知見と成果が得られた。

以下これらをもとに推測も混えて、古代の、この地域の社会体制、葬送儀礼からみた精神生活の一端を考えてみたい。

所在する古墳の立地からみると、七瀬古墳群とは、やや離れた位置にあり、これは同族関係、居住集団などの系譜が異っていることを示すこの同族の小首長が葬られた墓とすることができる。これらの人々は、この古墳から望見される中野平の扇状地の、どこかに所属する居住地があったとみられる現時点では、この両者を特定できる資料は、みい出されていない、将来の調査に期待されている。

次に検討したいのは、同一墳に、複数埋葬が、みられたことである。そしてその葬者が男性か女性かの検討が必要となってくる。第1主体部の葬者は或る一世代前の一族の長の男性とみるか或いは、第2主体部の被葬者を男性とした場合は、対の女性とみるべきかの、よりどころは、第1主体部の棺内の短剣が、武器としてより呪具の性格が強いところにあり、遺骸の残存をみない現在、性別の決定は、客観的な観察以外にない。また埋葬の位置（中央）や、墓壇のあり方、深さなどから推して第一主体部の人物が先に埋葬されてことは決定的であり、居住集団の統率者の地位にあった在地系の人物と考えられる。この場合、第三主体部の被葬者との関係をみると、屈葬されていること、小形の櫛3枚の装身具の検出に、とどまる視点にたてば、幼年者とみるより、従者の立場の人々の陪葬と、みられ、二者の同時埋葬も考えられる。

第2主体部の被葬者は、先の（或いは一世代前の）被葬者より長大な削竹形木棺に納められて東側に平行して浅く南頭位に埋葬されていた。これは、同族や縁者の人々の意識に先に埋葬された人物の面影が記憶に残るか、物語に登場していた時点と考えられ、1/4四半世纪を限度とした時の経過が想定され、この両者間に較差がみられる。また前者の被葬者が、氏族重代の宝器化した伝統的な短剣を携えていたのに対し、長大な直刀を携えており、時代の移り変りと身分の上昇が、はかられたことが察知される。

この被葬者は、或る集団を統率する男性と、みることができ、この男性は外來の人物だった可能性がある。即ち調査された五世紀代の地域の古墳をみると、神奈備山としての高社山を意識した北頭位に埋葬される蓋然性の高い風習に対して、明らかに南頭位に埋葬されていたこと、頭部上に3個体の盤が、土器枕としての状態で置かれていたなどは、この地方でまだ報告例を聞かない新知見のものを含んでいるからである。

土器枕を使う風俗の多くみられる山陰地方の例を次に引用してみると¹⁰、鳥取県東伯郡羽合町の、「長瀬高浜一号墳」は、直径28m、高さ3mの円墳で、周溝内とそこに接して箱式石棺や円筒埴輪棺14基が整然と配置され、墳頂部に大きな箱式石棺があり、内部に土器（高杯）を転用した枕に頭を横

たえた熟年後半の女性の遺骸がみられた。また3号墳（径20m、高さ1.7m）は、三基の埋葬施設があり、中央（中心）にあって規模の大きい第2埋葬施設（石棺）には、壮年女性が葬られており、担当者の清水真一氏は、五世紀後半の年代とされている。この五世紀後半の西日本の古墳には、男女合葬の複数埋葬例が、みられ、これを研究された間壁蘿子氏は、「自分の出身の一族が、必ずしも弥生時代以来、その地方で祭を司り、しかも村内を統率してきた特別身分を獲得していた一族でない者も多かったと思われる。（筆者注、この地域でいえば、軍事などの権力をもつ外来者など）彼らは、自己の能力によって、在地の有力者一族の女性などを婚姻で結びついた場合、彼らの墓として伝統的な墓制を取り入れて、男、女一対とした形で形成されたのではないか？」¹⁴と、されており、この説明を肯定した場合、七瀬五号墳では、頭位方向と今のところ、この地方の新知見と思われる土器枕の習俗となって現われたと思われる。また女性が先に埋葬され、追葬された男性が若い場合は、母子の関係で、母系社会を示すものとされている。

また東日本には、滑石製の石枕（石棺に、つくりつけのものもある）が、古墳時代中期に多くみられる。これとの関連や、この地域の葬制の習俗には今後に多くの検討課題を、かかえている。

次に墓壇上、北辺の焚火あと二ヶ所について検討してみよう。集団を構成した人々が古墳を築造した時期が、農閑期の冬で暖をとるために焚火あと、或いは、火によって憑靈を祓い、古墳域の清浄化（煙火）が、はかられたとの考えもあり立つが、三百年の歳月をうめて伝統の墓制が継続されていたと仮定すれば、文献に現われた葬送儀礼の習俗を採用して、当時の墓制を復元できないか、この文献と考古学の接点の解明に努力されている。

和田莘氏の「万葉挽歌の世界」¹⁵によれば、靈龜元年歲次乙卯の秋九月、志貴親王の薨りまし時歌一首、並びに短歌

梓弓手に取り持ちて丈夫の得物失手ばさみ立向ふ高円山に春野焼く野火と見るまでもゆる火をいか
と間へば玉棒の道来る人の泣く涙、涙落と降りて白袴の衣ひづらの立ち留り、われに語らく何しかも
もとな轉ぶ聞けば哭のみ泣かゆ語れば心そ痛き天皇の神の御子のいでましの手火の火そこだ照りた
る（2-230）

短歌二首

高円の野辺の秋萩いたづらに咲きか散るらむ見る人無しに（2-231）

三笠山野辺行く道は、こきだくも繁に荒れたるか久にあらなくに（2-232）

手火の光にゆれて古代にあっては、夜に入つてから葬列が出发したとされ、福山敏男氏も平安時代の記録にも、葬列が夜出発した例が散見される¹⁶と傍証されている。更に奈良県四条古墳、小墓古墳などで発見された木製の葬具も用いられ、山上を行く葬列の明りを古代の人々は、どのように眺めたであろうか。

第一主体部の被葬者の埋葬が済むと、墳頂部の中央で死者の靈を祀る墓前祭祀が行われ、火も焚かれたことだろう。木炭片がみられたり2次焼成によって割げた部分がみられる甕の破片が存在する。甕の存在から酒もあった。こうして集団縁者との別れの儀式が済むと、使用された土器は、意識的に破砕され墳上に放置された。この祭祀がどの主体部の被葬者にも行われたかの問題は、土器の型式分類や検出位置を慎重に検討し今後の課題としたい。

この古墳より約一世紀前に築造されたと思われる、更埴市の森将軍塚古墳は、大和王權と、かかわりを持った卓越した権力者、首長の墓とみられるが、その後一世紀に亘って墳壇に小形の埋葬施設が

多数設けられ^四、その性格について諸々論議されている。今はその内容について省略させていただくが、二者の隔絶は或る程度、決定的である。七瀬5号墳の複数埋葬例は、これとは別に弥生墳丘墓にみられる、多数埋葬例と共通点がみられ、また後期古墳の追葬例に通ずるものと、もっている。

このことは、一方で七瀬双子塚の如き、この地方の首長墓をもっていても、それ以下の階層は、前代からの社会構造が生きていたためと考えられる。

今まで、主体部の構造は、割竹形木棺と表現してきたが、殊に第1主体部が独木舟の形状に、似ていることが指摘できる。梅沢末治氏が、「本邦上代高塚の内部構造に就いて」(史林第25巻、第3号)で、舟葬の風習から、割竹形木棺、それを覆う粘土棺などが発達したとされ、第一主体部の形状が、この原初形態に近く、この様な中期古墳にまで遺存するのは、文化の周辺化現象か、地域の独自性かと思われ、更には、海神族・安曇氏・穗高神社・お舟遊び・出雲神話と諏訪神社など、古代のロマンが括がってゆくが、これらは、将来に亘って課題としておく。

ともあれ五世紀後半の時代は、朝鮮半島の状勢とも合せて、東国への服属強化が大和政權によって、図かられた画期の時代で、これらの動きとともに、地域の古代史を、この古墳が語りかけているのである。

これまで、推論と飛躍の多い考えを述べてきたが、今後に残された課題も多い。破壊を前提とした古墳の調査は、先端全体を精査するため、従来考えられなかった問題が提起されることがある。既発掘の古墳でも、この点、充分配慮して保存を図り、再調査の日まで充分に保護を図りたいものである。

(榎原 長則)

引用文献・参考文献

- 注1. 金井汲次「新井大口遺跡」 長野県史 考古資料編 主要遺跡北東信 1982
2. 植村彰一ほか『日本陶磁の原流』 柏書房 1984
3. 佐藤信之「金鏡山古墳」千曲川水系古代文化研究所ほか『東国における古式須恵器をめぐる諸問題』 补充資料 1987、別稿にて詳細な報告を予定している。
4. 西山克己「信濃国で須恵器が用いられた頃」『信濃』40、4 1988
5. 中村浩『和泉陶邑窯の研究』 柏書房 1985
6. 同上
7. 同上
8. 田辺昭三「須恵器大成」 参考図版 角川書店 1981
9. 水野清一 小林行雄『図解考古学辞典』 東京創元社 1985
10. 町田章「装身具の意義と歴史」『季刊考古学』第5号雄山閣 1983
11. 森浩一「古墳にみる女性の社会的地位」『日本の古代12女性の力』中央公論社 1987
12. 間壁蘿子「考古学から見た女性の仕事と文化」 同上
13. 和田翠「万葉挽歌の世界」『日本の古代別巻』 中央公論社 1988
- 都出比呂志「墳墓」『日本考古学4集落と祭祀』 岩波書店 1986
14. 福山敏男「中尊寺金色堂の性格」『仏教芸術』第73号 1969
15. 岩崎卓也「四世紀の東と西」『東アジアの古代文化』46号 大和書房 1986

図 版

1. 七瀬5号古墳
遠景（田麦より）



2. 七瀬5号古墳全景
(調査前、南から)



3. 七瀬5号古墳全景
(調査前、西から)



圖版 2



1. 填頂部遺物出土狀況(1)



2. 填頂部遺物出土狀況(2)



3. 填頂部遺物出土狀況(3)

1. 七湖 5 号古墳全景



2. 周溝 (南側)



3. 周溝 (西侧)



图版 4



1. 填丘断面（北）



2. 填丘断面（西）



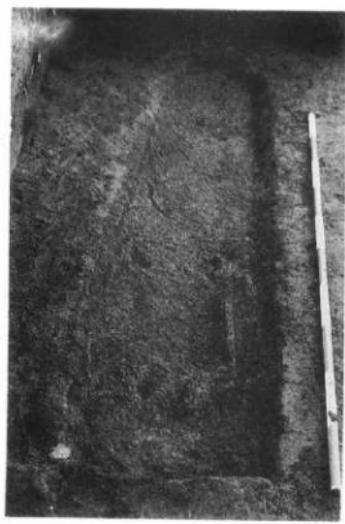
3. 填丘西侧燧火跡



4. 第1主体部北侧东燧火跡



1. 圓溝北側出土土器



2. 第1主体部遺物検出状況（北より）



3. 第1主体部確認面（南より）

图版 6



1. 第1主体部竖椭



2. 第1主体部竖椭出土状况



3. 第1主体部白玉检出状况



4. 第1主体部墓墙北断面

1. 第2主体部遺物検出状況

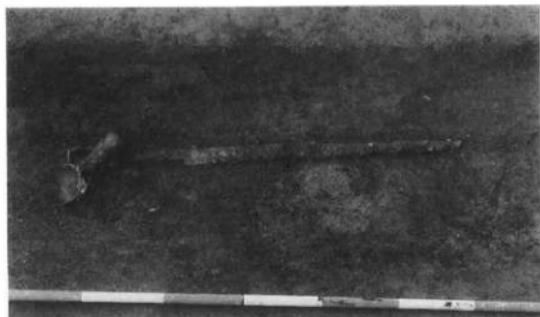


2. 第2主体部壺出土状況



3. 第2主体部白玉出土状況

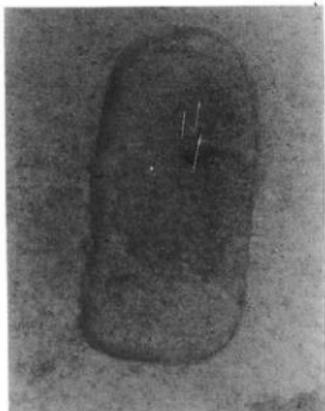




1. 第2主体部直刀出土状況



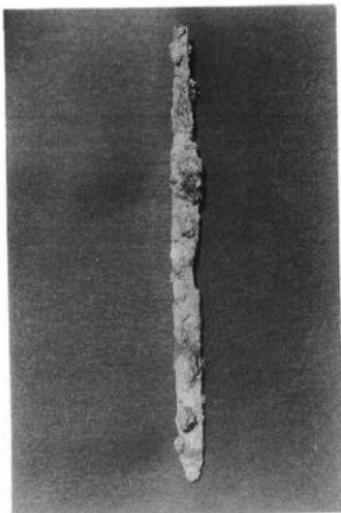
2. 第2主体部縦擗出土状況



3. 第3主体部



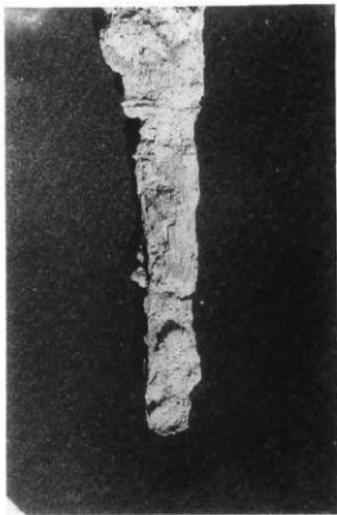
4. 第3主体部縦擗検出状況（中央右松根あと）



1. 第1主体部検出 短剣

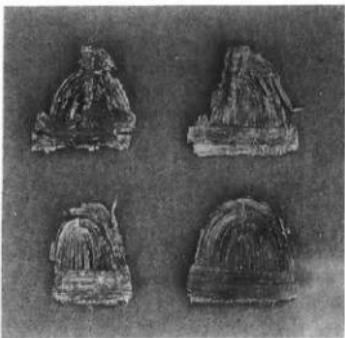


3. 直 刀



2. 第2主体部検出 直刀茎部分

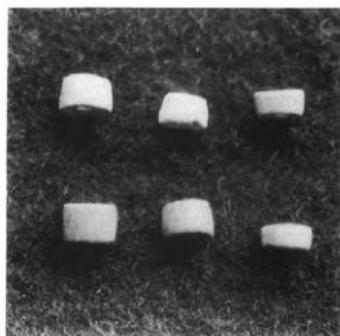
圖版10



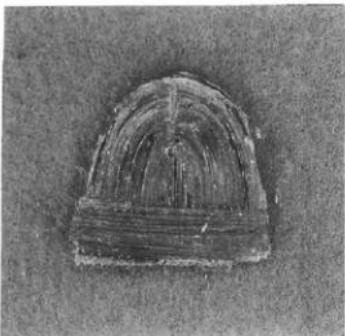
1. 竖 橋



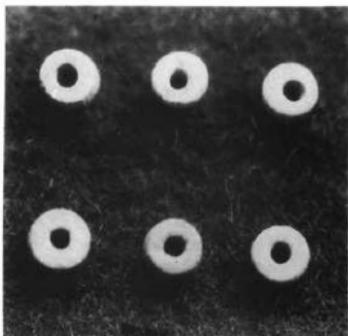
2. 竖 橋



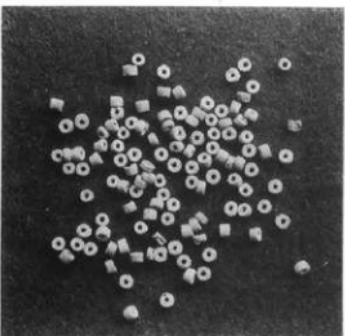
3. 白 玉 (侧面)



4. 竖 橋

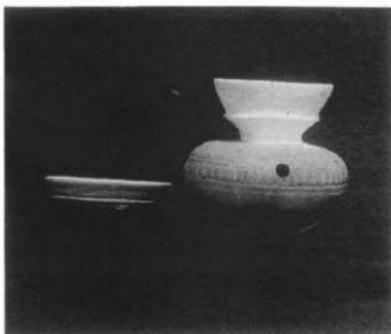


5. 白 玉 (穿穴面)



6. 白 玉

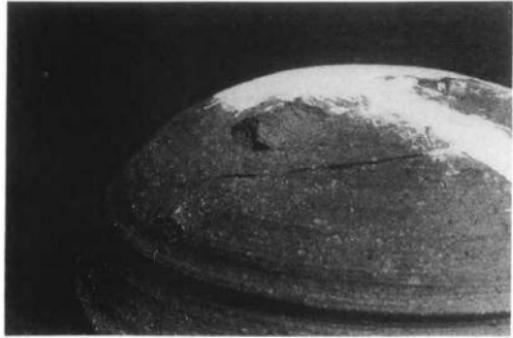
1. 墳頂部出土須惠器



2. 同 上



3. 同 上



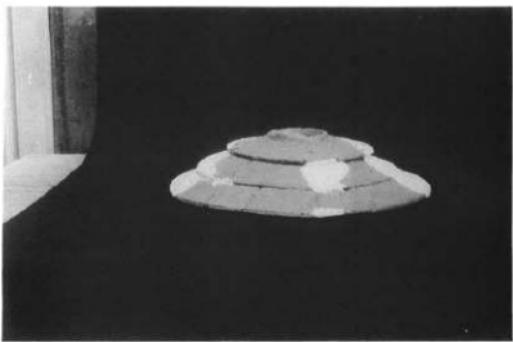
图版12



1. 第2主体部出土盤



2. 墓頂部出土高環



3. 墓頂部出土器台

七瀨3・4号古墳

七瀬3号古墳・4号遺跡

1 調査の概要

(1) 調査に至るまでの経過

今回の調査は、中野市西部丘陵土地利用計画に基づく一連の埋蔵文化財の保護として最後の調査となった。

昭和62年7月6日に、長野県教育委員会文化課指導主事の出席のもと現地協議を実施し、中野市と中野市土地開発公社との委託契約により、事前に発掘調査を実施し記録保存をはかるとの決定がなされた。また県教委文化課の指導で、七瀬5号古墳をはじめとする一連の調査結果等を踏まえ、保存状態のよい七瀬3号古墳についての調査団長を、筑波大学教授、岩崎卓也先生に御依頼し、多くの経験と最新の資料知識を活用し、より深く成果の高い調査が可能となるよう準備を重ねた。

昭和63年6月27日に岩崎団長の現地指導をいただき、調査団編成及び調査日程等を決定し、昭和63年7月11日付で調査委託契約を締結し、同年7月11日から9月20日までの予定で発掘調査を開始した。

(2) 調査団の編成

調査責任者 鳴田 春三（中野市教育委員会教育長）

調査団長 岩崎 卓也（筑波大学教授）

調査団長代理 金井 淳次（中野市文化財保護審議会々長）

調査主任 横原 長則（日本考古学協会員）

調査員 田川 幸生（日本考古学協会員）

関 孝一（須坂東高校教諭）

郷道 哲章（長野県史刊行会常任編さん委員）

土屋 積（星代高校教諭）

池田 実男（長野県考古学会員）

滝沢 誠（筑波大学院生）

岡林 孝作（〃）

三木ますみ（〃）

事務局 小野沢 捷（社会教育課長）

小林 紀夫（同課、歴史民俗資料館管理係長）

徳竹 雅之（〃 学芸員）

協力団体 七瀬区

参加者 清本栄一、中村宗一郎、阿藤英奈、古田茂、樋口政勝、樋口義政、高山一雄、
金井英男、関純子、千葉剛成、山崎のり子、栗原よしみ、筑波大学院生及び学生
(深尾淳一、國井弘紀、松内賢二郎、田中裕) (順不同、敬称略)

調査の実施にあたり、協議の段階から格別なる御指導をいただいた長野県教育委員会文化課指導主

事小林秀夫先生並びに、人骨の出土に際して現地指導のうえ、報告書の執筆についても御協力いただいた信州大学助教授、西沢寿晃先生等関係諸氏の皆様方に記して感謝申し上げます。

(3) 調査の経過

- 7月11日～ 調査地区内の雑木伐採及び清掃
- 19日～ トランバスを設定した後墳丘測量を開始する。
- 25日（曇） 調査団会議を実施し、墳丘測量図を参考に具体的な調査の打ち合せを行う。
- 26日（晴） 安全祈願祭の後、グリット設定をし、北東区より調査を開始する。
- 27日（〃） 墳丘西側崖面の土層調査を行う。
3号古墳、墳頂部マウンドの調査を開始。
- 28日（雨） 午後晴れたので、4号墳墓のグリット設定を行う。
- 29日（晴） 3号古墳の表土をはぐ。
墳頂部より方形プランを確認する。
北側墳裾部にトレンチを入れる。
- 30日（〃） 墳頂部マウンドの地層断面図を取る。
- 8月1日～ 墳裾部精査のため3本のトレンチを入れる。
墳頂部マウンドプランの写真撮影後、掘り下げを開始する。
- 3日（〃） 墳裾部北側より周溝プラン確認のため精査。
- 4日～ 墳頂部より鉄鏃、土師器（數片）出土。
マウンドプランのセクション実測、写真撮影。
- 8日（晴） 墳頂部セクションの除去。
午後3時より雷雨のため現地作業中止。
- 9日～ 第1主体部平面プラン確認のため精査後、掘り下げ開始。
- 11日～ 第1主体部のセクション図作成後、壁を取りはずし炭化物を検出する。
完掘後、平面プランの実測、写真撮影を行う。
H7グリットより鉄鏃出土。
- 17日（晴） 第1主体部に断ち割りを入れる。周溝検出時の写真撮影。
- 18日（曇） 周溝部の掘り下げ開始。
墳頂部掘り下げの再開。
- 19日（曇） 第3主体部の墓壙プランを検出する。
- 21日（晴） 前日出土の刀子を取り上げる。
- 22日～ 墳頂部セクション実測後ベルト除去。
- 25日～ 第3主体部墓壙の掘り下げ。
- 29日～ 墓壙セクションの実測後、写真撮影。
墳丘セレクションの実測及び除去。
- 9月1日～ 第3主体部より頭蓋骨、豎櫛、臼玉、小玉、銅鏡等が出土。
- 3日～ 表土はぎ後の墳丘測量を開始。
- 5日～ 第3主体部棺内遺物の実測を行う。

墳丘南側セクションの実測。

- 8日～ 棺内遺物の取り上げ。
12日（曇） 第3主体部平面図の実測を行う。
13日（〃） 墳丘の清掃を行い全体写真を撮影。
14日（晴） 墳丘東西及び南北、南北セクションの実測を行う。
16日～ 第2主体部の検出。
18日～ 鉄釧、管玉、小玉、豎構が出土。
18日～ 第2主体部の掘り下げ精査、墳丘北西側の盛土除去。
20日～ 第2主体部平面図及び墳丘東西、南北セクション測量。
28日（晴） 現地調査を終了する。
30日（晴） 発掘器材の搬出。
1月6日～ 整理作業を市民プール事務室にて開始。
3月20日 報告書の刊行。

（徳竹 雅之）

2 調査の内容

七瀬3号古墳

（1）墳丘

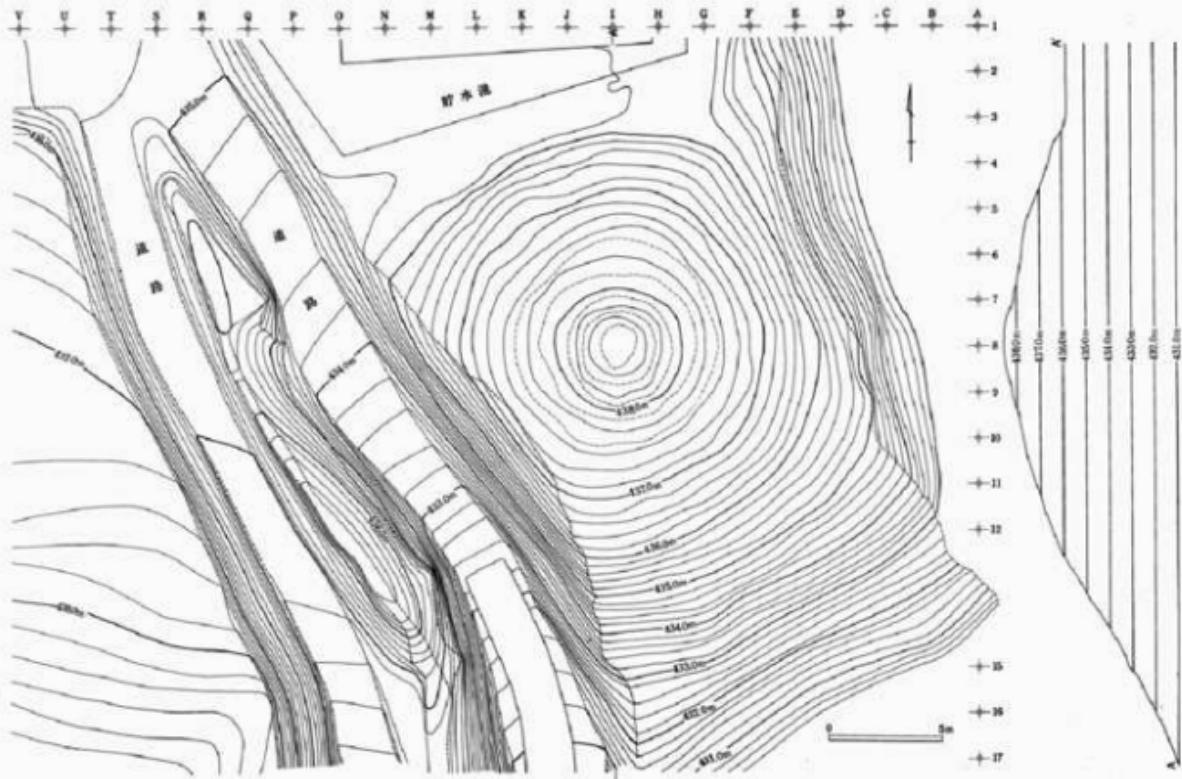
a. 調査前の状況（第27図、図版1）

七瀬3号古墳（中野市七瀬前山1254番地）は、中野扇状地と千曲川の間を南北に延びる長丘丘陵上に立地する。その長丘丘陵は、西の千曲川に向かっては緩傾斜をなすのに対し、東の扇状地側では急傾斜をなす。古墳は丘陵の頂部がわずかに東に張り出した位置にあり、そこから扇状地を一望できることはもちろん、雑木に覆われる以前は、扇状地内の集落から眼下に仰ぎみることができたと考えられる。現在、直下の水田面との比高差は約80mを測る。善光寺平北部唯一の規模をもつ前方後円墳、七瀬双子塚古墳は、本古墳の南方約250mの丘陵上高所に位置している。

本古墳は、一見して直径20m程の円墳とみられていたが、測量の結果、一部に直線状に走る等高線が認められ、その時点では方墳である可能性もわずかながら考えられた。この可能性は、道路によって切り取られた墳丘西側の崖面を精査することによってただちに否定された。北側の墳裾付近にあたる崖面を観察したところ、周溝の落ち込みが認められ、昭和5年、古墳北側に隣接して貯水池を造成した際確認された周溝の位置ともあわせて、弧状を描く周溝の存在が確実視されたのである。

第27図からもわかるように、調査の時点で本古墳はかなりの改変を被っていた。

墳丘の西側は、七瀬の集落から通じる幅3m程の道路（新道）によって墳頂部平坦面から下を大きく削り取られていた。また、この道路と平行してさらに西側には、現在では使われなくなった旧道が尾根を深く切り通していて、新道との間に幅4～5mの細長い残丘が形成されていた。このように墳丘と尾根との間はすでに著しく旧状を損ねていて、その切断状況等を調査することは、当初から断念せざるをえなかった。また、そうしたことから、本古墳が円墳であるという確証も得られず、尾根を切断して低くなった部分にまず旧道が通じたとすれば、新道との間の残丘が円丘につづく墳丘の一



第27图 七湖3号各处测深图 (1/100)

部である可能性も考えられなくはなかった。これは、残丘の南北両側（とくに北側）に、円丘の墳裾とほぼ同じ高さの傾斜変換部分があることも勘案してのことであった。残念ながら、その残丘部分については、正式な調査を行なうことはできなかったが、北側での部分的な断面の観察による限り、周溝の落ち込み等は認められなかつたから、本古墳はやはり円墳とみるのが妥当であろう。

墳丘の東側は、すぐに急峻な崖となっており、直線的に走る墳丘の等高線からも、封土の流出は容易にみて取れた。これは、西側がなだらかで東側が急な長丘丘陵の尾根東縁に本古墳が立地するためである。東側に比べて傾斜はかなり緩やかなものの、墳丘の南側についても少なからず封土の流出が予想された。そこでは、墳裾らしい傾斜変換線は一切認められず、標高436.0m付近に明確な墳裾線が認められる墳丘北側の状況とは異なっていた。

墳頂部は、標高437.6m付近で傾斜を変え、直径10m程の平坦面に移行する。その中央部には、直径5.5m、高さ0.5m程の円形の小墳丘が認められ、それが後世本古墳を利用して付加された二次的なものとみられるにせよ、どのような性格のものなのか、調査を進める上でひとつの关心事となつた。

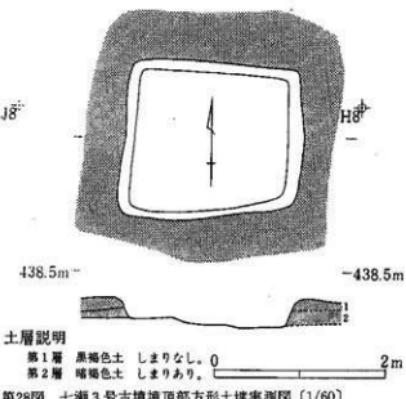
以上が調査前の状況で、北側の墳裾線を基準とした墳丘の規模は、直径約18.6m（南北）、高さ約2.5m（墳頂部小墳丘を含む）であった。調査では、東西南北を基軸として2m方眼のグリッドを設定し、東西方向をアルファベット、南北方向を数字で表記し、北東杭をグリッド名とした。その上で、墳頂部の中心を通るIライン、8ラインに土層観察用のベルトを残し、順次掘り下げを進めた。

b. 墳頂部小墳丘（第28図、図版1・2）

直径5.5m、高さ0.5m程の土鏡頭状を呈していた。頂部から40cm程掘り下げたところ、2.1×1.8m程の平面規模をもつ方形土壙が検出された。この土壙は、しまりに欠ける黒褐色土（第28図第1層、第31図第5層）から30cm程掘り込み、古墳の墳頂部平坦面（第31図第9層上面）をわずかに切り込んでいた。その黒褐色土は土壙の周囲に方形にめぐり、下層の暗褐色土（第28図第2層、第31図第6層）とともに小墳丘の下部を方形にかたちづくっていたが、上部では表土と封土との分離が定かでなく、その形状を明らかにすることはできなかつた。その構造は、基底面、すなわちほぼ古墳の墳頂部平坦面で、のちに古墳に関係するとみられる遺物が二次的な移動をともなつた状態で出土したことから、すべて盛土によるものと考えられる。

出土遺物は皆無といつてもよい。方形土壙のはば底で、古墳時代の滑石製錠錐車片2点が出されているが、それらはのちに述べるように、J8古墳の盗掘によって原位置から移動したものである可能性があり、土壙の掘り込みが古墳の墳頂部平坦面に達していることによって偶然にその内部から発見されたものと考えられる。

以上の調査所見によって明らかなように、墳頂部小墳丘は本古墳の墳頂部平坦面を利用して後世に盛土されたものである。時期を決定する手掛かりがなく、骨片、焼土等が出土していないことから推測の域を出ないが、中・近世の墳墓である可能性がます考えられよう。



第28図 七瀬3号古墳墳頂部方形土壙実測図 (1/60)

c. 墳丘の構造（第29～31図、図版2・3）

墳丘の調査は、墳頂部の中心で直交するIライン（南北）、8ライン（東西）に沿ってトレンチを設け、その土層断面を観察することによって行なった。主体部の調査終了後、Iラインより西、8ラインより北の墳丘1/4については、盛土をすべて除去し、旧地表面の観察を行なった。

本古墳は南東側に急傾斜をなす尾根上に立地していることから、墳丘の南半を主に地山削り出し、北半を主に盛土によって整形している。

地山には上層から、黒色土、暗褐色土、黄褐色土という自然堆積が認められ、その下には、場所によって白色、淡橙褐色、淡灰褐色を呈する粘土層が厚く堆積している。盛土除去後の観察によれば、旧地表面すなわち黑色土上面には、いたるところにうすく炭化物の堆積が認められた。おそらく、古墳の築造に先立って山焼きが行なわれたのであろう。

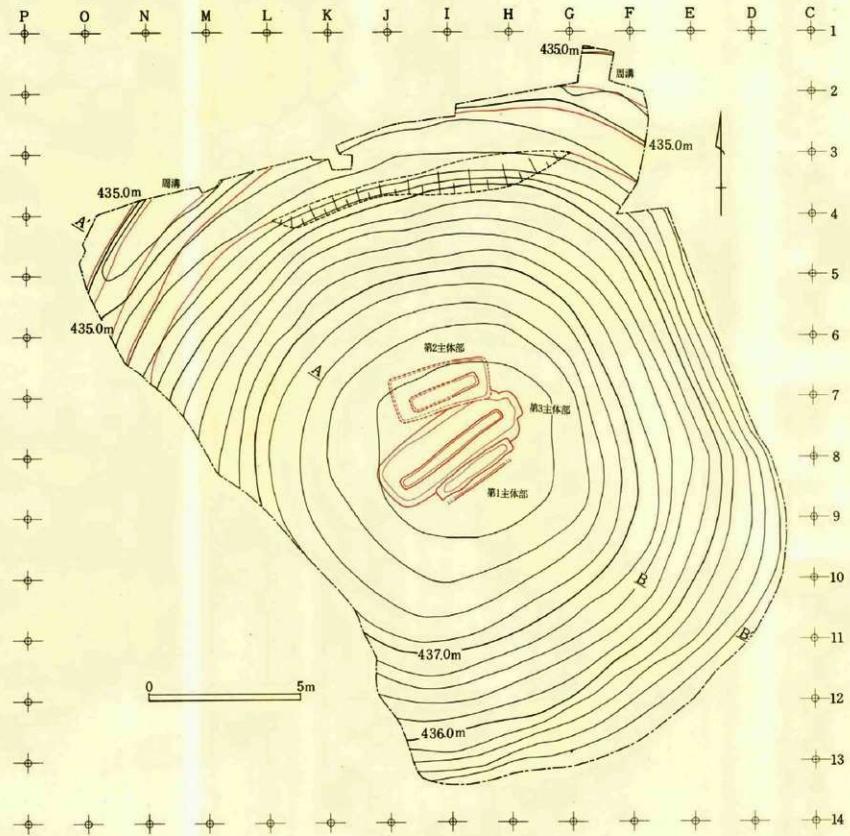
古墳の築造にあたっては、占地後まず墳裾の削り出しを行なわれる。その際、墳丘の中心をどこに求めたかであるが、南北断面でみると、墳丘の中心は尾根の最高所をやや下った北側に設定されている。これは、一定の墳丘規模を獲得するにあたり、元来傾斜が急な南側斜面への盛土を避け、緩傾斜をなす北側斜面に盛土することによって、自然地形を無理なく利用したかたちで墳丘を築造しようとしたためと考えられる。

北側では、地山を高さ60cm程削り出して墳裾を設定し、その周囲に明確な平坦面を設けている。これによって、結果的には後述する周溝との間に幅1.0～1.3m程の平坦面ができている。この平坦面をつくり出す整地作業は、周溝の外側にもおよぶ範囲でなされているが、貯水池との関係でその広がりについては明らかにしえなかつた。なお、周溝との間の平坦面が中央部でやや広くなっているのは、その部分の墳裾が貯水池造成時に削り取られたためである。

東側と西側はすでに著しく改変を被っていて、墳裾の削り出し状況を明らかにすることはできなかつた。おそらく西側には尾根を切断する深い溝が掘られ、一連の作業として墳裾の削り出しが行なわれたと考えられる。ただし、後述する盛土の状況からみて、その作業が古墳築造の当初段階から行なわれたともいいがたい。南側については、多少とも封土の流出が予想されていたが、ほど円弧を描く等高線から何らかの状況は把握できるものと考えていた。ところが調査では、墳裾を明確に削り出したような状況は確認できなかつた。南北断面でみると、標高435.5m付近に地山がわずかに傾斜を変える場所があり、北側の墳裾の高さを考慮すれば、この辺りに墳裾が求められるのかもしれない。南東側の標高435～436mにはいったん傾斜が緩やかになる場所があり、トレンチ（第29図B-B'）を設けて土層断面の観察を行なったところ、南北断面と状況は変わらなかつたから（第31図）、墳丘の南側については平坦面を設けるというような整然とした墳裾の削り出しは行なわれなかつたらしい。

以上のような墳裾の削り出しおよび排出された土は、ただちに墳丘の盛土として利用されたと考えられる。北側に緩傾斜する斜面に盛土をすることから、作業は当然のこととして北側から進行している。

南北断面をみると、まず北側の旧地表縁辺部に幅3m、高さ0.4m程の土手状の盛土をしていることがわかる（第64・65層）。この盛土は、黒色土を主体に暗褐色、黄褐色土を混じるもので、墳裾の削り出しによって得られた地山上層の土を盛りあげたものとみられる。この最初の盛土の平面的広がりについては確認できなかつたが、墳丘の北西に設けたトレンチ（第29図A-A'）では、旧地表面が尾根の傾斜に沿って高さを増し、なおかつ同様の盛土は認められなかつたから（第30図）、盛土は上面で



第29図 七瀬3号古墳測量図(表土除去後) (1/150)

一定の高さを保って積まれ、弧状の土手をなしていたものと推測される。ただし、この土手が一連のものなのか、開口部をもつのかについては定かでない。このような土手を築いたのち、次にはその内部を充填する盛土が行なわれる（第47～63層）。この盛土は細かい層では水平に積まれているが、大きくみて上下2層にわかれれる。下層はかなり強く叩き締められ、黒色土を主体とする層と暗褐色土を主体とする層があるが、前者の場合でも黄褐色土の混入率が高い。上層は暗褐色土を主体とする層が主で、白色粘土、橙褐色粘土の混入が認められる。これらの状況からみて、土は先の盛土に比べ地山のより深い位置から供給されたものと考えられる。盛土の上面は南北で約9mあまりにおよび、南側にやや高くなるものの、ひとまずそのような平坦面をつくり出すことが、先の盛土を含めた一連の作業の目的だったといってよい。

東西断面でみると、次にそうした平坦面の西側縁辺部に幅3.5m、高さ0.5m程の土手状の盛土をしていることがわかる（第43～46層）。この盛土は、黒色土や暗褐色土を主体とするもので、近くに供給源を求めるすれば、尾根の切斷にともなう地山上層の排出土が考えられる。このような盛土は東側には認められず、すでに流出してしまった可能性が高いが、定かではない。その平面的状況は確認できなかったが、南北断面にはあらわれていないから、部分的なものだったとみてよい。削られたかのように南側に不自然に立ち上がる旧地表面の最高点と盛土の上面の高さがほぼ一致することから、それに連続するかたちで弧状の土手をなしていたと推測される。かりに東側にも同様の土手を想定してよければ、この段階で北側に開口する馬蹄形の土手が巡らされていた格好になる。この土手内への盛土が次に行なわれる（第18～42層）。この盛土は、黒色土、暗褐色土、黄褐色土をそれぞれ主体とする層からなるが、白色粘土、橙褐色粘土の混入率はかなり高く、それらの混土層といつてもよいぐらいである。おそらくこの段階では、尾根の切斷が深部に達し、埴丘南側斜面の地山整形も行なわれて、それらの排出土が盛土として供給されたのだろう。各層はほぼ水平に積まれ、西側ではかなり細かい互層状を呈している（東西断面）。土の搬入は、土手が切れた北側から行なわれたと考えられ、最終的には中心部に向かって押しつけるような積み方が認められる。断面図で見る限り、平面的には南北約9m、東西13m以上の橢円形の土壘が平坦面上につくられ、北側周縁部に幅2.8m程の平坦部を残すかたちとなっている。

次に、この平坦部を埋めるために北側から押しつけるような盛土（第10～17層）が行なわれ、埴丘のほぼ全体がつくられる。この盛土は平面三日月状を呈し、各層は、黒色土、暗褐色土、黄褐色土から構成され、かなり強く叩き締められている。土の状況と搬入路を考慮すれば、この段階で北側の周溝掘削が進行し始めたと考えられる。また、同様に木棺搬入の利便を考えれば、この盛土の前段階で土壘上から墓壙が掘られ、木棺が搬入・安置されて、本古墳の最初の埋葬=第3主体部が営まれたことも否定できない。このことは、第3主体部と当の盛土との切り合い関係が認められないことから、あくまで可能性として指摘しておきたい。あるいは、次に述べる最終的な盛土の供給源を念頭に置けば、周溝を一部掘り残して木棺搬入路を確保し、埴丘がひとまず完成した段階で順次主体部を造営した可能性もある。

ともあれ近くともこの盛土のうち、埴丘の中心に第3主体部が営まれたことはまちがいない。つづいて第2主体部、第1主体部が営まれ、計3回の埋葬が行なわれている。第2主体部、第1主体部の先後関係については、層位的にとらえることができなかつたが、埋葬施設の深さや規模、さらには最終的な盛土に第1主体部のみ陥没が認められることなどを考慮すれば、第2主体部が先行して営まれ



第30図 七瀬3号古墳埴丘、周溝土層断面図 (A-A') [1/60]

たとみるのが穩當であろう。

こうして3回の埋葬が終了したのち、埴丘頂部にうすく盛土（第8・9層）をして最終的に埴丘を完成している。この盛土は黄褐色土を主体に白色粘土を含むものが大部分で、先に述べたような木棺搬入路を最終的に取り払って、その跡出土を盛ったこともひとつの可能性として想定される。以上のように完成した埴丘の規模を、北側の埴縁線を基準にして算定すれば、直径約20m、高さ約2.3m、埴丘部平坦面の直径7m前後、埴斜面（北側）の傾斜約21°ということになる。

d. 周 溝 (第29・30図、図版4)

北側では、周溝を掘ることによって埴域を区画している。周溝は、貯水池によって東西に分断されたかたちで検出されたが、貯水池造成の際、現在埴丘に面したフェンスの内側付近で周溝の存在が確認されている。周溝の東側は崖によって、また西側は道路によってそれぞれ切断されているため、埴丘をどのように巡るのかについては明らかにしない。西側については、尾根との切離部分に連続していたことが考えられ、東側についてもさらに先に延びることが指摘できるが、埴丘の南側では周溝は認められなかったから、完周するものではない。規模は、上端で幅2.15~2.3m、深さ40~50cm程度を測る。その断面形についてみると、底は外側に若干傾斜するもののほぼ平坦で、壁面は内壁が緩やかに立ち上がるのに対し、外壁はかなり急に立ち上がっている。西側の周溝にかけて設定したトレーニチ（第29図A-A'）の土層断面観察によれば、掘り込みは地山の黄褐色土（第30図第10層）から行なわれており、それより上層については周溝掘削以前の整地作業により削平されている。

e. 築造過程 (第32図)

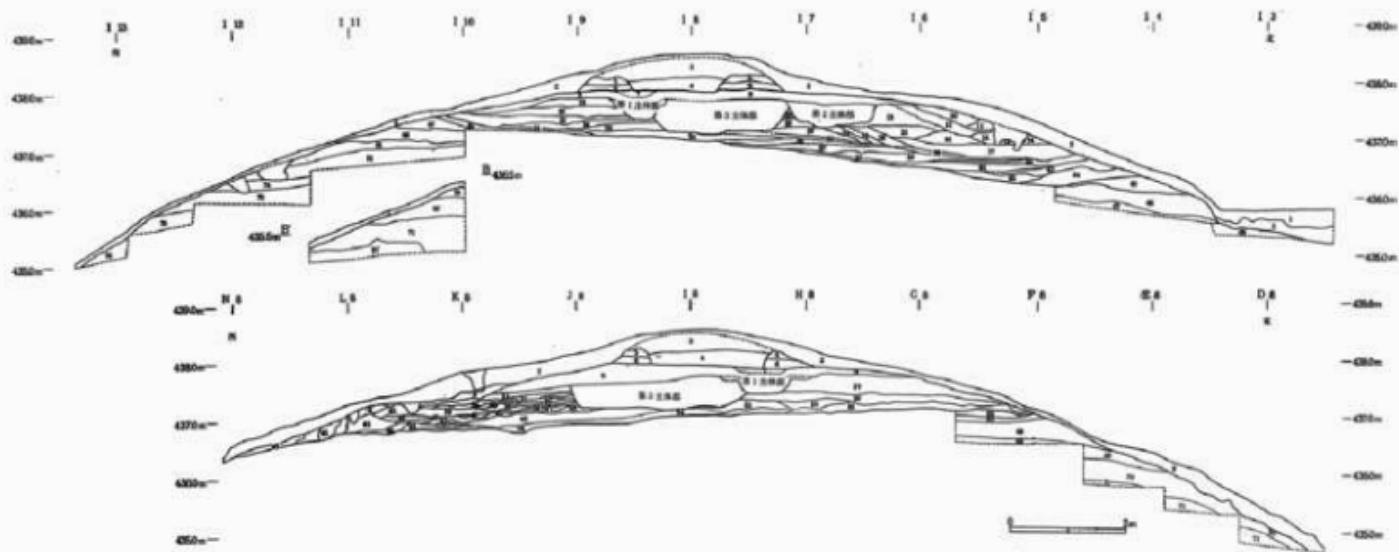
前項までの調査所見にもとづき、本古墳の築造過程を段階的に整理すれば、以下のようになる。

第1段階 主に北側の地山を削り出して埴縁を示し、周囲には平坦面を設ける。ここで得られた土は、旧地表面の北側縁辺部に積まれ、弧状の土手を形成する（第1次盛土）。

第2段階 第1段階で築かれた土手の内部に盛土を行ない、中位にいたん広い平坦面をつくり出す（第2次盛土）。

第3段階 第2段階でつくり出された平坦面の西側縁辺部に盛土を行ない、弧状の土手を形成する（第3次盛土）。東側にも同様の土手を想定すれば、地山の高まりともあわせて、北側に開口する馬蹄形の土手が形成される。

第4段階 第3段階で築かれた土手の内部に盛土を行ない、北側に平坦部を残して椿円形の土壇を形成する（第4次盛土）。盛土は地山深くの土を多く含み、この段階までに尾根の切



土壤剖面

1. 土。山地出露地帯。

2. 土。

3. 土。L-S1。

4. 土。山地出露地帯。L-S1.

5. 土。L-S1.

6. 土。L-S1.

7. 土。L-S1.

8. 土。L-S1.

9. 土。L-S1.

10. 土。L-S1.

11. 土。L-S1.

12. 土。L-S1.

13. 土。L-S1.

14. 土。L-S1.

15. 土。L-S1.

16. 土。L-S1.

17. 土。L-S1.

18. 土。L-S1.

19. 土。L-S1.

20. 土。L-S1.

21. 土。L-S1.

22. 土。L-S1.

23. 土。黄褐色土。黄褐色土と砂岩の接觸部。薄い砂岩層を有する。

24. 土。黄褐色土。

25. 土。黄褐色土。薄い砂岩層を有する。

26. 土。黄褐色土。薄い砂岩層を有する。

27. 土。黄褐色土。薄い砂岩層を有する。

28. 土。黄褐色土。薄い砂岩層を有する。

29. 土。黄褐色土。薄い砂岩層を有する。

30. 土。黄褐色土。薄い砂岩層を有する。

31. 土。黄褐色土。薄い砂岩層を有する。

32. 土。黄褐色土。薄い砂岩層を有する。

33. 土。黄褐色土。薄い砂岩層を有する。

34. 土。黄褐色土。薄い砂岩層を有する。

35. 土。黄褐色土。薄い砂岩層を有する。

36. 土。黄褐色土。薄い砂岩層を有する。

37. 土。黄褐色土。薄い砂岩層を有する。

38. 土。黄褐色土。薄い砂岩層を有する。

39. 土。黄褐色土。薄い砂岩層を有する。

40. 土。黄褐色土。薄い砂岩層を有する。

41. 土。黄褐色土。薄い砂岩層を有する。

42. 土。黄褐色土。薄い砂岩層を有する。

43. 土。黄褐色土。薄い砂岩層を有する。

44. 土。黄褐色土。薄い砂岩層を有する。

45. 土。黄褐色土。薄い砂岩層を有する。

46. 土。褐褐色土。可塑性粘土。灰黑色粘土層に薄い砂岩層を有する。LETAN.

47. 土。褐褐色土。可塑性粘土層に薄い砂岩層を有する。LETAN.

48. 土。褐褐色土。可塑性粘土層に薄い砂岩層を有する。LETAN.

49. 土。褐褐色土。可塑性粘土層に薄い砂岩層を有する。LETAN.

50. 土。褐褐色土。可塑性粘土層に薄い砂岩層を有する。LETAN.

51. 土。褐褐色土。可塑性粘土層に薄い砂岩層を有する。LETAN.

52. 土。褐褐色土。可塑性粘土層に薄い砂岩層を有する。LETAN.

53. 土。褐褐色土。可塑性粘土層に薄い砂岩層を有する。LETAN.

54. 土。褐褐色土。可塑性粘土層に薄い砂岩層を有する。LETAN.

55. 土。褐褐色土。可塑性粘土層に薄い砂岩層を有する。LETAN.

56. 土。褐褐色土。可塑性粘土層に薄い砂岩層を有する。LETAN.

57. 土。褐褐色土。可塑性粘土層に薄い砂岩層を有する。LETAN.

58. 土。褐褐色土。可塑性粘土層に薄い砂岩層を有する。LETAN.

59. 土。褐褐色土。可塑性粘土層に薄い砂岩層を有する。LETAN.

60. 土。褐褐色土。可塑性粘土層に薄い砂岩層を有する。LETAN.

61. 土。褐褐色土。可塑性粘土層に薄い砂岩層を有する。LETAN.

62. 土。褐褐色土。可塑性粘土層に薄い砂岩層を有する。LETAN.

63. 土。褐褐色土。可塑性粘土層に薄い砂岩層を有する。LETAN.

64. 土。褐褐色土。可塑性粘土層に薄い砂岩層を有する。LETAN.

65. 土。褐褐色土。可塑性粘土層に薄い砂岩層を有する。LETAN.

66. 土。褐褐色土。可塑性粘土層に薄い砂岩層を有する。LETAN.

67. 土。褐褐色土。可塑性粘土層に薄い砂岩層を有する。LETAN.

68. 土。褐褐色土。可塑性粘土層に薄い砂岩層を有する。LETAN.

69. 土。灰褐色土。褐褐色土。

70. 土。褐褐色土。

71. 土。褐褐色土。

72. 土。褐褐色土。

73. 土。褐褐色土。

74. 土。褐褐色土。

75. 土。褐褐色土。

76. 土。褐褐色土。

77. 土。褐褐色土。

78. 土。褐褐色土。

79. 土。褐褐色土。

80. 土。褐褐色土。

81. 土。褐褐色土。

82. 土。褐褐色土。

83. 土。褐褐色土。

84. 土。褐褐色土。

85. 土。褐褐色土。

86. 土。褐褐色土。

87. 土。褐褐色土。

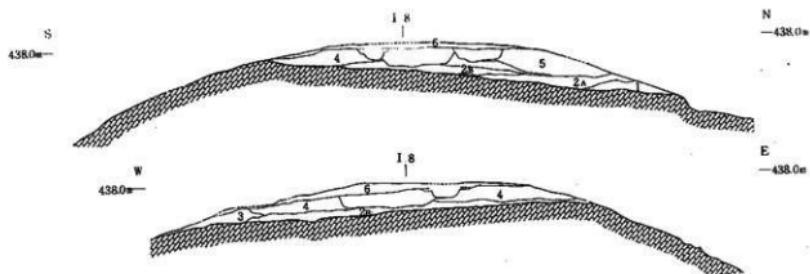
88. 土。褐褐色土。

89. 土。褐褐色土。

90. 土。褐褐色土。

91. 土。褐褐色土。

図版4 七里ヶ原古生層丘陵剖面図 (1/400)



第32図 七瀬3号古墳の築造過程（第1～6次盛土）[1/100]

断、南側の地山整形はかなり進行している。また、この段階のおわりで第3主体部が造営された可能性もある。

第5段階 第4段階で残された北側の平坦部に盛土を行ない、墳丘をほぼ完成させる（第5次盛土）。同時に、盛土の獲得と墳域の区画のため周溝を掘削する。遅くともこの段階のおわりで第3主体部が營まれ、順次第2主体部、第1主体部が營まれる。

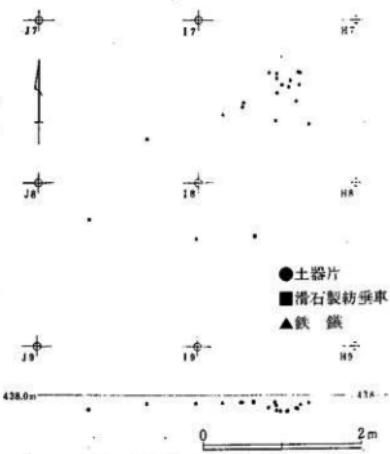
第6段階 3回の埋葬終了後、墳頂部にうすく盛土をして墳丘を完成する（第6次盛土）。

以上、やや推測に過ぎたが、本古墳の築造過程をまとめてみた。細部はなお検討を要するが、本古墳の盛土手法は、弧状の土手を築き地山の低い側から内部を充填する作業の繰り返しといえよう。

f. 遺物出土状況（第33図）

墳頂部平坦面と周溝から遺物が出土している。墳頂部平坦面からは、土師器、鉄鎌、滑石製筋轡車が出土している。土師器はいずれも細片化しており、器種・器形のわかるものは皆無に近い。高環の脚部1点がどうにか認められただけである。出土量はわずかで、半紙大のビニール袋半分にも満たぬほどである。墳頂部の中心に多いというほかは出土地点に一定の傾向はなく、H7グリッドに認められる集中地点は、後述する第3主体部の盗掘坑に関わるものである。これらの土師器ひとつひとつが、本古墳の墳頂部祭祀に関わるものなのか、主体部の盗掘に関わるものなのかは明らかでない。鉄鎌は2点出土している。いずれも欠損品で、後述するように本古墳の年代とはかけ離れた時期の所産とみられる。それらが何に由来するものなのか、いまは不明といわざるをえない。滑石製筋轡車は破片2点が出土している。そのつくりは古墳時代中期に遡りうるもので、第3主体部の盗掘に関わる可能性もある。

周溝からは、円筒埴輪細片とみられるものが数点出土している。周溝西側の埋土上層から出土しており、本古墳に樹立されていたものとは考えがたい。七瀬双子塚古墳に関わるものであろうか。



第33図 七瀬3号古墳墳頂部遺物出土状況[1/30]

(2) 埋葬施設

a. 検出状況

七瀬3号古墳からは計3基の埋葬施設が検出されている。いずれも墓壙内に割竹形木棺を安置したもので、主軸をほぼ北東～南西とする。3基とも第6次盛土以前の同一面から掘り込まれているが、相互に切り合い関係が認められ、第3主体部→第2主体部・第1主体部という順序で営まれたことが判明している。調査では、当初第2主体部の存在に気づかず、第3主体部の調査終了後、墳丘の断ち割りを進めた時点でそれを確認したため、第2主体部の墓壙壁西半を壊す結果となってしまった。盛土との区別が困難だったとはいえ、痛恨の念にたえない。ご寛恕願いたい。

b. 第1主体部（第35、37図、図版5）

墳頂部の南側に偏した位置で検出された。墳頂部の小墳丘を除去後、第6次盛土上面に細長い黒色の落ち込みが認められ掘り下げを進めたが、うまく壁を検出できなかった。のちになってそれは木棺の陥没による落ち込みとわかり、墓壙は第6次盛土以前に掘り込まれていることが判明した。

墓壙は2段に掘り込まれている。平面形は長方形を呈すると考えられるが、上段の掘り込みが浅いことと、掘り込みが第2主体部埋土中になされていることもあって、全体の輪郭をつかむことはできなかった。検出された南東壁（長辺）の掘り込みは、深さ10～15cmで、下段の掘り込みとの間は、幅10～20cmを測る。下段の掘り込みは棺を据え置くためのもので、長さ295cm、幅40～55cm、深さ15～20cmを測り、主軸をN54°Eにとる。横断面はU字形を呈し、両小口は斜めに立ち上がっている。底に沿って炭化した棺材の一部が検出されており、割竹形木棺を安置したものとみられる。

陥没土中で土師器細片4点が出土しているが、主体部にともなう遺物は一切出土していない。

c. 第2主体部（第34、35図、図版6）

墳頂部の北側に偏した位置で検出された。墳丘の断ち割りを進めた時点で発見されたため、墓壙の西半分については十分な調査ができなかった。墓壙は第4次盛土と第5次盛土を掘り込み、東側では一部第3主体部と重複してそれを切り込んでいる。

墓壙は長方形に大きく掘ったのち、棺を固定する程度に中央部をわずかに掘りくぼめている。西側でもほぼ底が失われなかった棺の掘り込みを参考にすると、墓壙の長さは約330cmと復原できる。幅は北東壁で135cm、深さは30～35cmを測る。棺の掘り込みは、長さ約240cm（復原）、幅45cm（小口部）、深

438.0m E

E 438.0m

438.0m F

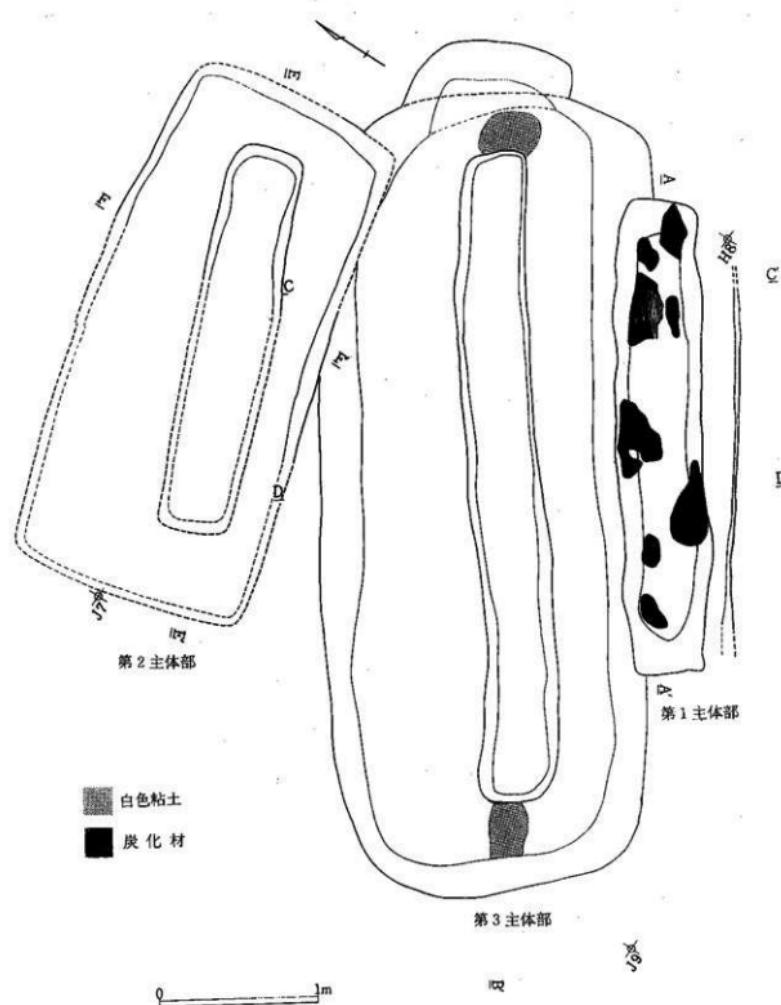
F 438.0m

土層説明

- 第1層 黄褐色土 墓丘土層断面図第9層と同じ。
- 第2層 黒褐色土 黒色土を主体に暗褐色土塊、黄褐色土塊、橙褐色土塊、白色粘土塊を含む。しまりなし。
- 第3層 黄褐色土 橙褐色土粒子、白色粘土粒子を含む。
- 第4層 灰褐色土 橙褐色土粒子を含む。

0 1m

第34図 七瀬3号古墳第2主体部断面図 [1/30]



第35圖 七澗3號古墳第1・2・3主體部平面圖 [1/30]

さ5~10cmを測る。主軸はN67°Eで、全体の掘り込みの主軸よりは明らかに北に振っている。横断面はU字形を呈し、棺の形状を示す灰褐色土（第34図第3層）が底に沿ってうすく認められたことから、割竹形木棺を安置したものとみられる。

d. 第2主体部遺物出土状況（第36図、図版6・7）

第2主体部にともなう遺物はすべて棺内からの出土で、いずれもほぼ原位置を保った状態で出土している。その内訳は、豊橋5点、遊環付鉄釧1点、碧玉製管玉2点、ガラス製小玉152点、滑石製白玉135点で、すべて装身具である。それらは、頭部付近、右手付近、左手付近の3カ所にまとまっており、棺の東半から出土している。

頭部付近からは、豊橋5点、ガラス製小玉83点、滑石製白玉100点が出土している。豊橋はどれも齒が打ちてしまい、ムネの部分のみが残存していた。豊橋2は棒状の付属物をともなう大型の柄で、やはり大型の柄である豊橋1と歯を向かいあわせるかたちで、北寄りから出土した。豊橋2の棒状付属物のまわりからは、滑石製白玉100点がかなり密着した状態でまとめて出土しており、両者の有意な関係をうかがわせる。また、豊橋2の周辺からはごく微量ながら朱が検出されている。豊橋2とムネを向かいあわせ、その棒状付属物に直接のるかたちで、豊橋5が出土した。豊橋5は連結柄で、出土時は小型の柄7つが半円を描いた状態であった。豊橋5の東側に豊橋4が、また1点だけ離れて南寄りで豊橋3が出土したが、ともにムネの一部を残すのみであった。ガラス製小玉は、首付近と思われる場所で南北2群にわかれて出土した。両群とも南北に弧状に連なり、一連の首飾りを構成するものと考えられるが、中間の空白が何とも理解しがたい。南群は定かでないが、北群は明らかに同一レベルで玉が2列に連なっており、注目される。

右手付近からは、遊環付鉄釧1点、碧玉製管玉1点、ガラス製小玉24点、滑石製白玉32点が出土している。玉類は手玉を構成するものとみてよく、鉄釧とともに着表状態を示すものである。

左手付近からは、ガラス製小玉12点が出土している。この周辺は墳丘の断ち割り部分にかかるおり、不時の発見でガラス製小玉の多くを取り上げてしまったが（位置不明33点）、その大部分は左手付近からの出土とみてまちがいない。位置不明の碧玉製管玉1点もここからの出土とみられ、それらの玉類で着表状態の手玉を構成していたものと考えられる。

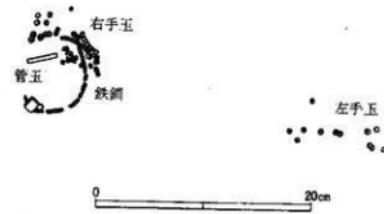
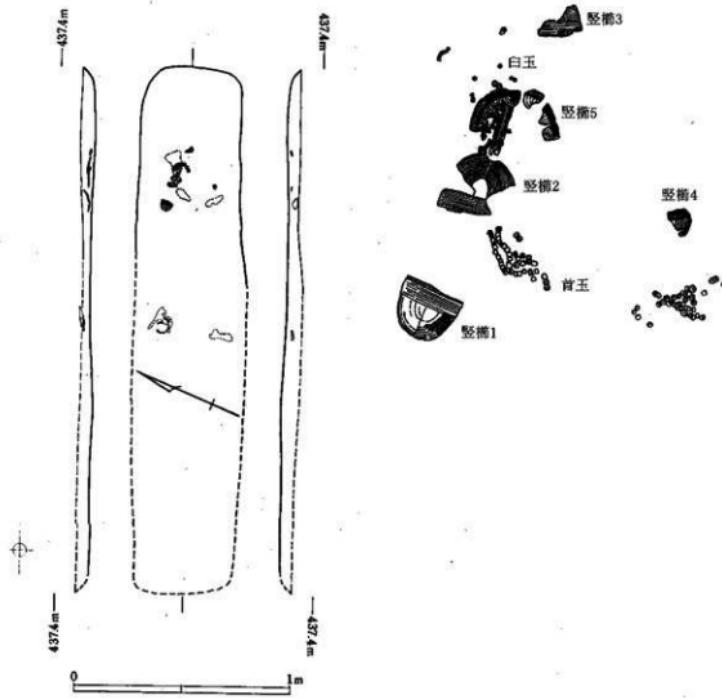
e. 第3主体部（第35・37図、図版8）

墳頂部の中心で検出された本古墳の中心的な埋葬施設である。墓壙は第4次盛土を掘り込み、地山にまでは達していない。

墓壙は隅丸長方形に大きく掘ったのち、棺を固定する程度に中央部をわずかに掘りくぼめている。北東壁（短辺）の中央部が盜掘坑によって、また南東壁（長辺）の大部分が第1主体部によって破壊されているが、長さ約500cm、幅200cm前後と復原される。深さは40~60cm程度で、南東壁の立ち上がりはやや緩やかである。棺の掘り込みは、長さ405cm、幅45cm、深さ5cmを測り、主軸をN52°Eにとる。横断面はU字形を呈し、棺の痕跡を示す灰褐色土（第37図第7層）が、底に沿って認められたことから、割竹形木棺を安置したものとみられる。また、両小口には白色粘土（第37図第8層）が認められ、それによって棺の固定をはかったことがわかる。

f. 第3主体部遺物出土状況（第38図、図版8・9）

第3主体部に明らかにともなう遺物はすべて棺内からの出土で、それらはほぼ原位置を保った状態で出土している。その内訳は、埋葬人骨1体、豊橋3点、鉄釧1点、ガラス製小玉215点、滑石製白玉



第36圖 七瀨3號古墳第2主体部遺物出土狀況〔左：1/20、右：1/4〕

土層説明

A' 4380m A.
第1層 黑褐色土 加灰土質無鉄器層7層に同じ。
第2層 黃褐色土 地王層斷面因縁9層に同じ。

第3層 黃褐色土 黑色土粒子、白粘土粒子若干含む。

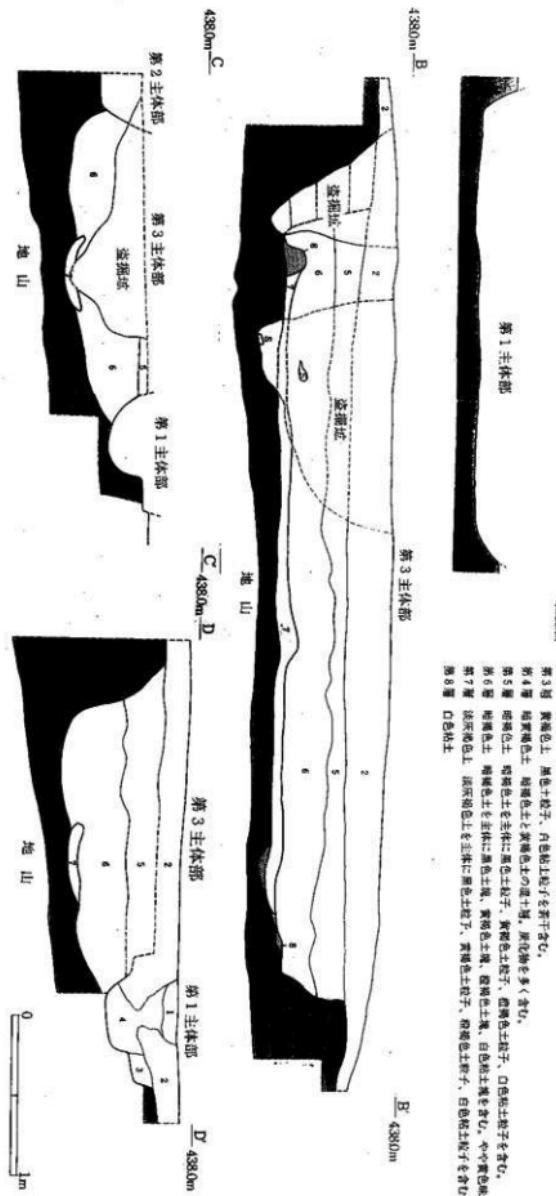
第4層 結構色土 黑褐色土と黄褐色土の混生層。炭化物を多く含む。

第5層 黃褐色土 黑褐色土と黄褐色土粒子、結構色土塊、白粘土塊を含む。

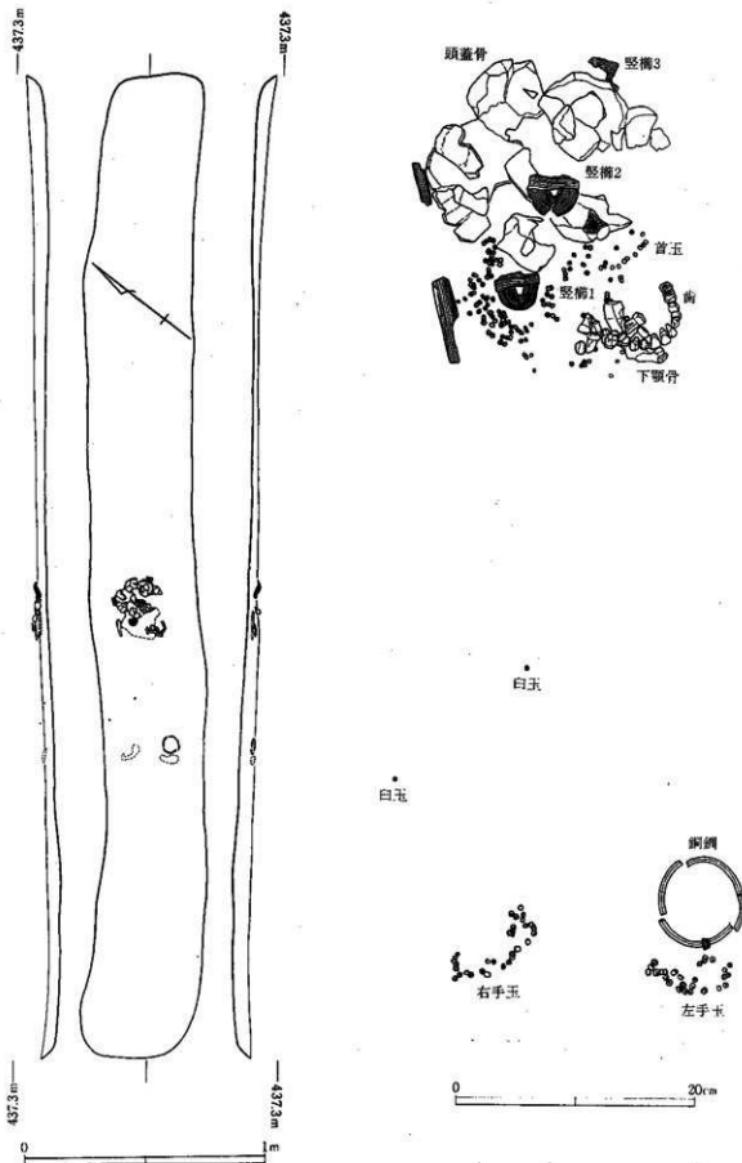
第6層 地王層 黑褐色土を主とした黑色土塊、黄褐色土塊、結構色土塊、白色土塊を含む。やや色變性。

第7層 淡灰色土 淡灰色土上を主として黑色土粒子、黃褐色土粒子、結構色土粒子、白色粘土粒子を含む。

第8層 白色粘土



第37図 七編3号古墳第1・3主体部断面図 [1/30]



第38圖 七漸3號古墳第3主体部遺物出土狀況〔左：1/20、右：1/4〕

3点で、人骨以外はすべて装身品である。遺物は主に、頭部、右手付近、左手付近の3ヵ所にまとまって出土している。なお、盗掘坑内からは、刀子2点、土師器細片が出土している。

人骨は棺の中央からやや南西に寄った位置で検出され、頭蓋骨と右上腕骨らしい長骨が出土している。頭蓋骨は頭頂を北東に向かって、右側頭部を上にして潰れた状態で出土した。骨は部分的な遺存ですべて破片と化していたが、歯の遺存はかなり良好であった。右上腕骨とみられる長骨は、頭蓋骨の北西に沿って出土した。頭蓋骨との位置関係にやや問題が残るが、解剖学的自然位を著しく逸脱するものではない。これらは、20歳代（後半？）の女性人骨と推定される。（P114）

この頭蓋骨に関わって、堅櫛3点、ガラス製小玉154点、滑石製白玉1点が出土している。堅櫛1は頭蓋骨の南西に接して、堅櫛2は頭蓋骨の上で、ともに歯を頭頂側に向けて出土した。堅櫛3は頭蓋骨の下に接して最も北東寄りで出土し、歯を南に向けていた。玉類は、はずれ落ちた頭骨と頭蓋骨の間で、頭蓋骨の下辺を取り巻くように出土した。首飾りを構成するものみてよく、着装状態を示すものである。

頭蓋骨が出土した場所から50cm程南西に寄った左右の手付近で、それぞれ遺物が出土している。いずれも着装状態を示すものである。

右手付近からは、ガラス製小玉34点が出土している。部分的に途切れていますが、リング状に連なっており、手玉を構成するものである。

左手付近からは、銅鏡1点、ガラス製小玉27点が出土している。小玉はリング状に連なっており、右手同様手玉を構成するものである。なお、銅鏡の上からは木質らしき断片が検出されている。

頭と右手の間、ちょうど右胸のあたりで、滑石製白玉3点が出土している。ともに離れて、棺床からやや浮いた状態であった。首飾りから逸脱したものであろうか。

以上の棺内遺物は、すべて棺西半から出土しており、棺東半には遺物は検出されなかった。平面的にはとらえきれなかったが、棺東半には棺床の中心を掘り抜いた盗掘坑が確認されており、それによって遺物が持ち出された可能性はある。しかし、盗掘坑は一部におよぶもので、もともと棺東半に棺西半を上回る遺物があったとも考えにくい。盗掘坑の底からは嵌手刀子1点、上層からは刀子1点が出土しており、第3主体部への帰属が有力だが、確証はない。

（滝沢 賢）

(3) 出土遺物

a. 第2主体部出土遺物

堅 櫛 (第39図、図版7・13)

大型の堅櫛4点と、小型の堅櫛を繋げた連結櫛1点が出土している。いずれも歯は朽ちてしまつており、ムネの部分だけ残存している。

1は欠損しているが、ムネの高さ5.3cmを測る。残りが悪く、ほぼ漆膜のみとなっている。このムネの頂部とその一端を接して、幅約1cm、現存長5.1cmの棒状のものが出土している。やはり本体が腐朽し、漆膜のみが残る。ムネに近い部分に幅4mmほどの薄い帯状のものが付着しており、これも漆が塗られていることからも、櫛と一体を成すものである可能性が高い。しかしムネ部との接続状況は、その部分が欠損しているためはっきりしない。ムネ部の表面も遺存状態が悪いためその痕跡を窺うことは

できないが、横本体とは異なる断片の付着が僅かに見られる。棒状部の周囲からは滑石製白玉がまとまって出土しており、これと関連していたとも考えられる。

2は最も残りがよい。ムネ幅5.8cm、ムネの高さ4.5cmを測る。基本的な構造は通常見られるものと特に変わることろはなく、竹ひごを並べて束ねたものを糸でくくりつけた横棒が、わずかではあるが観察される。黒漆が厚く塗られているため、細かい構造や、巻き縛り部分の材質などは明らかではない。

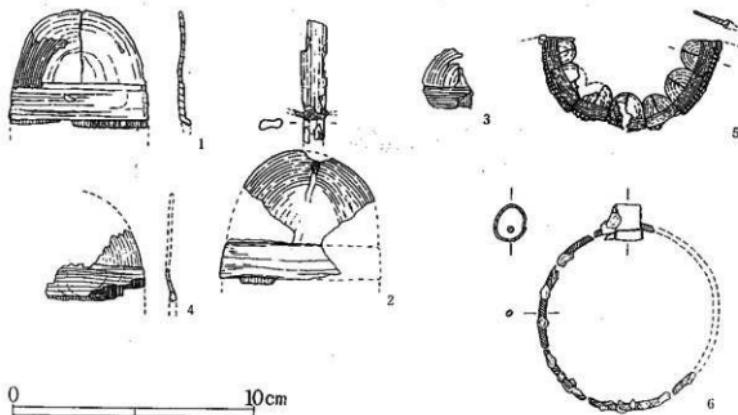
3、4はともにごく一部分の残存にすぎないが、4については1、2と同程度の大きさと推定される。この大きさはこれまで出土した豎櫛の中では最も大型のものに属すると思われる。

5は連結櫛である。ムネ幅1.5cm、ムネの高さ1.5cmほどの小型の豎櫛7点を横に並べて組ねている。残っているのはムネの部分だけであるが、それが全体として弧を描き、ほぼ半円状を呈した形で出土した。各櫛は、齒の基にくくり付ける横棒を7点で共用することによって連結されていることがわかる。やはり全体に黒漆が塗られている。

鉄 鋼 (第39図、図版7・14)

遊環付のものが1点出土している。鋼の本体は、鋳造し、破損しているが、ほぼ正円形になるものと考えられ、直徑8cmに復原される。全体の三分の一程は欠失してしまっている。径約2.5mmの、細かい擬じりの加えられた鉄線を曲げて環状にしたものであるが、その接続部分の状況は明らかではない。遊環は、幅約1cm、厚さ約1mmの帯状の鉄板を輪にしたもので、二つが残っている。一つは残りがよく、長径1.6cm程のやや潰れた環状を呈している。その遊環の内側に、入れ子状に入り込んだ形で、もう一つの遊環が鋳造している。ほぼ、同形、同大のものと推定される。

(三木ますみ)



第39図 七瀬3号古墳第2主体部出土豎櫛鉄鋼 (1/2)

玉類

管玉2点、ガラス製小玉152点、滑石製白玉135点が出土した。これらは、頭、首、右手、左手の各部位から検出された。

頭（第7表、第40図）

滑石製白玉が100点出土している。1~95はいずれも灰色がかかったうす緑を呈し、側面形が算盤玉状をなすものも少なくない。平均は直径2.60mm、厚さ1.36mm、質量0.01gと非常に小ぶりである。96~100はいずれも灰色がかかったうす緑を呈し、平均は直径4.36mm、厚さ2.15mm、質量0.05gである。100点がつながっていたかどうか明確ではないが、総長は13.19cmとなる。

首（第8表、第40~41図）

ガラス製小玉が83点出土している。色調は、コバルト発色による濃紺色を呈する。気泡列が観察されたことから、管状のガラスを切断する、いわゆる「管切法」で製作されたことがわかる。27に縱方向の溝、31には割れ目、70には色調の差による縦縞がある。これはガラス管を製作する時、質のばらつきがあったためであろう。また形が必ずしも一定でないのは、ガラス管から切断された時に不整形であったためと、最後に形を整えるためなされる再加熱の度合いが一定でなかったからと考えられる。平均は直径5.15mm、厚さ3.59mm、質量0.12g、総長は29.10cmとなる。

右手（第9表、第41図）

管玉が1点、ガラス製小玉が24点、滑石製白玉が32点出土している。まず管玉であるが、緑色凝灰岩製で、色調はうすい黄緑色を呈する。穿孔は両方向からなされている。直径4.10mm、長さ26.30mm、質量0.40gである。ガラス製小玉は、色調はいずれも濃紺色を呈し、気泡列が観察された例は少ないが、管切法で製作されたと考えられる。平均は直径4.75mm、厚さ3.18mm、質量0.10gである。総長は7.62cmとなる。滑石製白玉は、いずれも灰色がかかったうす緑を呈し、側面形が算盤玉状をなすものが多い。平均は直径3.42mm、厚さ2.28mm、質量0.03gである。総長は7.29cmとなる。小玉と白玉の総長を合わせると14.91cm。さらに管玉を加えると17.54cmとなる。

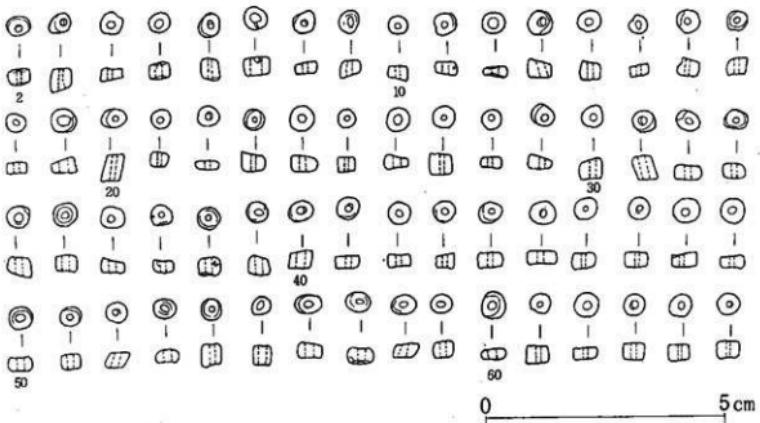
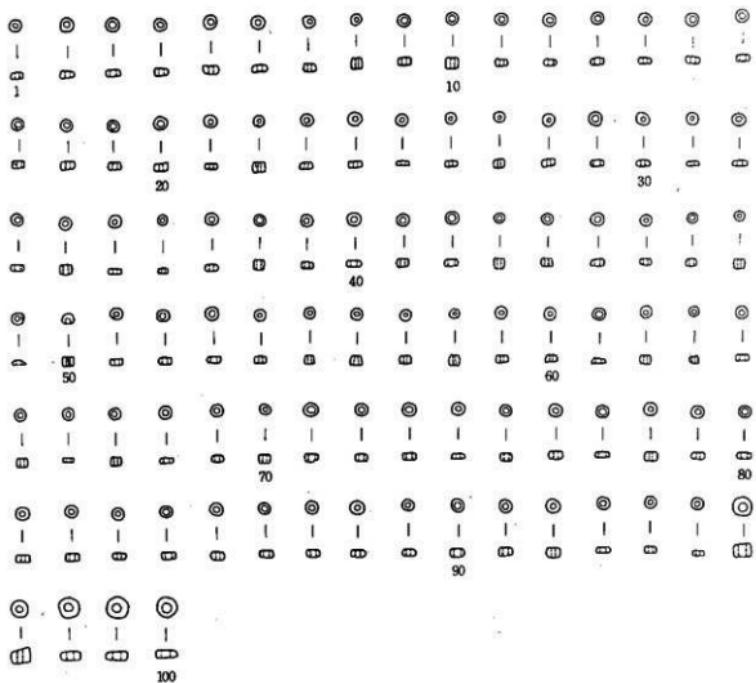
左手（第10表、第41図）

ガラス製小玉が12点出土している。色調は9が褐色であるのを除き、濃紺色である。管切法で製作されたものである。平均は直径4.96mm、厚さ3.25mm、質量0.09gである。総長は3.58cmとなる。

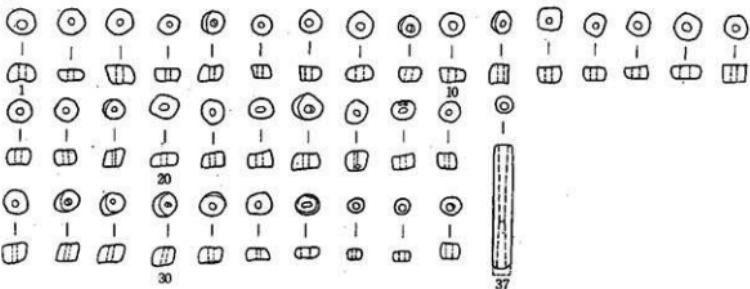
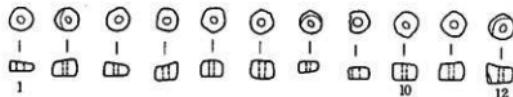
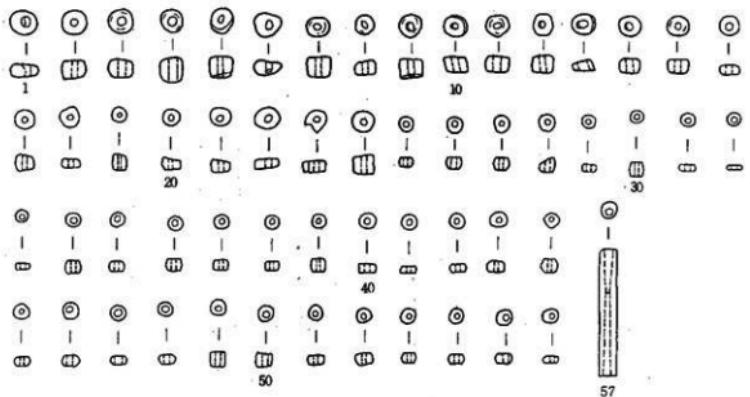
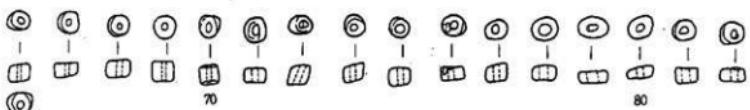
手【位置不明】（第11表、第41図）

管玉が1点、ガラス製小玉が33点、滑石製白玉が3点出土している。おそらく大半が、左手玉類に属すると考えられる。管玉は右手のそれと同様に緑色凝灰岩製で、うすい黄緑色を呈する。穿孔もやはり両方向からなされている。直径4.20mm、長さ25.10mm、質量0.43gである。ガラス製小玉は、16、23が褐色、31、32が紫色であるほかはすべて濃紺色を呈する。管切法で製作されたもので、平均は直径5.05mm、厚さ3.53mm、質量0.12gである。総長は11.64cmとなる。滑石製白玉は、34、35が灰色がかかったうす緑、36が灰白色である。平均は直径3.72mm、厚さ2.82mm、質量0.06gである。総長は0.85cmとなる。小玉、白玉の総長を左手のものと合わせると16.07cm。さらに管玉を加えると18.56cmとなる。

（國井弘紀）



第40圖 七瀬3号古墳第2主体部出土玉類 上段：頭、下段：首（1欠）（1/1）



0 5 cm

第41図 七瀬3号古墳第2主体部出土玉類 上段から首(78枚)、右手、左手(2枚)、位置不明 [1/1]

第7表 七瀬3号古墳 第2主体部玉類計測表I (頭:白玉)

番号	色調	材質	直徑	厚さ	質量
1	灰綠	滑石			
2	灰綠	滑石	2.60	1.35	0.01
3	灰綠	滑石	2.60	1.15	
4	灰綠	滑石	2.60	1.25	
5	灰綠	滑石	2.85	1.45	0.01
6	灰綠	滑石	2.65	1.40	0.01
7	灰綠	滑石	2.65	1.30	0.02
8	灰綠	滑石	2.30	2.00	
9	灰綠	滑石	2.80	1.40	
10	灰綠	滑石	2.50	2.40	0.02
11	灰綠	滑石	2.70	1.20	
12	灰綠	滑石	2.60	1.25	
13	灰綠	滑石	2.65	1.40	
14	灰綠	滑石	2.65	1.50	0.01
15	灰綠	滑石	2.70	1.35	0.01
16	灰綠	滑石	2.60	1.05	0.01
17	灰綠	滑石	2.45	1.80	
18	灰綠	滑石	2.65	1.30	0.01
19	灰綠	滑石	2.45	1.60	0.01
20	灰綠	滑石	2.60	1.45	0.01
21	灰綠	滑石	2.55	1.00	0.01
22	灰綠	滑石	2.40	1.95	0.01
23	灰綠	滑石	2.65	1.50	0.01
24	灰綠	滑石	2.60	1.30	0.01
25	灰綠	滑石	2.55	0.75	
26	灰綠	滑石	2.65	1.20	
27	灰綠	滑石	2.70	1.65	0.01
28	灰綠	滑石	2.70	1.60	0.01
29	灰綠	滑石	2.75	1.10	0.01
30	灰綠	滑石	2.70	1.05	
31	灰綠	滑石	2.60	0.85	0.01
32	灰綠	滑石	2.70	1.10	
33	灰綠	滑石	2.45	1.30	
34	灰綠	滑石	2.65	1.75	0.01
35	灰綠	滑石	2.55	1.15	0.01
36	灰綠	滑石			0.01
37	灰綠	滑石	2.60	1.60	0.02
38	灰綠	滑石	2.65	1.90	
39	灰綠	滑石	2.65	1.40	0.01
40	灰綠	滑石	2.70	1.05	
41	灰綠	滑石	2.65	1.70	
42	灰綠	滑石	2.55	1.25	
43	灰綠	滑石	2.35	2.20	0.01
44	灰綠	滑石	2.45	1.75	
45	灰綠	滑石	2.70	1.30	0.01
46	灰綠	滑石	2.60	1.10	0.01
47	灰綠	滑石	2.55	1.65	0.01
48	灰綠	滑石	2.40	2.25	0.01
49	灰綠	滑石	2.60	0.80	
50	灰綠	滑石	2.20	1.80	0.01
51	灰綠	滑石	2.55	1.40	0.01
52	灰綠	滑石	2.65	1.45	0.01
53	灰綠	滑石	2.70	1.20	0.01
54	灰綠	滑石	2.75	1.40	0.02
55	灰綠	滑石	2.50	1.60	0.01
56	灰綠	滑石	2.50	1.70	0.01
57	灰綠	滑石	2.65	1.45	
58	灰綠	滑石	2.45	2.10	0.01
59	灰綠	滑石	2.70	1.30	0.02
60	灰綠	滑石	2.60	1.25	0.01
61	灰綠	滑石	2.55	0.85	
62	灰綠	滑石	2.70	1.60	0.01
63	灰綠	滑石	2.30	1.55	0.01
64	灰綠	滑石	2.60	1.20	0.01
65	灰綠	滑石	2.55	1.75	0.02
66	灰綠	滑石	2.60	0.95	0.01
67	灰綠	滑石	2.50	1.60	0.02
68	灰綠	滑石	2.65	1.00	0.01
69	灰綠	滑石	2.65	1.40	0.02
70	灰綠	滑石	2.40	1.90	0.01
71	灰綠	滑石	2.50	1.50	0.01
72	灰綠	滑石	2.60	1.45	0.02
73	灰綠	滑石	2.70	1.40	0.01
74	灰綠	滑石	2.70	1.00	0.02
75	灰綠	滑石	2.60	1.60	0.01
76	灰綠	滑石	2.70	1.40	0.02
77	灰綠	滑石	2.65	1.00	0.02
78	灰綠	滑石	2.65	1.65	0.01
79	灰綠	滑石	2.60	1.20	0.01
80	灰綠	滑石	2.55	1.20	0.01
81	灰綠	滑石	2.60	1.25	0.01
82	灰綠	滑石	2.60	1.35	0.01
83	灰綠	滑石	2.60	1.15	0.01
84	灰綠	滑石	2.55	1.20	0.01
85	灰綠	滑石	2.70	1.40	0.01
86	灰綠	滑石	2.60	1.40	0.02
87	灰綠	滑石	2.60	1.15	0.01
88	灰綠	滑石	2.70	1.05	0.01
89	灰綠	滑石	2.55	1.30	0.02
90	灰綠	滑石	2.60	1.20	0.01
91	灰綠	滑石	2.65	1.30	0.01
92	灰綠	滑石	2.60	1.80	0.02
93	灰綠	滑石	2.55	1.00	0.02
94	灰綠	滑石	2.60	1.40	0.01
95	灰綠	滑石	2.90	1.15	0.01
96	灰綠	滑石	3.95	2.60	0.05
97	灰綠	滑石	4.10	3.00	0.05
98	灰綠	滑石	4.45	1.70	0.06
99	灰綠	滑石	4.70	2.00	0.07
100	灰綠	滑石	4.60	1.45	0.04
					0.11

第8表 七瀬3号古墳 第2主体部玉類計測表II（首：小玉）

番号	色調	材質	直径	厚さ	質量	気泡	知照	備考	
1	濃紺	ガラス						破損	
2	濃紺	ガラス	5.15	2.90	0.08	有	無		
3	濃紺	ガラス	4.50	4.60	0.08	有	無	黒色の混入物	
4	濃紺	ガラス	5.10	2.90	0.10	有	有	黒色の混入物	
5	濃紺	ガラス	4.95	3.75	0.13	有	有		
6	濃紺	ガラス	5.05	4.25	0.14	有	有		
7	濃紺	ガラス	5.65	3.70	0.14	有	無	破損部分あり	
8	濃紺	ガラス	4.90	2.00	0.05	有	有		
9	濃紺	ガラス	5.30	3.50	0.13	有	無		
10	濃紺	ガラス	4.75	3.10	0.11	有	有		
11	濃紺	ガラス	4.80	2.85	0.10	有	有	外面に気泡列	
12	濃紺	ガラス	5.25	2.50	0.08	無	無	黒色の混入物	
13	濃紺	ガラス	5.50	4.30	0.16	有	無		
14	濃紺	ガラス	5.35	4.30	0.17	有	無		
15	濃紺	ガラス	4.70	2.85	0.09	有	有	外面に気泡列	
16	濃紺	ガラス	5.45	4.45	0.14	有	有	破損部分あり	
17	濃紺	ガラス	5.05	4.25	0.15	有	無		
18	濃紺	ガラス	4.90	3.20	0.11	有	有		
19	濃紺	ガラス	5.50	3.35	0.09	有	有		
20	濃紺	ガラス	5.10	5.75	0.22	有	有		
21	濃紺	ガラス	5.10	3.60	0.12	有	無		
22	濃紺	ガラス	5.50	2.95	0.05	有	無		
23	濃紺	ガラス	5.00	4.15	0.13	有	無		
24	濃紺	ガラス	5.80	3.45	0.16	有	無		
25	濃紺	ガラス	4.40	3.70	0.11	有	無		
26	濃紺	ガラス	5.50	2.40	0.07	無	無	黒色の混入物	
27	濃紺	ガラス	5.10	4.80	0.17	有	無	外面縫溝	
28	濃紺	ガラス	4.90	2.35	0.08	有	有	外面に気泡列	
29	濃紺	ガラス	5.50	3.50	0.10	有	無	黒色の混入物	
30	濃紺	ガラス	5.20	4.60	0.18	有	有		
31	濃紺	ガラス	4.90	5.00	0.17	有	無	透明度高い	
32	濃紺	ガラス	5.75	3.60	0.15	有	無	破損部分あり	
33	濃紺	ガラス	5.10	3.40	0.12	有	無		
34	濃紺	ガラス	5.75	4.50	0.18	有	無		
35	濃紺	ガラス	5.25	4.00	0.15	有	有		
36	濃紺	ガラス	5.20	3.20	0.11	有	有		
37	濃紺	ガラス	5.00	2.85	0.11	有	無	破損部分あり	
38	濃紺	ガラス	4.85	3.95	0.13	有	有		
39	濃紺	ガラス	4.90	4.30	0.15	有	無		
40	濃紺	ガラス	4.80	3.70	0.11	有	有	外面に気泡列	
41	濃紺	ガラス	5.00	2.65	0.09	有	有		
42	濃紺	ガラス	5.10		2.85	0.10	有	有	白色の混入物
43	濃紺	ガラス	5.05		3.00	0.10	有	無	
44	濃紺	ガラス	5.10		3.50	0.13	有	無	
45	濃紺	ガラス	5.55		3.15	0.11	有	無	透明度なし
46	濃紺	ガラス	5.20		4.00	0.13	有	無	
47	濃紺	ガラス	5.05		3.40	0.11	有	有	
48	濃紺	ガラス	5.50		3.10	0.10	有	有	
49	濃紺	ガラス	5.35		2.70	0.10	有	無	白色の混入物
50	濃紺	ガラス	5.10		3.35	0.11	無	無	
51	濃紺	ガラス	4.95		3.45	0.11	有	有	破損部分あり
52	濃紺	ガラス	5.10		3.70	0.13	有	有	
53	濃紺	ガラス	5.25		3.05	0.11	無	無	
54	濃紺	ガラス	5.00		5.25	0.16	有	無	
55	濃紺	ガラス	4.85		4.60	0.14	有	無	
56	濃紺	ガラス	5.95		3.80	0.17	有	有	白色の混入物
57	濃紺	ガラス	5.65		3.90	0.16	有	無	破損部分あり
58	濃紺	ガラス	4.95		3.30	0.13	有	無	透明度なし
59	濃紺	ガラス	5.00		3.95	0.14	有	有	
60	濃紺	ガラス	5.75		2.65	0.08	無	無	黒色の混入物
61	濃紺	ガラス	5.15		4.25	0.10	有	有	
62	濃紺	ガラス	5.40		2.60	0.09	有	有	
63	濃紺	ガラス	5.10		3.70	0.11	有	無	
64	濃紺	ガラス	4.75		3.70	0.12	有	有	白色の混入物
65	濃紺	ガラス	4.90		3.70	0.13	有	有	白色の混入物
66	濃紺	ガラス	5.20		3.85	0.12	有	有	
67	濃紺	ガラス	5.10		2.90	0.09	有	無	
68	濃紺	ガラス	4.70		3.85	0.12	有	有	外面に気泡列
69	濃紺	ガラス	5.20		4.55	0.17	有	無	
70	濃紺	ガラス	4.15		3.60	0.10	有	無	
71	濃紺	ガラス	5.60		3.55	0.13	有	有	黒色の混入物
72	濃紺	ガラス	4.55		4.90	0.12	有	有	外面に気泡列
73	濃紺	ガラス	4.60		3.80	0.12	有	有	
74	濃紺	ガラス	5.00		4.10	0.14	有	無	
75	濃紺	ガラス	5.25		2.95	0.10	有	無	破損部分あり
76	濃紺	ガラス	4.80		3.75	0.11	有	有	黒色の混入物
77	濃紺	ガラス	5.40		3.00	0.11	有	無	
78	濃紺	ガラス				0.12			破損
79	濃紺	ガラス	6.15		2.35	0.11	有	無	破損部分あり
80	濃紺	ガラス	5.80		2.85	0.11	有	無	
81	濃紺	ガラス	4.75		3.50	0.11	有	有	黒色の混入物
82	濃紺	ガラス	5.45		3.10	0.12	有	無	黒色の混入物
83	濃紺	ガラス	4.95		4.60	0.15	有	無	

第9表 七瀬3号古墳 第2主体部玉類計測表III(右手:小玉-白玉)

第10表 七瀬3号古墳 第2主体部土類計測表IV（左手：小玉）

番号	色調	材質	直径	厚さ	質量	気泡	鉄錆	備考
1	濃紺	ガラス	5.00	2.10	0.05	有	無	外側の傷み大
2	濃紺	ガラス			0.06		破損	
3	濃紺	ガラス	5.00	3.60	0.10	有	有	
4	濃紺	ガラス	4.70	2.80	0.09	有	無	
5	濃紺	ガラス	4.60	3.55	0.09	有	有	破損部分あり
6	濃紺	ガラス	4.90	3.30	0.11	有	有	破損部分あり
7	濃紺	ガラス	4.95	3.90	0.10	有	無	透明度低
8	濃紺	ガラス	4.55	2.60	0.06	有	有	
9	紺	ガラス	4.70	2.60	0.05	有	有	破損部分あり
10	濃紺	ガラス	5.40	3.70	0.14	有	有	
11	濃紺	ガラス	5.65	3.70	0.15	有	有	
12	濃紺	ガラス	5.10	3.95	0.11	有	無	

第11表 七瀬3号古墳 第2主体部玉類計測表V (手:小玉、白玉) 材位置不明

番号	色調	材質	直径	厚さ	質量	気泡	気泡	備考	
1	濃紺	ガラス	5.95	3.85	0.15	有	無		
2	濃紺	ガラス	5.35	2.40	0.09	有	無		
3	濃紺	ガラス	5.75	3.85	0.17	有	有		
4	濃紺	ガラス	4.65	3.40	0.10	有	無		
5	濃紺	ガラス	4.70	3.60	0.09	有	有		
6	濃紺	ガラス	4.35	3.50	0.08	有	有		
7	濃紺	ガラス	4.10	2.65	0.10	有	有		
8	濃紺	ガラス	5.55	3.35	0.13	有	無		
9	濃紺	ガラス	4.40	3.45	0.07	有	無		
10	濃紺	ガラス	5.15	3.45	0.09	有	有		
11	濃紺	ガラス	4.90	4.70	0.13	有	有		
12	濃紺	ガラス	5.40	3.95	0.17	有	有		
13	濃紺	ガラス	4.90	3.40	0.10	有	有		
14	濃紺	ガラス	5.20	2.85	0.08	有	有	破損部分あり	
15	濃紺	ガラス	5.80	2.90	0.13	有	有		
16	紺	ガラス	5.10	4.40	0.15	有	有		
17	濃紺	ガラス	5.00	3.70	0.10	有	有		
18	濃紺	ガラス	4.75	3.45	0.10	有	無		
									破片
									0.19
									2、3個分

b. 第3主体部出土遺物

豎 様 (第42図、図版9・13)

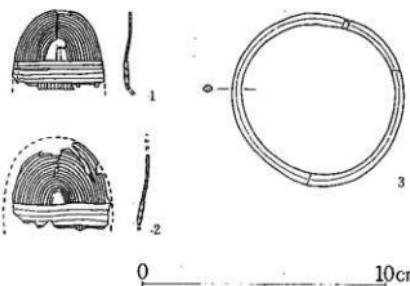
3点が出土しているが、1点は破損が著しく、図化したのは2点のみである。

1はムネ幅3.8cm、高さ3.0cmを測る。2は部分的に周辺部を欠くが、1よりやや大きく、ムネ幅は推定で4.5cm、高さは3.8cmに復原される。いずれも構造は通常見られるもので、黒漆が塗られている。

銅 銅 (第42図、図版9・14)

1点出土している。やや歪んでいるが、ほぼ正円形を呈し、直径は最大径7.15cmを測る。幅4~5mm、厚さ約3.5mmで、断面形はほぼ丸くしておらず、鋳造品と考えられる。刻み等の装飾は見られない。6mm×1cmほどの有機物の断片が上面に密着して出土している。

(三木ますみ)



第42図 七瀬3号古墳第3主体部出土豎柄銅剣 (1/2)

五 類

ガラス製小玉215点、滑石製白玉3点が出土した。これらは、首、右手、左手の各部位で検出されたものである。ただし3点の白玉は胸部から出土した。

首（第12表、第44図）

ガラス製小玉が154点出土している。管切法で製作されたもので、ほとんどが濃紺色と紺色を呈する。ただし110がうすい黄緑色であり、おそらくコバルト以外の発色であろう。平均は直径3.98mm、厚さ2.75mm、質量0.05gである。総長を41.84cmとなる。

右手（第13表、第44・45図）

ガラス製小玉が34点出土している。色調は、濃紺色と紺色が主である。いずれも管切法で製作されたものである。平均は直径4.73mm、厚さ3.25mm、質量0.09gである。総長は10.42cmとなる。

左手（第14表、第45図）

ガラス製小玉が27点出土している。色調はいずれも濃紺色を呈する。管切法で製作されたものと考えられる。平均は直径5.58mm、厚さ3.43mm、質量0.14gである。総長は8.91cmとなる。

白玉（第15表、第45図）

3点の滑石製白玉が出土した。色調は緑がかった灰色である。

（國井弘紀）

c. 第3主体部盗掘坑内出土遺物

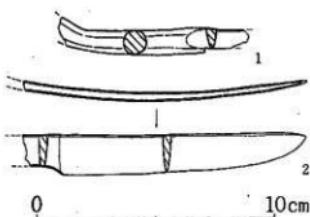
刀 子（第43図、図版15）

1は扇手刀子で、柄頭と身の大部分を欠失する。刃闊を有し、闊から5cm程のところで側刃に彎曲する柄は、断面凸形を呈する。現存長8.0cm、身幅7.5mm、柄幅9.5mm。

2は茎尻を欠失する。刃闊を有し、鋒から茎にかけて多少彎曲している。現存長12.0cm、身幅1.6cm、茎幅1.3cm。

d. 墳頂部出土遺物

滑石製鋤鍔（第46図1）



第43図 七瀬3号古墳第3主体部盗掘坑内出土刀子(1/2)

破片2点が出土しており、同一個体と見られる。断面台形を呈し、比較的扁平なつくりである。表面には細かい調整痕が認められる。復原径4.5cm、復原孔径7.5mm、厚さ9.5mm。

鉄 錠（第46図2・3、図版15）

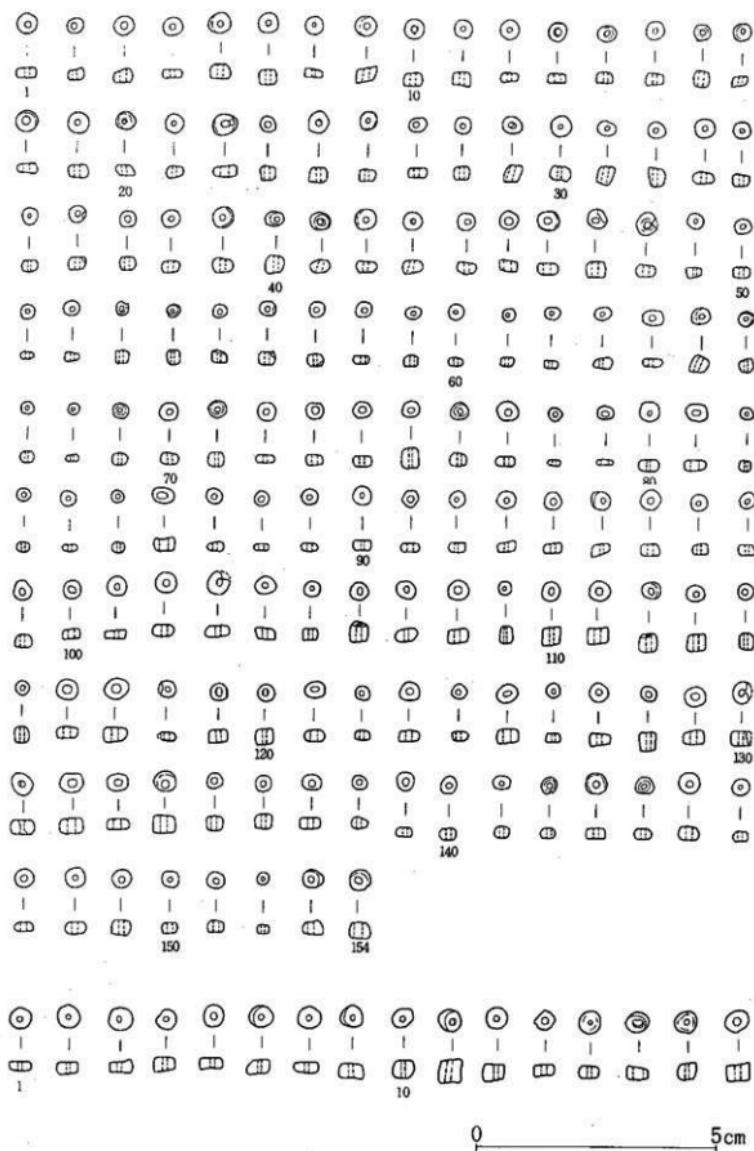
2は三角形状を呈する平根系の鉄錠で、茎を欠失する。鋒はわずかにふくらが付き、直線的に切れ込む浅い脇抜を有する。現存長4.1cm、身幅3.9cm、古墳時代後期後半以降の所産とみられる。

3は両刃の長頭錠である。破片どうしうまく接合しないが、同じ場所から出土しており、同一個体とみられる。錠身は偏平なつくりで闊を有するとみられるが、その形状は鋸化により定かでない。現存長8.5cm、錠身長2.3cm、錠身幅1.2cm、茎幅5mm。

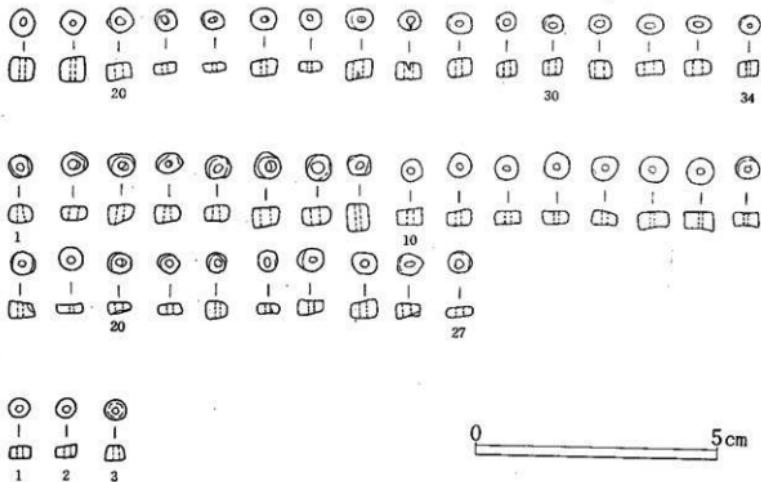
土 師 器（第46図4）

高坏の脚部で、図は1/6程の破片からの復原図である。ハの字状に開く裾の部分で、外面にはミガキが認められる。色調は茶褐色～黒褐色を呈し、胎土は緻密である。復原径9.2cm。

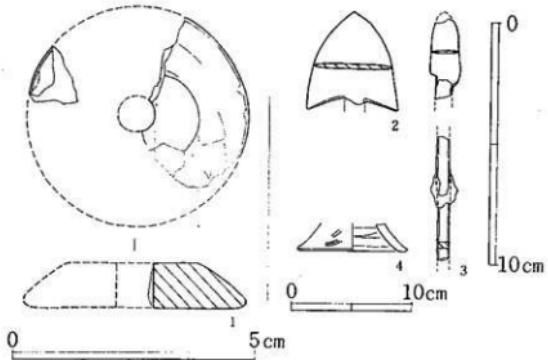
（滝沢 誠）



第44図 七瀬3号古墳第3主体部出土玉類 上段：首（9、26枚）、下段：右手（8枚）(1/1)



第45図 七瀬3号古墳第3主体部出土玉類 上段から右手 (26枚)、左手 (3枚)、その他 (1/1)



第46図 七瀬3号古墳墳頂部出土遺物実測図 (1:1/1, 2・3:1/2, 4:1/4)

第12表 七瀬3号古墳 第3主体部玉類計測表1 (首:小玉)

番号	色調	材質	直径	厚さ	質量	気泡	施用	備考				
1	濃紺	ガラス	4.00	2.65	0.04	有	無					
2	濃紺	ガラス	3.45	2.80	0.03	有	無	黒色の混入物				
3	濃紺	ガラス	4.25	2.95	0.05	有	有					
4	濃紺	ガラス	4.00	2.95	0.04	有	無					
5	濃紺	ガラス	4.40	3.15	0.06	有	有					
6	濃紺	ガラス	4.25	3.40	0.08	有	有	破損部分あり				
7	濃紺	ガラス	3.70	1.90	0.03	有	無					
8	濃紺	ガラス	3.95	2.65	0.05	有	有	白色の混入物				
9	紺	ガラス		0.02				破片2個				
10	濃紺	ガラス	4.05	3.05	0.06	有	無					
11	紺	ガラス	3.75	3.30	0.06	有	有					
12	濃紺	ガラス	4.15	2.05	0.04	無	無					
13	濃紺	ガラス	4.20	2.45	0.04	有	無					
14	濃紺	ガラス	3.80	3.20	0.05	有	無	外面に縫溝				
15	濃紺	ガラス	4.10	2.80	0.06	有	無					
16	濃紺	ガラス	3.70	3.65	0.07	有	有					
17	濃紺	ガラス	3.85	2.75	0.04	有	無					
18	濃紺	ガラス	4.55	2.30	0.06	有	有					
19	濃紺	ガラス	4.55	2.90	0.08	有	有					
20	濃紺	ガラス	3.60	2.70	0.06	有	無					
21	濃紺	ガラス	3.90	2.90	0.05	有	無					
22	濃紺	ガラス	5.00	2.25	0.06	有	無					
23	濃紺	ガラス	4.00	3.05	0.06	有	無					
24	濃紺	ガラス	4.40	3.10	0.07	有	無					
25	濃紺	ガラス	3.85	2.55	0.05	有	無					
26	濃紺	ガラス		0.04				破損				
27	濃紺	ガラス	4.15	2.55	0.04	有	無	透明度低い				
28	濃紺	ガラス	4.20	3.25	0.06	有	無					
29	濃紺	ガラス	4.25	3.60	0.07	有	無					
30	濃紺	ガラス	4.75	3.60	0.09	有	有					
31	濃紺	ガラス	4.25	4.40	0.09	有	有					
32	濃紺	ガラス	4.00	4.50	0.09	有	有					
33	濃紺	ガラス	4.25	2.75	0.06	有	有					
34	濃紺	ガラス	3.90	3.15	0.05	有	無					
35	濃紺	ガラス	3.70	2.80	0.04	有	無					
36	濃紺	ガラス	3.95	2.90	0.07	有	無					
37	濃紺	ガラス	3.95	3.15	0.05	有	無					
38	濃紺	ガラス	4.05	2.75	0.04	有	有					
39	濃紺	ガラス	4.85	3.25	0.08	有	無					
40	濃紺	ガラス	4.10	3.75	0.07	有	無					
41	濃紺	ガラス	4.65	2.75	0.06	有	無					
42	濃紺	ガラス	4.55	2.60	0.06	有	無					
43	濃紺	ガラス	4.70	3.35	0.08	有	無					
44	濃紺	ガラス	4.15	2.55	0.05	有	無					
45	紺	ガラス	4.40	2.55	0.07	有	有					
46	濃紺	ガラス	4.85	3.05	0.11	有	有					
47	濃紺	ガラス	4.65	3.75	0.10	有	有					
48	濃紺	ガラス	4.45	2.65	0.03	有	無	破損部分あり				
49	濃紺	ガラス	3.40	2.65	0.05	有	有					
50	濃紺	ガラス	3.65	2.40	0.05	有	有					
51	濃紺	ガラス	3.35	1.95	0.03	無	無					
52	濃紺	ガラス	3.35	2.25	0.04	有	無					
53	濃紺	ガラス	3.55	3.20	0.05	有	無					
54	濃紺	ガラス	3.00	3.00	0.04	有	無					
55	濃紺	ガラス	3.20	2.85	0.03	有	無					
56	濃紺	ガラス	4.00	3.10	0.06	有	有	破損部分あり				
57	濃紺	ガラス	3.35	2.60	0.03	有	無	破損部分あり				
58	濃紺	ガラス	3.60	2.30	0.03	有	有					
59	濃紺	ガラス	3.45	2.90	0.03	有	有					
60	濃紺	ガラス	3.80	2.30	0.04	有	有					
61	濃紺	ガラス	3.25	2.20	0.02	有	無					
62	濃紺	ガラス	3.35	1.75	0.02	有	無					
63	濃紺	ガラス	3.75	2.65	0.04	有	有					
64	濃紺	ガラス	4.50	2.10	0.04	有	無	白色の混入物				
65	濃紺	ガラス	3.70	3.65	0.07	有	有					
66	濃紺	ガラス	3.70	3.25	0.05	有	有					
67	濃紺	ガラス	3.15	2.45	0.02	有	有					
68	濃紺	ガラス	2.95	1.75	0.01	有	無					
69	濃紺	ガラス	3.85	2.50	0.05	有	無					
70	濃紺	ガラス	4.50	2.90	0.07	有	無					
71	濃紺	ガラス	4.00	3.15	0.06	有	有					
72	濃紺	ガラス	4.15	2.00	0.03	有	無					
73	濃紺	ガラス	4.00	5.50	0.03	有	有	外面に縫溝				
74	濃紺	ガラス	4.25	2.50	0.05	有	無					
75	濃紺	ガラス	4.50	4.80	0.12	有	有					
76	濃紺	ガラス	4.70	3.05	0.07	有	有	透明度低い				
77	濃紺	ガラス	4.80	2.55	0.09	有	有					
78	濃紺	ガラス	3.50	1.75	0.01	有	有					
79	濃紺	ガラス	3.55	1.50	0.02	有	無					
80	濃紺	ガラス	5.00	3.10	0.09	有	有					
81	濃紺	ガラス	4.85	2.35	0.07	有	有					

82	濃紺	ガラス	3.15	2.40	0.02	有	有		
83	濃紺	ガラス	3.35	2.20	0.02	有	無		
84	濃紺	ガラス	3.55	2.10	0.02	有	無		
85	濃紺	ガラス	3.25	2.70	0.03	有	有		
86	濃紺	ガラス	4.05	2.90	0.07	有	無		
87	紺	ガラス	3.80	2.25	0.03	有	有		
88	濃紺	ガラス	3.60	2.00	0.03	有	有		
89	濃紺	ガラス	4.00	2.20	0.03	有	有		
90	濃紺	ガラス	3.85	2.70	0.04	有	無		
91	紺	ガラス	3.80	2.10	0.03	有	有		
92	濃紺	ガラス	3.40	2.05	0.02	有	有		
93	濃紺	ガラス	3.55	2.05	0.03	有	有		
94	濃紺	ガラス	3.35	2.20	0.02	有	無		
95	濃紺	ガラス	3.10	2.00	0.02	有	無	白色の混合物	
96	濃紺	ガラス	3.75	2.45	0.02	有	無		
97	濃紺	ガラス	3.40	2.60	0.03	有	有		
98	濃紺	ガラス	3.10	1.95	0.02	有	有		
99	濃紺	ガラス	3.85	2.60	0.04	有	無		
100	紺	ガラス	4.20	2.20	0.04	有	無	破損部分あり	
101	濃紺	ガラス	4.00	1.95	0.04	有	無		
102	濃紺	ガラス	4.40	2.80	0.04	有	有		
103	濃紺	ガラス	4.85	2.75	0.03	有	有	破損部分あり	
104	濃紺	ガラス	4.55	2.55	0.06	有	無		
105	濃紺	ガラス	3.35	2.55	0.03	有	無		
106	濃紺	ガラス	3.80	3.35	0.07	有	有	透明度低い	
107	紺	ガラス	4.15	2.60	0.04	有	有		
108	濃紺	ガラス	4.30	2.65	0.06	有	無		
109	濃紺	ガラス	3.00	3.50	0.05	有	有		
110	黄緑	ガラス	3.75	3.20	0.06	有	無	透明度低い	
111	濃紺	ガラス	4.15	3.45	0.06	有	有	白色の混合物	
112	濃紺	ガラス	3.70	3.75	0.06	有	有		
113	濃紺	ガラス	3.40	3.10	0.04	有	無		
114	濃紺	ガラス	3.20	2.95	0.04	有	有	黒色の混入物	
115	濃紺	ガラス	3.25	2.80	0.05	有	無	黒色の混入物	
116	濃紺	ガラス	4.35	2.10	0.05	有	無		
117	濃紺	ガラス	5.00	2.95	0.07	有	有		
118	濃紺	ガラス	3.70	1.55	0.02	有	無	破損部分あり	
119	濃紺	ガラス	4.35	2.70	0.05	有	無		
120	濃紺	ガラス	3.85	3.00	0.06	有	無		
121	濃紺	ガラス	4.30	2.00	0.05	有	無		
122	濃紺	ガラス	3.00	2.05	0.02	有	無		
123	灰青	ガラス	4.35	1.90	0.03	有	無		
124	濃紺	ガラス	3.50	1.80	0.03	有	無		
125	濃紺	ガラス	4.25	2.75	0.06	有	無		
126	濃紺	ガラス	3.25	2.40	0.03	有	無		
127	濃紺	ガラス	4.30	2.80	0.07	有	無	白色の混入物	
128	濃紺	ガラス	3.80	3.75	0.06	有	無		
129	濃紺	ガラス	4.50	3.15	0.09	有	無	外側の傷み大	
130	濃紺	ガラス	4.40	3.05	0.07	有	無	付属の破片あり	
131	濃紺	ガラス	4.75	3.15	0.07	有	無		
132	濃紺	ガラス	4.70	3.00	0.07	有	無		
133	濃紺	ガラス	4.25	1.90	0.06	有	無		
134	濃紺	ガラス	4.70	3.55	0.11	有	有		
135	濃紺	ガラス	3.60	2.60	0.03	有	有		
136	濃紺	ガラス	3.80	3.25	0.05	有	有		
137	濃紺	ガラス	3.85	2.45	0.04	有	無		
138	濃紺	ガラス	3.25	2.25	0.02	有	無		
139	濃紺	ガラス	4.20	2.85	0.06	有	有		
140	濃紺	ガラス	4.10	2.65	0.05	有	有		
141	濃紺	ガラス	3.80	2.80	0.05	有	有		
142	濃紺	ガラス	4.00	2.50	0.05	有	有		
143	濃紺	ガラス	4.75	2.45	0.08	有	有		
144	濃紺	ガラス	4.05	2.80	0.06	有	有		
145	濃紺	ガラス	5.00	3.20	0.09	有	有		
146	濃紺	ガラス	3.75	2.30	0.05	有	無		
147	濃紺	ガラス	4.55	2.05	0.06	有	無		
148	濃紺	ガラス	4.60	2.85	0.07	有	有		
149	紺	ガラス	4.45	3.20	0.08	有	有		
150	濃紺	ガラス	4.20	2.90	0.05	有	有		
151	濃紺	ガラス	4.05	2.90	0.06	有	有		
152	濃紺	ガラス	3.15	2.20	0.04	有	無	位置不明	
153	濃紺	ガラス	4.40	3.10	0.08	有	有	位置不明	
154	濃紺	ガラス	4.90	3.90	0.12	有	有	位置不明	

第13表 七瀬3号古墳 第3主体部玉類計測表II (右手:小玉)

番号	色調	材質	直径	厚さ	質量	気泡	焼削	備考	
1	濃紺	ガラス	4.30	2.20	0.05	有	無		
2	濃紺	ガラス	4.65	2.90	0.08	有	無		
3	濃紺	ガラス	4.40	2.75	0.06	有	無		
4	濃紺	ガラス	4.00	3.30	0.07	有	無		
5	濃紺	ガラス	4.60	2.20	0.06	有	無		
6	濃紺	ガラス	4.70	3.00	0.06	有	無		
7	濃紺	ガラス	4.60	2.35	0.07	有	無		
8	青灰	ガラス		0.05			破損		
9	濃紺	ガラス	4.75	3.45	0.09	有	無		
10	濃紺	ガラス	5.00	4.10	0.10	有	無		
11	濃紺	ガラス	4.75	4.80	0.13	有	無		
12	濃紺	ガラス	4.80	3.65	0.11	有	有		
13	濃紺	ガラス	4.30	2.30	0.06	有	無		
14	濃紺	ガラス	4.65	2.65	0.08	有	無		
15	濃紺	ガラス	4.70	2.75	0.08	有	無		
16	濃紺	ガラス	4.50	3.70	0.10	有	無		
17	濃紺	ガラス	4.50	3.90	0.10	有	有		
18	濃紺	ガラス		5.15	5.05	0.18	有	無	破損部分あり
19	濃紺	ガラス		5.20	5.20	0.17	有	有	破損部分あり
20	紺	ガラス		5.45	3.20	0.13	有	有	
21	濃紺	ガラス		4.80	2.40	0.07	有	無	
22	濃紺	ガラス		4.50	1.90	0.05	有	無	
23	紺	ガラス		5.20	3.35	0.12	有	無	
24	濃紺	ガラス		4.50	2.20	0.07	有	無	
25	紺	ガラス		5.40	4.20	0.16	有	有	
26	紺	ガラス			0.02				破損
27	濃紺	ガラス		4.90	3.45	0.10	有	有	破損部分あり
28	濃紺	ガラス		4.95	3.65	0.12	有	有	
29	濃紺	ガラス		4.20	3.30	0.07	有	有	
30	濃紺	ガラス		4.50	3.75	0.10	有	無	
31	濃紺	ガラス		4.85	4.25	0.12	有	無	
32	濃紺	ガラス		5.15	2.95	0.11	有	無	
33	濃紺	ガラス		4.95	2.65	0.08	有	有	
34	濃紺	ガラス		4.40	2.65	0.07	有	有	

第14表 七瀬3号古墳 第3主体部玉類計測表III (左手:小丘)

番号	色調	材質	直径	厚さ	質量	気泡	焼削	備考	
1	濃紺	ガラス	5.80	4.05	0.16	有	無		
2	濃紺	ガラス	5.90	3.35	0.14	有	無	黒色の混入物	
3	濃紺	ガラス		0.19			破損		
4	濃紺	ガラス	6.20	4.10	0.19	有	有	破損部分あり	
5	濃紺	ガラス	5.95	3.65	0.12	有	無		
6	濃紺	ガラス	6.00	3.75	0.17	有	無		
7	濃紺	ガラス	6.00	4.10	0.20	有	無		
8	濃紺	ガラス	6.35	3.70	0.17	有	有		
9	濃紺	ガラス	5.55	6.00	0.22	有	無		
10	濃紺	ガラス	5.35	3.80	0.14	有	有		
11	濃紺	ガラス	5.40	3.50	0.13	有	無		
12	濃紺	ガラス	5.50	3.00	0.13	有	無	白色の混入物	
13	濃紺	ガラス	6.00	3.20	0.16	有	有	白色の混入物	
14	濃紺	ガラス		6.60	3.00	0.12	有	有	破損部分あり
15	濃紺	ガラス		6.30	3.65	0.20	有	無	白色の混入物
16	濃紺	ガラス		5.85	4.30	0.20	有	無	
17	濃紺	ガラス		5.25	3.65	0.12	有	無	
18	濃紺	ガラス		5.05	4.30	0.15	有	無	破損部分あり
19	濃紺	ガラス		5.20	2.85	0.10	有	無	
20	濃紺	ガラス		5.00	2.60	0.08	有	無	
21	濃紺	ガラス		4.90	2.25	0.09	有	無	
22	濃紺	ガラス		4.60	3.55	0.12	有	無	
23	濃紺	ガラス		4.70	1.90	0.04	有	無	
24	濃紺	ガラス		5.75	2.95	0.12	有	有	
25	濃紺	ガラス		5.75	3.70	0.15	有	無	
26	濃紺	ガラス		5.40	2.45	0.08	有	無	
27	濃紺	ガラス		4.65	1.75	0.03	有	無	

第15表 七瀬3号古墳 第3主体部玉類計測表IV (白玉)

番号	色調	材質	直径	厚さ	質量
1	灰緑	滑石	4.15	2.05	0.05
2	灰緑	滑石	4.10	2.30	0.05
3	灰緑	滑石	3.95	2.85	0.09

七瀬4号遺跡

(1) 立地

七瀬4号遺跡（中野市七瀬字北原1272-1）は、長丘丘陵上の他の占墳の場合と同様、南北に伸びる尾根の頂部に立地する。七瀬3号古墳から、北へ緩やかに下っていく尾根を進むと、七瀬5号古墳があり、さらにその北に位置している。このあたりで尾根頂部は傾斜を弱め、およそ標高424～5mの範囲で、25mほどの長さの平坦面が形成されている。尾根頂部の幅のほうは比較的狭まっている所であるが、ここに、径4～5mの円墳様のマウンドが見られており、今まで古墳と考えられ、七瀬4号古墳とされていた。しかし、この他にも北側に二ヶ所、小さなものではあるが、地蔵が並ぶように見受けられることから、遺跡の性格について再考する必要があるかと思われた。

(2) 各造構の調査（第47図、図版10）

発掘調査に先立って地形測量を行ったところ、標高424.4m前後を基底面として、七瀬4号古墳とされていた、長径5.9m、高さ40～50cmの比較的大きなマウンドと、その北側に径3m弱、高さ20cm程の小さなマウンドが2つ、計3つが尾根頂部に一列に並んで存在することが確認された。そこで、最も大きなマウンドを1号遺構、順に北へ2号、3号遺構と呼称することにし、さらに1号遺構の南側にも、弱い地蔵らしきものが観察されたため、これを4号遺構とした。

これらの性格を明らかにすべく、それぞれについて、発掘調査を開始した。その結果、1号遺構からは、そのマウンドの頂部上から集石が、3号遺構では、そのマウンド下から集石を伴う土壙が検出された。2号、4号遺構に関しては、それ自体が遺構である根拠となるものは検出できなかった。断定は出来ないが、遺構ではない可能性も考えられる。

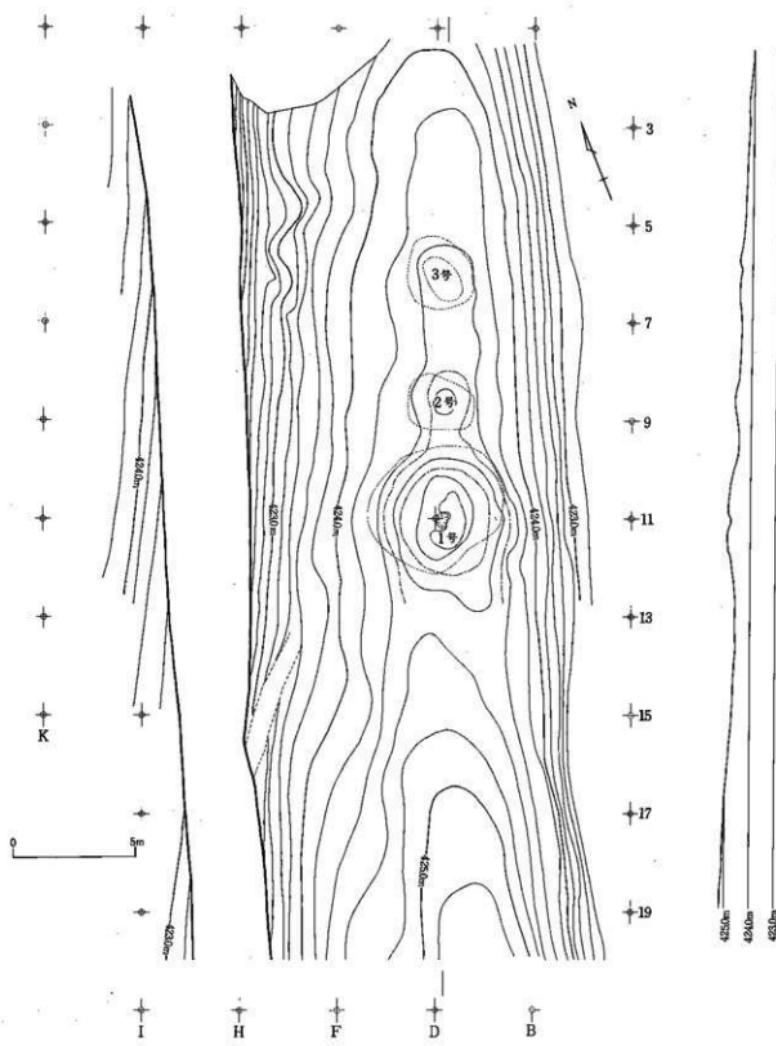
a. 1号遺構（第48～50図、図版10）

本遺構のマウンド頂部には調査前から、石が埋まっているのがわずかに見受けられたが、調査を開始し、表土を剥ぐと20～30cm大の石を中心に8石からなる集石が現れた。これらの石は一見、方形の範囲を囲んでいるように見えるが、これに伴う堀込みなどは見られず、このマウンドの上面に置かれたままの状態である。こうしたことから、これらが現位置の状態とは思われないが、これらのうちの1石は、割れているが本来は、人為的に加工されて直方体様を呈していることが明らかである。また、このマウンドの西側裾の下の斜面上からは、径3cmほどの穿孔の施された、34×38×18cm程の直方体様の石が割れた状態で、検出されている。この様な状況から、これらをその一部に用いた何等かの構築物が存在していた可能性が窺われる。

集石の検出後、このマウンドの断ち削りを行ったが、盛土は見られなかった。このマウンドが人工の構築物であれば、その形成は地山を削り出していることになろう。また前項で述べた石と関係するような痕跡も検出されなかった。

b. 2号遺構

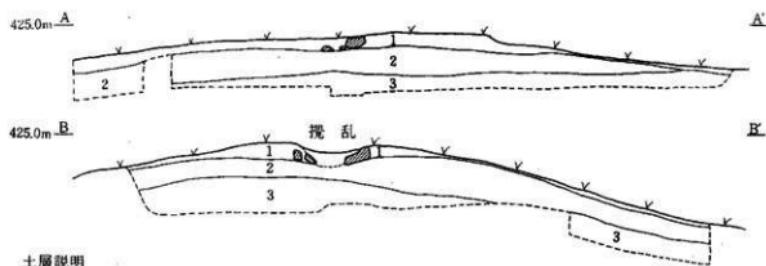
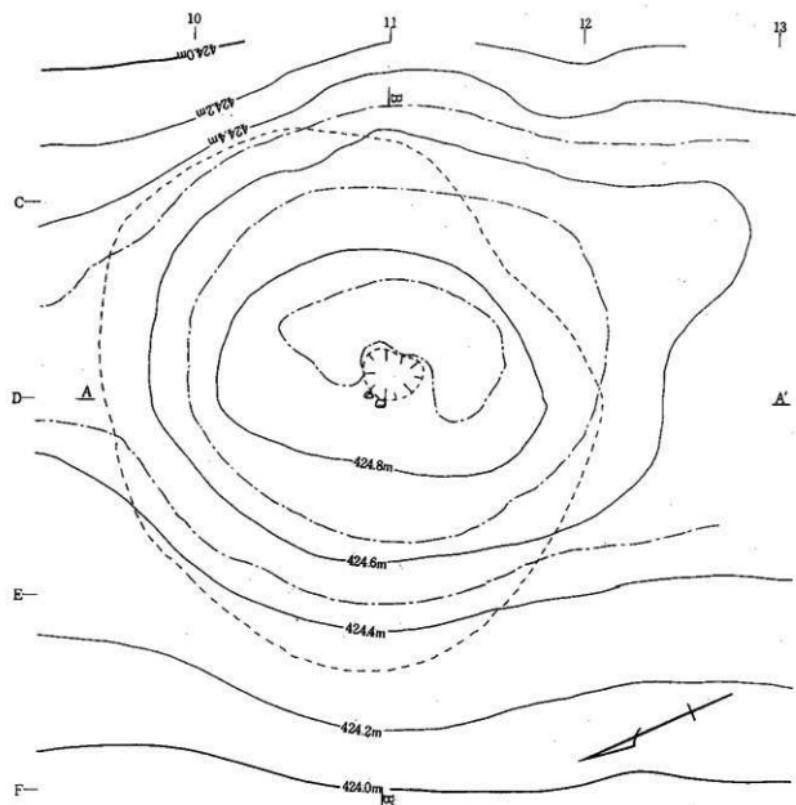
表土を剥いだところ、マウンドの痕跡はほとんど無くなってしまい、若干の石の散らばりのほかは、何等かの遺構らしきものは見られなかった。ただし、火葬骨らしい骨の断片が地山上から検出されている。しかし原位置とは思われない。



第47図 七瀬4号遺跡測量図 [1/200]

c. 3号遺構 (第52図、図版11・12)

本遺構も調査前、若干の石が見えていたが、表土を剥ぐと、およそ2mほどの範囲に河原石様の石が散乱している状況が現れた。石には20~30cm大のものと、10cm以下の小石が見られた。石の集中するあたりが、やや落ち込んでいるのが見られることから、掘り下げたところ、集石を伴った土壤が検

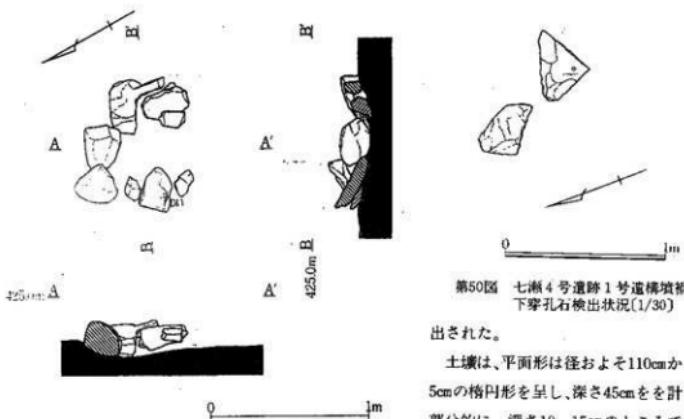


土層説明

- 第1層 表土
- 第2層 暗茶褐色土（地山）
- 第3層 黄灰色土（地山）

0 2m

第48図 七瀬4号遺跡1号遺構填丘測量図、土層断面図 (1/50)



第49図 七瀬4号遺跡1号遺構頂部集石実測図(1/30)

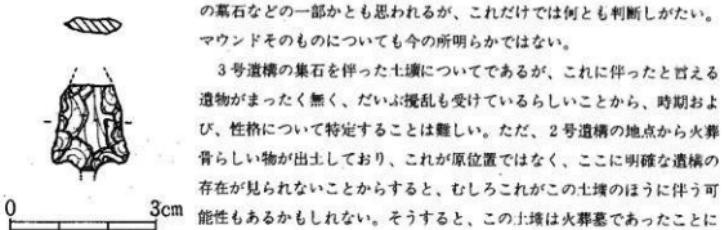
平坦面を成す。20~30cm大の石を壁際に囲むように配している。底部から、木質らしい炭化物が3~4cmの範囲で検出されている。埋土は結まりのない暗褐色土で、炭化物を多く含んでいる。この中に配置されたと思われる石以外の石が、かなり大型のものを含めて見られることから、後世の擾乱を受け、かなり現状が損なわれているであろうことが推定される。

遺物としては、石錠(第51図)1点が土壙埋土内より出土している。混入品と思われる。安山岩製の有茎打製石錠で、先端と茎の基部を一部欠いている。現存長1.7cm、最大幅1.55cm、最大厚0.5cmを計る。
d. 4号遺構

ここからは遺構と考えられるような痕跡は、何等発見されなかった。マウンドも明確なものではないことから、自然地形、あるいは1号遺構の形成と関連してきた高まりと考えるのが妥当かもしれない。

(3) 小 結

本遺跡の中には、これまで七瀬4号墳といわれていたマウンドを含めて、古墳に關係すると言える遺構は存在しないことが明らかになったが、この中の遺構と考えられるものについては、その性格が何であるかを考える必要があろう。ただ、その手掛かりは多いとは言えない。1号遺構では、集石の中に見られた加工された石が、何等かの構築物の一部を成している可能性が高く、中世あるいは近世の墓石など的一部かとも思われるが、これだけでは何とも判断しがたい。
マウンドそのものについても今の所明らかではない。

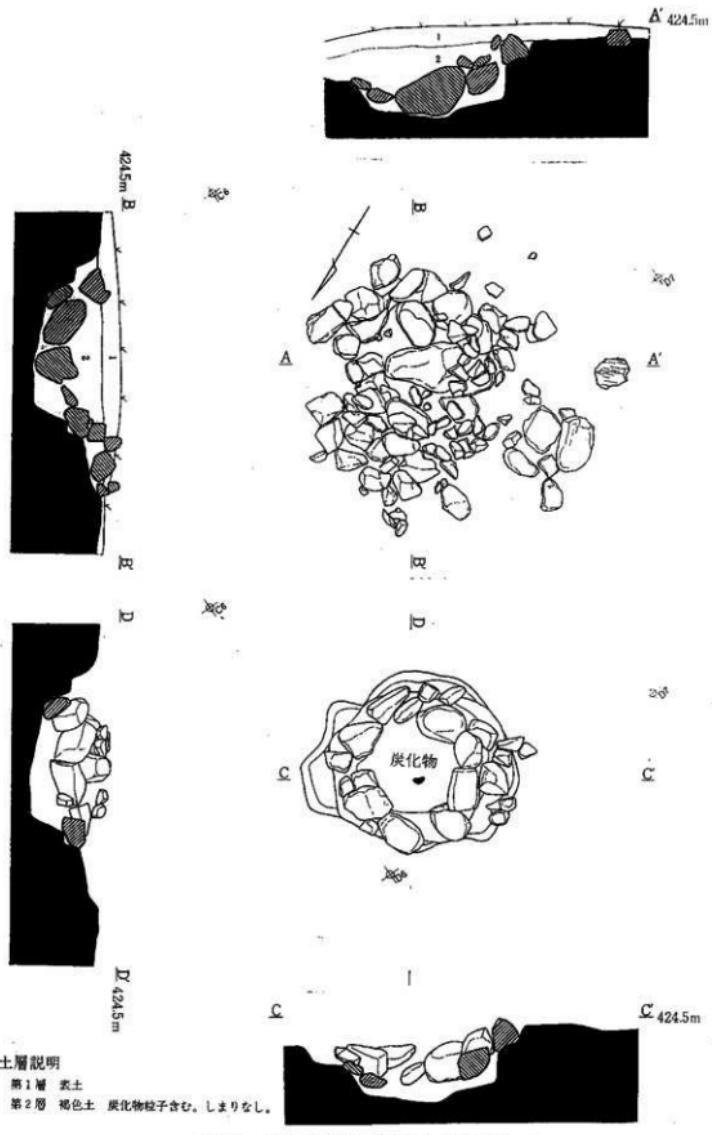


第51図 七瀬4号遺跡3号遺構出土石錠【1/1】等を探していく必要性があるだろう。(三木ますみ)

第50図 七瀬4号遺跡1号遺構墳頂下穿孔石検出状況(1/30)

出された。

土壤は、平面形は径およそ110cmから135cmの楕円形を呈し、深さ45cmを計る。部分的に、深さ10~15cmのところで一見段を成しており、底部は径80cmほどの平



土層説明

第1層 武土

第2層 褐色土 炭化物粒子含む。しまりなし。

第52図 七瀬4号遺跡3号遺構集石、土壤実測図

0 1 m

3 小 結

(1) 七瀬 3号古墳の出土遺物について

a. 竪 棚

本古墳からは、第1主体部と第2主体部から豎櫛が計8点が出土している。そのうち特徴的なもの2例について若干言及したい。

第2主体部から出土している連結櫛は、亀田博氏の集成⁽¹⁾によると、現在2例が類例として挙げられるのみである。島根県大木椎現山2号墳⁽²⁾のものは、幅1.3cmの豎櫛を3点連ねている。連結方法は実測図を見たところでは、本古墳例と同様に、櫛の歯の基に付ける横棒によっているものと思われる。大阪府紅葉山C3号墳⁽³⁾でも小型の豎櫛を連結したものが出土している。

本古墳例のように7点を連結しているものは今のところ確認されていない。しかし、連結していたものが、出土時にはばらばらになってしまっていた場合もあったろうから、実際には、同様のものが多く一般的に存在していた可能性はある。ただ本例について問題となるのは、この櫛が全体としてムネ部を内側とした弧状を呈して出土したことである。この状態から単純に本来の形態を想定するならば、全体として櫛の歯が扇状に広がっていたものとなり、これでは着装することはできない。これまでの出土例から、副葬された豎櫛のすべてが着装されたものではないことは明らかであるが、その場合でも櫛自体は、あくまでも櫛としての機能を失ってはいない。埋葬後に何らかの影響で変形したということも考えられるが、本例の状態だけから判断することは難しく、類例の増加を待つ必要がある。

第2主体部出土の、ムネに棒状のものが付いたと考えられる豎櫛は、遺存状態が悪いために、両者が接続していた確実な証拠はない。しかし、いくつかの類例が見られる角状突起の付いた豎櫛と言われるものが、これと同種のものである可能性が高いと考え、復原した。角状突起の付いた豎櫛は、栃木県七廻り鏡塚古墳⁽⁴⁾、岡山県金藏山古墳⁽⁵⁾、兵庫県長谷・ハナ古墳⁽⁶⁾などから出土している。いずれもムネ幅3cm以上の、大型の豎櫛に見られる。良好な遺存例は少なく、上部を欠くものがほとんどであるが、鳥取県八喜山9号墳⁽⁷⁾例はムネの頂部から7.6cm以上伸びている。七廻り鏡塚古墳例はムネからの長さは1cm余りであるが、上部が削られて細くなっている、そこには漆が塗れていないことから、ここに何か接続した可能性が考えられている。亀田氏はこれらは種々の装飾を付けるために作られていると推定している。しかし、これまでこのような状況を示す遺存例は無かった。本古墳例の棒状部の場合、周囲のかなり密接した位置から、非常に小型の滑石製白玉がまとまって出土している。この出土状況から見て、これらがこの棒状部と関係していた可能性は、極めて高いと考えられる。これらの白玉は全部を繋いだ場合、長さが13cm程になると推定されるが、これが棒状部に取りつけられて、頭髪の装飾となっていたと想像ができるかもしれない。

棒状部とムネ部との接続は、七廻り鏡塚古墳例などで糸の巻付けによるものが確認されているが、本古墳例の場合、これについてはまったく不明である。棒状部に付着していた帶状のものが、他に例のないものであるが、あるいは関わっていたのかもしれない。

b. 銅釧と鉄釧

本古墳からは第2主体部、第3主体部それぞれから銅釧、鉄釧が1点ずつ、いずれも被葬者の手首と考えてよい位置から検出されている。ガラス小玉を連ねた手玉とともに手首に着装されていたと思

われる。

長野県内の同種のものの出土例を見ると、銅鉗は、長野市長原13号古墳⁽⁸⁾、佐久市後家山古墳⁽⁹⁾、南佐久郡白田町離山遺跡⁽¹⁰⁾、諏訪市フネ古墳⁽¹¹⁾、などから出土している。形態から、板状のものを曲げて環にしたものと、棒状品を素材としたものに大別されるというが⁽¹²⁾、本古墳例のような鉄造品と考えられるのは、長原13号古墳例などの他、あまり多くないようである。

鉄鉗は、県内では極めて類例が少ない。帯状の鉄板を螺旋状に幾重にも巻いた形態のものが、飯山市須多ヶ峯遺跡⁽¹³⁾、塩尻市丘中学校遺跡⁽¹⁴⁾、の方形周溝墓などから出土しているが、この種のものは東日本に多く、時期的には、弥生時代後期から古墳時代初頭に限られる⁽¹⁵⁾ことから本古墳例とは系統を異にするものと考えたほうがよいだろう。古墳出土のものとしては、フネ古墳から出土した鉄鉗があるが、ひとつは有鉤のもので、弥生時代の銅鉗によく見られるようなスイジガイ製貝輪を模したものと思われ、他に例のないものである。もうひとつは幅1.6cmの厚手の鉄板を丸めたものであるが、これらも直接的な関連は想定しにくい。

本古墳出土の鉄鉗は捩じりを加えた鉄線を環にしたものに遊環が付いた特徴的なものである。県外に眼を向けると、むしろ、本古墳例に近い鉄鉗は、西日本の各地に見られることがわかる。捩じりを加えた鉄線を鉗としたものは、今のところ見られないが、鉗に遊環が付くという点に注目すると、奈良県北原古墳北棺⁽¹⁶⁾、岡山県月の輪古墳南主室⁽¹⁷⁾、広島県恵下日地点1号墳⁽¹⁸⁾、山口県形山石棺⁽¹⁹⁾、福岡県沖ノ島16号遺跡⁽²⁰⁾、福岡県立山山24号墳⁽²¹⁾、佐賀県迫頭4号墳⁽²²⁾、宮崎県河内丸山52-B号石棺⁽²³⁾、同築池地下式横穴⁽²⁴⁾などで出土したものが、類例として挙げられる。これらのうち、築池地下式横穴例が径4mmの鉄棒を環にして鉗の本体としているが、他のほとんどのものは、その断面が長方形になる、薄い帯状の鉄板を環にしている。遊環の形態は、本古墳例と同様に、幅1cmに満たない細い帯状の鉄板を環にしているものが多いが、鉄棒を丸めて作っているものもある⁽²⁵⁾。鉗につく數は、全部が遺存していない場合もあるだろうが、鉄板製の場合、1個から4個のものが見られる。

細部においては、若干の相違点も見られるが、基本的には遊環が付くという点で、これらは同系統のものと見てよいだろう。分布という点から、西日本を中心に見られるものがなぜ長野県のこの地に唯一見られるのか、という問題はこれから課題であろう。

これらの遊環付きの鉗を出土した、古墳の年代的な傾向について簡単に見ておきたい。北原古墳は、曲刃鎌など農工具の形態は中期に下降するものであるが、前期的な様相も残しており、琴柱形石製品などからも、築造年代は中期初頭に位置づけられている。立山山24号墳は周溝内から陶質土器と土師器が出土している。土師器は、5世紀初頭から前葉の年代を示しており⁽²⁶⁾、副葬品の様相もそれと齟齬を来すとも思われないので、これを築造年代としてよいだろう。月の輪古墳も中期の前葉を下らないと考えられる。今のところ、これらが出土限の上限と思われる。沖ノ島16号遺跡は後期の遺物が混在しているが、初期に行われた巨石祭祀の遺跡であることからも、中期がその中心であったことは確かである。遺物の中には碧玉製石鉗など中期でも古相を示すものを含んでいる。迫頭4号墳の主室部は竪穴式横口式石室であるが、蒲原宏行氏によると、5世紀前半から中葉前後に比定される福岡県老司古墳の1・2・4号石室と同型式のもので、6世紀には下らないと考えられている⁽²⁷⁾。恵下B地点1号墳が、副葬品の勾玉に、コの字形を呈するものを含むことから、これらの古墳の中では新しい傾向と示していると言えよう。

以上、見てきたところでは、遊環付きの鉄釧は中期初頭に出現し、中期でもその前半期を中心存在したようである。下限についてははっきりしないが、後期に下る明確な例はないようである。このような年代の傾向は、この種の鉄釧が、類例は多くないものの特徴的なものであるだけに、本古墳出土のものについても示唆を与えることになろう。

(三木ますみ)

(2) 七瀬3号古墳をめぐる問題

七瀬3号古墳の調査では興味深い事実が明らかになるとともに、それによって提起された問題も少なくない。最後に、その二、三について現段階での整理を試み、調査のまとめとしたい。

まず本古墳の築造年代であるが、これといった手掛かりには乏しい。

第2主体部から出土した滑石製臼玉は、類例が少ないものの、古墳時代中期前半に位置付けられる古墳からの出土が目立つ。したがって、本古墳例についても該期に位置付けられる可能性が高いが、中期後半以降にくだる例も存在することから、いまはあくまで年代の傾向を示す遺物として考慮しておきたい。

第2主体部から出土した滑石製臼玉は、算盤玉状をなすものが多く認められる。頭付近から出土した小ぶりな一群には、側面の中央にふくらみをもつという程度のものが多いが、右手付近から出土した一群には、明確な棱をもたないまでも、算盤玉に近いものが少くない。本古墳同様、七瀬5号古墳でも滑石製臼玉多数が出土している。それらについてみると、いずれも臼状をなすもので、本古墳にみられるような算盤玉状をなすものはない。臼玉を含めた滑石製品は、古墳時代中期を盛期として古墳から出土する。そうした中にあって畿内では、大ぶりで臼状をなす臼玉は中期後半から後期初頭にかけてみられ、算盤玉状をなすものは、それに比べて前出的な形態との指摘がなされている⁴⁰。いまこれらが時間的経過にともないどのような量的推移をたどるかは別として、おむね後者から前者への変遷は認めてよいだろう。とすれば、臼玉においては本古墳が七瀬5号古墳に比べて古相を示すものとみられ、陶色編年I型式中頃に相当する須恵器を出土した七瀬5号古墳の年代を参考して、本古墳の年代についても一定の推論が成り立つのである。今回は果たせなかつたが、この臼玉の問題については、周辺の他の古墳の出土例も比較検討してみる必要があるだろう。

このように、遊環付鉄釧や滑石製臼玉から導き出される年代は、古墳時代中期前半ないし中葉と考えられ、臼玉の比較からは、本古墳が七瀬5号古墳に先行して築造された可能性が高い。

本古墳から南に250m程離れた尾根の高所には、七瀬双子塚古墳がある。全長60m余を測る前方後円墳で、大正10年(1921)5月、地元の人々によって後円部頂が発掘され、鏡、幣櫛、鉄刀、鉄剣、鐵矛、鐵鎗、短甲、土器が出土している⁴¹。このうち、短甲は長方板革縫短甲であり、鐵鎗は鎌身に撫閻をもつ両丸造・両刃の長原鎗である⁴²。また、土師器は高环脚部、壺口縁部、底部があり、壺部の形態は不明だが、高环脚部は青木和明氏によって設定された高环型式の四ッ屋型・浅川型段階に相当するものと考えられる⁴³。さらに、墳丘から採集された円筒埴輪は、透孔の有無・形状は定かでないものの、墨斑を有し、高く突出した突帯をもつなど、周辺では更埴市森2号古墳出土品⁴⁴との類似を認めてよいだろう。これらの出土品からみる限り、七瀬双子塚古墳の築造年代は、従来いわれるようなものではなく、鐵鎗や土師器に長野市・更埴市土口将軍塚古墳⁴⁵より後出性を認めるとしても、それに後続する中期中葉ないし後半でも早い時期に求められよう。

本古墳から1km程尾根を北に下り、七瀬5号古墳を通り過ぎて行くと林畔1号古墳が、さらに60m

離れて林畔2号古墳がある。林畔1号古墳は直径23m程の円墳で、昭和20年（1945）、不意に石室が発見され、内部から玉類、鉄剣、鉄矛、鉄鎌、短甲、轍、刀子、砾石、土師器が出土している⁶⁴。このうち、短甲は革組覆輪を施した右前胸閉閉式の三角板鋸留短甲で、鋸頭径が小さく、使用鋸数も多いことから、三角板鋸留短甲の中でも古式の一派に属するものと考えられる。土師器は有段口縁をもつ盃で、赤彩に加え入念にミガキが施されていることから儀器的色合いが濃く、日常の製品との対比は必ずしも明らかではないが、中期でもさほど時期の下降するものとは考えられない。これらの点から林畔1号古墳の築造年代は、先の七瀬双子塚古墳と近い時期に求められ、鑿削をはじめとする他の出土品の存在もこれと齟齬を来すものではない。林畔2号古墳は直径27m程の円（方）墳で、昭和23年（1948）、京都大学によって発掘調査が行われ、祐土床をもつ埋葬施設から、鏡、豊巣、玉類、鉄刀、鉄鎌、刀子が出土している⁶⁵。築造年代を示す明確に欠けるが、出土品の組み合わせや両面穿孔の管玉の存在から後期には下しがたく、中期後半のうちに築造されたものとみられる。

七瀬5号古墳を含めいま述べてきた諸古墳は、いずれも本古墳と同じ尾根筋に築造され、その年代を中期中葉ないし後半に求められるものである。したがって、同尾根筋に点在する古墳は、比較的限られた時期に順次築造された可能性が高く、他に調査された3基でもそれを否定する徵証は得られていない。こうした古墳群の形成という観点を先の遺物の年代観に加味して考えれば、本古墳の築造年代は、七瀬双子塚古墳のそれに近い時期、実年代でいえば5世紀中葉もしくは後半でもより早い時期に求められるのではないだろうか⁶⁶。

本古墳の中心的な埋葬施設である第3主体部は、墓壇内に長さ約4mの割竹形木棺を安置したものであった。この棺の西半からは、頭位を北東におき仰臥伸展位で埋葬されたと考えられる被葬者の人骨とともに、ほぼ原位置を保つ葬身具が出土した。一方、棺の東半からは盜掘坑内をのぞいて何ら遺物が検出されなかった。この盜掘坑は棺の一部におよぶもので、もともと棺の東半に多くの副葬品が存在したとは考えられないから、このかなりの空間が何を意味するのかが問題となる。

本古墳から2km程北にある山の神古墳では、長さ約5.3mの木棺の南半で埋葬人骨1体が検出され、遺物出土状況から棺北半にも1体の人体埋葬が認められている⁶⁷。このように追葬不可能な埋葬施設での同棺多葬例は、全国に目を向ければ決して珍しいものではなく、「殯」など当時の葬制に関わって様々な問題を投げかけている。本古墳の場合、山の神古墳のような積極的根据には乏しいが、副葬品の埋納空間とみれない以上、さらにもう1体の人体埋葬を想定したとしても、あながち無稽とはいえないだろう。ここではさしあたってその可能性を指摘し、当地域での類例の増加をまつことにしたい。

その第3主体部から出土した人骨は、鑑定の結果、20歳代の女性人骨と推定された。したがって、2体埋葬の可能性から直接的な契機は定かでないが、本古墳の築造にあたって、ある古墳時代女性の死が大きな比重を占めていたことは確かであろう。

古墳時代の女性については、古墳出土人骨を手掛かりとした今井亮氏による整理がある⁶⁸。しかし資料不足から、それ以降も十分な実証的議論が深められているとはいいがたい。その意味では、本古墳で得られた事実が今後の研究に果たす役割は小さくないだろう。葬身具を主体とし、武器・武具を含まない出土品などは、副葬品組成から属性のあり方を探る上で一資料となろう。

また、第2主体部にみられた首飾りの出土状況は、葬身具のあり方と性差の関係を探る上で看過できない。玉類が2群にわかれて出土した点に疑問は残るが、同じ高さで明らかに小玉が2列に連なっ

ている部分があり、着装状態を前提とすれば、遺体の消失にともない一重の首飾りが前後に密着した結果とはとても考えられない。おそらく、この首飾りは二重のものであったと考えられるが、小玉の總長は約30cmと首を2周するには短く、その出土状況を勘案しても、二重の首飾りは小玉を首の前面に集めたものだったらしい。群馬県太田市塚越古墳群では、人物埴輪多数が出土しているが、二重の首飾りは女子埴輪に多く認められるという^⑩。この傾向は塚越古墳群に限らず、その周辺をみまわしても大方承認できるものである^⑪。それらはいずれも首の回りを玉が完周するという点で、本古墳でのあり方とは異なり、時期や地域も異なるものだが、第2主体部の出土品組成が第3主体部のそれとほとんど同じであることを念頭に置けば、第2主体部の被葬者もまた、女性である可能性が考えられるのではないだろうか。

すでに詳しく述べたように、本古墳の築造年代は七瀬双子塚古墳に近い時期と考えられる。七瀬双子塚古墳からは鉄製甲冑が出土しているが、鉄製甲冑はいまのところ成年男性人骨との伴出例しか知られず、被葬者は成年男性であった可能性が高い。つまり、古墳時代中期のある期間、当地域にはのちに前方後円墳に葬られる男性首長が存在したらしいのである。だとすれば、本古墳に葬られた女性は、その男性首長とどのような関係にあり、どのような立場の差を有したのだろうか。

本古墳の被葬者と七瀬双子塚古墳の被葬者の活躍期間がほぼ等しいものとすれば、両者の政治的・社会的地位の優劣は否定しようもない。しかし、本古墳は一定の墳丘規模をもつことから、被葬者を地域集団の一般員と同列に扱うことはできない。武器・武具をもたず、当地域では稀な金属製剣などで身を飾った本古墳の被葬者は、集団内で祭祀に深く携わった女性の姿を彷彿とさせる。七瀬双子塚古墳の出土品からは、軍事権（甲冑など）と祭祀権（鏡）をあわせもつ男性首長の姿がうかがえるから、本古墳の被葬者は、そうした首長のもとにあって祭祀権を分掌した女性であったのかもしれない。このような社会構造の問題は、今後周辺諸古墳との関係を含めて、多角的に検討していくねばなるまい。

（滝沢 譲）

引用文献・参考文献

註

- (1) 龜田博『豎櫛』『末永先生米寿記念献呈論文集』1985
- (2) 石井悠『大木権現山古墳』1979
- (3) 西谷正『紅背山及岡本山東地区遺跡の調査』『高槻市文化財報告書2』1965
- (4) 大和久農平『七廻り鏡塚古墳』大平町教育委員会 1974
- (5) 西谷真治・鈴木義典『金藏山古墳』倉敷考古館研究報告第1号 1959
- (6) 潟戸谷信他『長谷・ハナ古墳群』 1984
- (7) 倉吉市教育委員会『四天王寺地域道跡群詳細分布報告書』『倉吉市文化財調査報告書第28集』1983
- (8) 長野市教育委員会『信濃・長原古墳群』長野県考古学会研究報告書5 1968
- (9) 長野県史刊行会『長野県史』考古資料編全1巻(4) 遺構・遺物 1988
- (10) (9)に同じ。
- (11) 藤森栄一他『諏訪上社フネ古墳』『考古学雑刊』3-1 1965
- (12) (9)に同じ。

- 03 a. 高橋桂「北信濃須多ヶ峯弥生式墓塚調査略報」『考古学雑誌』第51巻第3号 1966
b. 高橋桂「須多ヶ峯弥生式墓塚発見の鉄鋼再報」『考古学雑誌』第52巻第3号 1967
- 04 塩尻市教育委員会『丘中学校遺跡』 1983
- 05 藤岡孝司「銅について」「八千代市ヲサル山遺跡」千葉県文化財センター 1986
- 06 楠本哲夫他「北原古墳」大字陀男文化財調査報告書第1集 1986
- 07 月の輪古墳刊行会『月の輪古墳』 1960
- 08 金井龜喜他「高陽新住宅街開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告」 1977
- 09 下関市史編修委員会『下関市史 原始一中世』 1965
- 10 宗像神社復興期成会「続 沖ノ島』 1961
- 11 伊崎俊秋「立山山古墳群」八女市文化財調査報告書第10集 1983
- 12 岡崎敏他「追頭古墳群」「未廬園』 1982
- 13 石川恒太郎「丸山石棺群発掘調査報告」宮崎県文化調査報告書第21集 1979
- 14 岩永哲夫他「菜池地下式古墳発掘調査」「宮崎県文化調査報告書第20集』 1978
- 15 ⑮に同じ。
- 16 月の輪古墳南主体のものはやや特殊で、銅環を含めて6個の環が付いており、内1個は径が本体と同じくらいになる大型のものである。
- 17 蒲原宏行「豊穴系横口式石室考」「古墳文化の新視角』雄山閣 1983
- 18 伊藤勇輔・一瀬齊男「玉類について」「北島城都当麻町兵家古墳群」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第37冊 奈良県立橿原考古学研究所編 1978
- 19 小野勝年「下高井地方の考古学的調査」「下高井』 1953
- 20 遺物は現在、地元七瀬区に保管されており、実査の機会を得た。詳細は改めて報告の機会を得たい。
- 21 青木和明土口将軍塚古墳出土土師器の編年の位置」「長野県史跡土口将軍塚古墳」長野市教育委員会・更埴市教育委員会 1987
- 22 更埴市教育委員会「森将軍塚古墳—保存整備事業第6年次発掘調査概報-」 1987
- 23 長野市教育委員会・更埴市教育委員会「長野県史跡土口将軍塚古墳』 1987
- 24 ⑯に同じ。
- 25 横山治一「長丘村古墳調査」「下高井』 1953
- 26 ここではとくに取り上げなかった、堅拂や両面穿孔の管玉、銅鏡の存在もこれと矛盾するものではない。
- 27 ⑯に同じ。
- 28 今井亮「古墳時代前期における女性の地位」「歴史評論』383 1982
- 29 石塚久則「形象埴輪の衣服と装身具について」「塚廻り古墳群」群馬県教育委員会 1980
- 30 二重の首飾りを巡らした女子埴輪の多くが、他の表現から「巫女」とされるものであることを付言しておきたい。

付論 七瀬3号古墳出土の人骨について

信州大学医学部第二解剖学教室

西沢寿晃

埋葬状態：出土した人骨は1体分であり、破損がすすみ細片状となつた頭蓋骨の各部分と、わずかな長骨の断片が認められる程度である。しかし、上顎・下顎の歯は歯列の形状を止めて、ほとんどの歯種が残存する。これらの歯の位置と、顔面骨は欠失するが、頭蓋骨の脳室部分の細片のそれぞれの個所からみて、玄室奥方に頭部を置き仰臥させた伸展位の埋葬状態が推定される。

骨の残存状態：頭蓋骨のなかでわざかに骨の部位が識別できるのは以下の通りである。後頭骨——頭蓋骨のもっとも上方に残存する。骨壁は比較的薄く、内面に内後頭隆起の一部が認められる。側頭骨——かなり崩壊がすんでいるが椎体の一部で、その位置から右側頭骨の残存部位とみられる。頭頂骨—— 6×7 cm程度の大きな板状骨で、内面にやや太い動・静脈溝が走行する。周縁に縫合部位は見当らず、薄い骨壁が後頭部への移行でやや厚くなる部分ともみられる。その他、部位不明の板状の細片がいくつか残存する。顔面骨はまったく欠失している。下顎骨——骨体の左側、第1・2小白歯、第1大臼歯が植立状態の歯槽部分が残るが、骨質はすでに崩壊直前である。以上の各骨は1個の頭蓋骨の部位をほとんど移動することなく元の位置を保っている。なお、右側肩部に近く長骨様の骨の痕跡があるが明確でない。

歯——顔面部の下方（上顎骨は欠失）で、上顎・下顎の歯がほとんど歯列を保って残存する。上顎の歯列は各歯が歯根を上方に向け乱れない抛物線状を保つが、右側でやや傾斜へずれている。下顎の歯列は全体に上顎との咬合が外れ、右下方へ落ち込んだ位置で、上顎歯との混亂が生じている。下顎骨自体が腐蝕に伴なう駆動節からの離脱で移動した状態であろう。

切歯——[1]2の歯冠は完存

するが他は細片状となる。両歯とも切縁の舌側に明瞭な咬耗が生じている。[1]の咬合面には線状に象牙質の露出が現われている。[2]は近心から遠心方向へかけての咬耗が進んでいる。[1]はエナメル質の唇側のみが残るが、切縁から唇側へかけての咬耗が著明である。このように上・下顎切歯が対応する咬耗の相違は、上顎切歯が下顎切歯の前方で噛み合う鉗状咬合の形態を示している。

犬歯——各歯の歯根は、根端を欠くもの、歯冠内部に附着するもの、歯冠のみを残すものなど、それぞれ残存の程度が異なる。[3]で舌側面の心・遠心に折り、新たに尖頭が形成された如き咬耗面が生じ、近心側でより強い面状となる。2の滑沢な表面に微細な擦痕が観察される。[3]でも近心の咬耗面がより大きく、ここに象牙質が線状に露出する。[3]でもすでに尖頭を欠くほどの咬耗が唇側・遠心に向って生じ、点状に象牙質が露出している。

小白歯——[4]4では頬・舌側咬頭とともに咬耗がやや進み、近・遠心の辺縁の稜状化が現われている。

上顎							
△		○	○		1	2	3

第一	第一	第一	第一	犬	個	中	側	犬	第一	第一	第一	第一
二	二	二	二	大	小	右	左	一	一	一	一	二

大	大	小	小	切	切	切	切	小	小	大	大	大
白	白	白	白	白	白	側	側	白	白	白	白	白

歯	歯	歯	歯	歯	歯	歯	歯	歯	歯	歯	歯	歯
8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5

△	△	△	△	○	○	○	○	1	2	3	4	5
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

下顎

△ 欠歯齒

○ 破碎された小片

4は頬側咬頭のみに咬耗がわずかにみられる。5|5は頬側咬頭に軽度の咬耗があり、全体的に少ない。なお、右側は左側に比較してかなり咬耗が進行し、中心咬合面の隆線なども消失する一面を形成する強い咬耗が生じている。5|5でも左で頬側咬頭のみの咬耗であるが、右はかなり程度が進み、頬側咬頭から切縁を欠く面状に形成される。

大臼歯——6の近、遠心の舌側咬頭がそれぞれ多面状となるが溝・窩は残る。6では中心隆線などは平面となり、頬側・近心の辺縁が鋸い稜状となる。この傾向は左に比してかなりの進度を示す。6でもすべての咬頭は平面状に近く、頬側の内上方から外上方へ一面をなす形状がつくられ、小窩や溝がわずかに残る程度となるが、5は各咬頭のみの咬耗に止まり偏差が著しい。7|7はほぼ共通する傾向で、舌側咬頭に進行がみられ、7の遠心切縁が稜状となる。7|7も各咬頭の弱度の咬耗と、7では頬側に一面の形式がみられる。なお、7|7において、咬合面の好発部位とされる。裂溝・小窩に軽度のう蝕の発現が認められる。8|8、下顎のみに存在する。他の歯種の残存の程度からみて、上顎は未萌出であると考えられる。咬耗はまったく生じていない。

以上、各歯の形状について記載したが、これらの内容から次の諸点の特徴が指摘される。

すべての歯で歯根を含めて完存するものは皆無で、歯根の残存するものも歯頸部以下や根尖を欠きエナメル質の歯冠のみを残すものが多い。この傾向は同一歯種において異なる場合もある。土中においてエナメル質の高度なCa成分が腐蝕作用を免れた結果と考えられ、すでに全歯において歯根や石灰化は完了しているものと見なせる。

歯の生理的な変化である咬耗・摩耗の程度や内容も、生体時の加齢に伴なう現象であり、その進度は歯質や食生活、咬合状態、性別やそしゃく癖などにより変化するし、また、部分的な強弱は個人的な差異も著しい。例えば、咬耗度の強い歯は3・1・6であり、逆に弱い歯は8~5であるとされる。⁽¹⁾ 咬合面では一般的に上顎(4を除く)で臼歯は頬側<舌側であり、下顎では頬側>舌側となる。また同歯種では下顎の頬側>舌側が高率となる。⁽²⁾ 本人骨の場合も概ねこれに例外でなく、全体的に弱度であるが、3・6の咬耗が著しく、上顎切歯で舌側、下顎で唇側、臼歯部では上顎が舌側、下顎の頬側の咬耗が進むという比較的の逆例の形態を残している。なお、臼歯は全体的に左右差がかなり顎差で右側の咬耗が進歩するが、縄文時代人などに見られる歯を道具として用いた過耗の結果ではなく、単なる習慣的なものであろうかと推測される。なお、歯の咬耗度は全体的に13rocaの分類による⁽³⁾に相当する。同時に柄原の分類表⁽⁴⁾に対照すると、切歯や大臼歯の一部にかなり咬耗の進んだ歯種もみられるが、おむね20歳代の範囲になり、勘案するとその後半期の年齢が推定される。

性差を現わす骨の形質的な特徴はすべて失なわれてるので、歯の大きさについての観察を主とする。例として上・下顎の大歯でもっとも性差が著明であり、切歯や小白歯の差は少なく、どの歯種でも男性が女性に比して大である。⁽⁵⁾ 本人骨の歯の中で、上顎中切歯・犬歯・第1大臼歯の大きさは表-1の通りである。これらを既発表の現代日本人の女性の計測値と比較すると、殆どの項目で平均値に近似し、その大きさは極めて女性的であるといえる。

	冠長	冠幅	冠厚
上顎中切歯	10.5	8.5	6.8
上顎犬歯	9.2	8.0	8.2
上顎第1大臼歯	—	9.8	11.4

表-1. 歯の計測値

まとめ：本古墳から出土した1

体の人骨は、頭蓋骨が残存するのみであるが、亥室内における頭部の位置や方向から、頭蓋骨はほとんどの部分が消失しているが、上・下顎の歯は歯列を整えて保存が良好である。歯の咬耗はさほど進行しておらず、その程度からみて20歳代（後半？）の年齢が推測され、歯の大きさは女性的で、副葬品の内容からも合致するものとみなされる。

上・下顎の歯の咬合は錐状咬合とみられ、古墳時代人の17.4%という小数例にはいる。（錐状咬合＝縄文時代人・0%、現代人・87.0%）また第3大臼歯（管齒）の半数の欠失は古墳時代人の62.7%（全智歯の萌出＝縄文時代人・81.0%、現代人・36.0%）の中で通常であり、両形質とともに時代に伴ない漸移する退化傾向の強い現象の一つとされている。⁽²⁾

上顎の第2大臼歯に発現しているう歯は、古墳時代人で臼歯のう歯率4%、1人平均推定0.6本とされるもので、この値は縄文時代人に近い。しかし先行する弥生時代では異常に高いう歯率を示すことから、時代的に新しい文化の出現とX勢のなかで、食性に関連した何らかの要因が含まれる可能性があるという所説もある。⁽³⁾ちなみに現代人では臼歯におけるう歯率50%前後、1人平均推定値10本以上であるという。

信州大学医学部第二解剖学教室 西沢寿晃

参考文献

- (1) 桥原博 日本人歯牙の咬耗に関する研究 熊本医学会雑誌31、補冊4、1957
- (2) 北條六男 日本人の歯の咬耗について、解剖学雑誌26：2、1951
- (3) 同上(1)
- (4) 権田和良 歯の大きさの性差について人類学雑誌67：3、1959
- (5) 鈴木尚 骨から見た日本人のルーツ 岩波書店 1983
- (6) 清井琢朗 古人骨の歯牙について、日本人のう歯、人類学講座5日本人I 1981

図 版

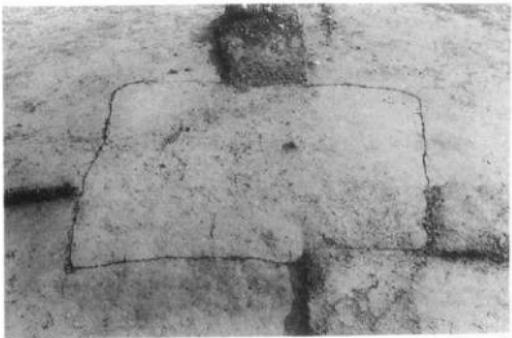
七瀬 3 号古墳
1 調査前の状況
(北西から)



2 塗頂部小埴丘



3 方形土壙検出状況



図版 2



七瀬3号古墳
1 方形土壤掘り下げ状況



2 表土除去後の墳丘
(北西から)



3 北側墳裾付近
(西から)

七瀬 3 号古墳
1 填丘断ち割状況
(北西1/4盛土除去後)



2 填丘南北断面北側



3 填丘西断面西側



図版 4



七瀬 3 号古墳
1 周溝検出状況



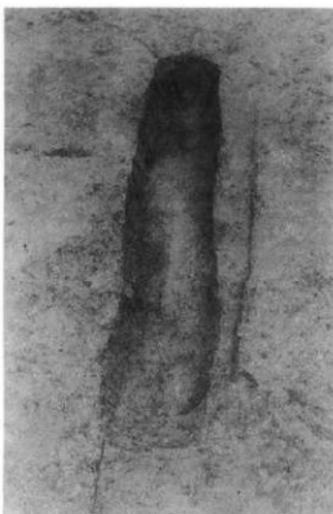
2 周溝掘り下げ状況



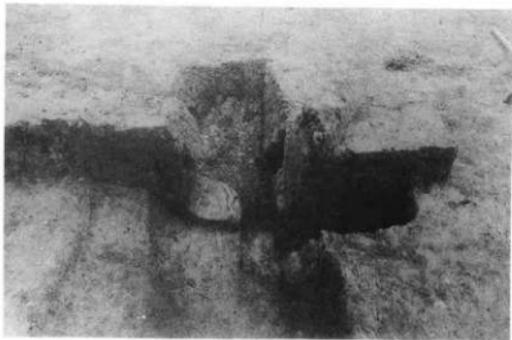
3 周溝(西側)土層断面



七瀬 3 号古墳
1 第 1 主体部検出状況(陥没状況)



2 第 1 主体部完掘状況



3 第 1 主体部土層断面
(D-D')

図版 6

七瀬3号古墳
1 第2主体部完掘状況
(手前は復元による)



2 第2主体部遺物出土状況

3 第2主体部頭部付近
遺物出土状況



七瀬 3 号古墳

1 第 2 主体部 竪櫛 5
出土状況



2 第 2 主体部 竪櫛出土状況

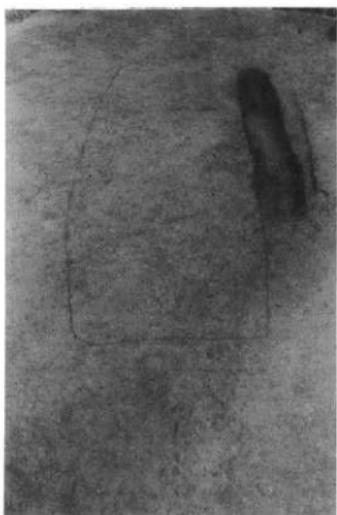


3 第 2 主体部右手付近
遺物出土状況

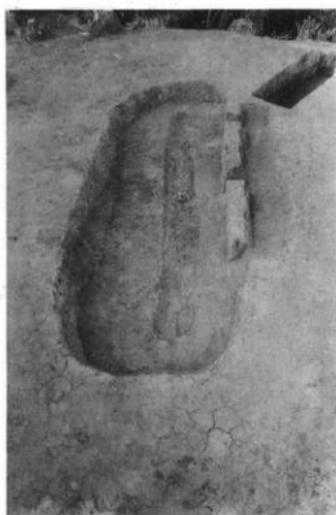


図版 8

七瀬 3 号古墳



1 第3主体部検出状況



2 第3主体部完掘状況



3 第3主体部完掘状況(高社山を望む)



4 第3主体部遺物出土状況

七瀬 3 号古墳

1 第 3 主体部頭部付近
遺物出土状況



2 第 3 主体部 竪櫛 1
出土状況



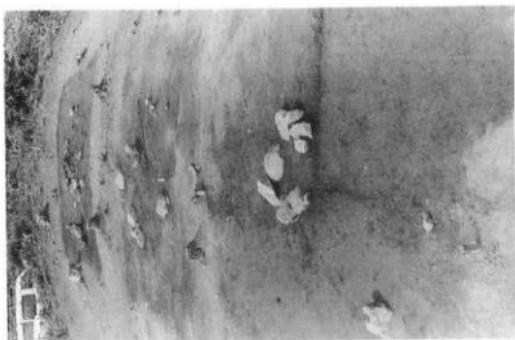
3 第 3 主体部遺物
出土状況



図版10



1 七瀬4号遺跡全景(西から)



2 七瀬4号遺跡
プラン確認時(東から)



3 1号遺構(盛土除去時)

1 2号道構表土除去時



2 3号道構表土除去時



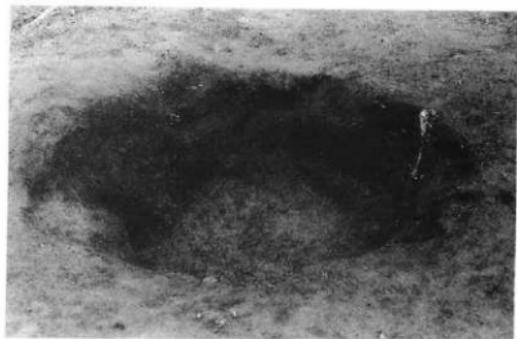
3 3号道構埋土除去時



図版12



1 3号遺構完掘時

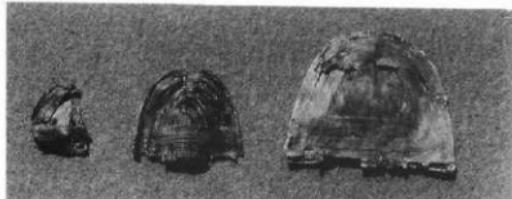


2 3号遺構配石除去時

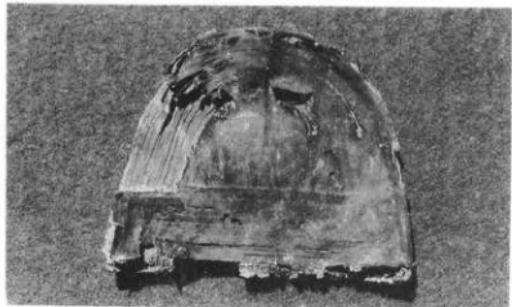


3 石塔台座石出土状況

1 竪 楠
(右からA・B・C)



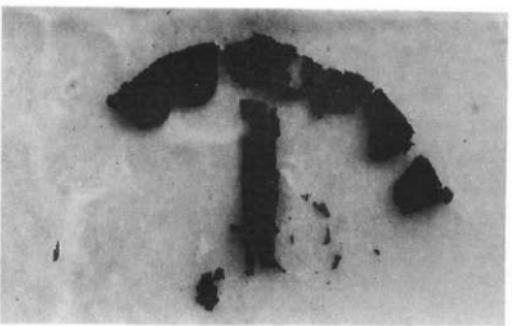
2 竪 楠 A



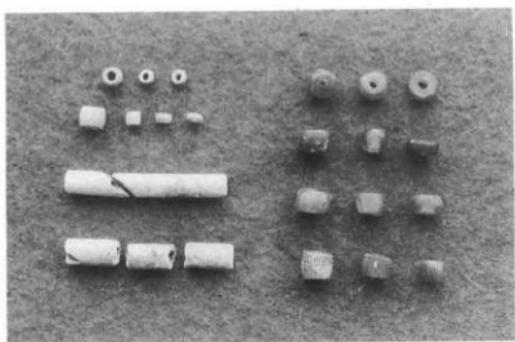
3 竪 楠 B



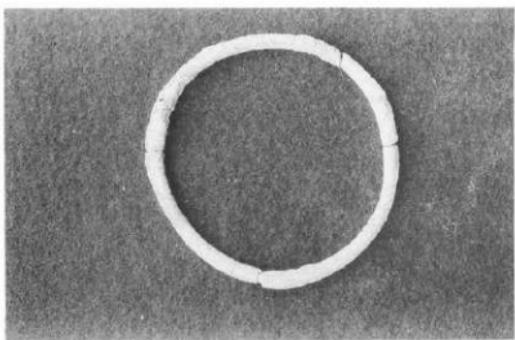
4 施り竪 楠



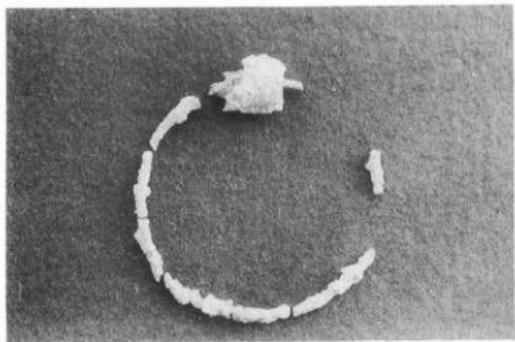
図版14



1 玉類

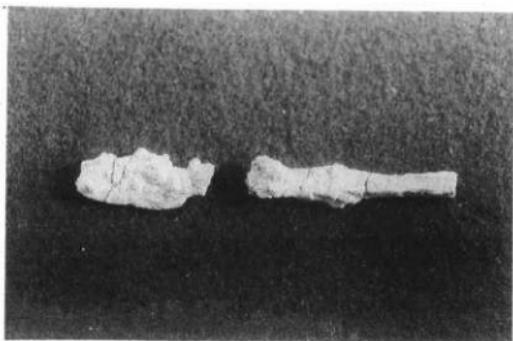


2 銅鏡

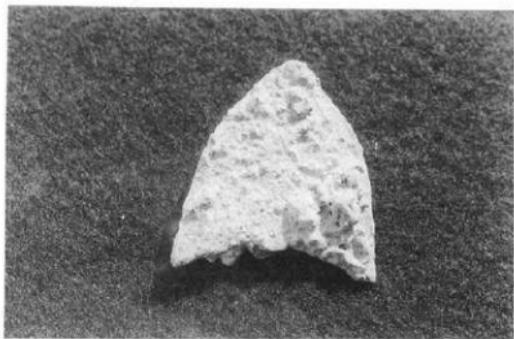


3 鐵鏡

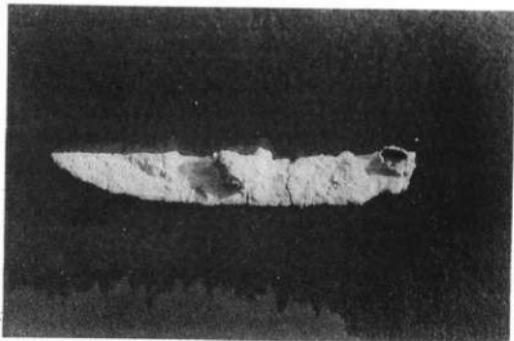
1 鉄 錠 1



2 鉄 錠 2



3 刀 子



田麦中畝1・2号古墳

田麦中畠1・2号古墳

1 調査の概要

(1) 調査に至るまでの経過

今回の調査は、中野市西部丘陵土地利用計画に基づく、準用河川那清水川改修事業に伴うもので、昭和62年7月6日に、その保護について、長野県教育委員会文化課埋蔵文化財指導主事の同席のもと、工事主体である中野市土地開発公社との協議を行ない、発掘調査を実施し、記録保存を図ることに決定し、昭和62年10月23日から同年11月30日の予定で調査を開始した。

(2) 調査団の編成

調査責任者 岩田 春三（中野市教育委員会教育長）

調査団長 金井 淳次（日本考古学協会会員、中野市文化財保護審議会会長）

調査主任 横原 長則（日本考古学協会会員）

調査員 池田 実男（長野県考古学会員）

酒井 健次（ “ ” ）

事務局 酒谷 康雄（社会教育課長）

小林 紀夫（同課歴史民俗資料館管理係長）

徳竹 雅之（ “ ” 学芸員）

協力団体 田麦区

参加者 湯本 栄一、栗原よしみ、阿藤英奈、阿藤きみ、藤沢英夫、阿藤千代江、青木守
馬場恒夫、春日英男、樋口政勝（順不同、敬称略）

調査の実施にあたり、長野県教育委員会文化課指導主事小林秀夫先生には、格別なる御指導をいただき、また期間中、御理解、御協力をいただいた工事主体の中野市土地開発公社、工事施工の中野、平野建設共同企業体、並びに地元工事関係役員の皆様方へ記して感謝申し上げます。

（徳竹 雅之）

(3) 調査の経過

10月15日（曇） 1号古墳と周囲の清掃、伐木の枝かたづけ、磁化線のグリッド設定作業
B・M標高385.08mの設定、墳裾東側は、重機のために破壊されていた。

10月16日（曇一時雨） 1号墳、表土剥ぎ、午前中で作業中止。

10月17日（曇） 表土剥ぎ

10月19日（曇一時雨）表土剥ぎ、外形平板測量準備、雨のため作業中止

10月19日（曇一時雨）1/100地形図作製

10月21日（晴） 前日に同じ

10月22日（曇） 1号墳丘部平板測量

- 10月23日（晴） 発掘調査団結式、祈願祭、市教委社会教育課、郡谷課長出席
1／100地形図、1号墳丘の平板測量。
墳頂部は乱掘されて大きく凹んでいた。墳頂部から十字のトレンチを入れる。
- 10月24日（曇のち雨）前日に同じ、午後雨のため作業中止
- 10月26日（曇） 枝團の枝かたづけを拡大する。
1／100地形測量、墳頂部を除くトレンチ掘削
- 10月27日（晴） 1号及び1／100平板測量、トレンチ掘削続行
- 10月28日（晴） Aトレンチ、Bトレンチ、1号地層断面図作製
伐木の枝かたづけ
- 10月29日（晴） 1号及び1／100、平板測量、Cトレンチ1号地層断面図作製
- 10月30日（曇一時雨） 2号古墳と思われる所の清掃、
区域を設定してテープを張る。東側掘り下げてみる。
地形平板測量
- 11月1日（晴） 1号古墳、測量、トレンチ発掘作業
- 11月2日（曇のち雨）作業は、1時間位で、雨のため中止。
- 11月3日（晴のち曇）測量続行、1号古墳北側にトレンチを入れる。
厚貝赤畠古墳を視察する。
- 11月4日（曇） 1号墳、チェーンブロックで、櫓、櫓の株を抜く。
中央部に墓壙のまわりの石と思われるもの出現
- 11月5日（曇一時雨）1号墳、墓壙の輪郭が判明する。
- 11月6日（曇） 1号墳、測量作業
- 11月7日（晴） 2号墳、レベル作業。
ゲートボール場に埋った1号墳の掘り出しを、バックホーにて行う。
- 11月9日（晴） 2号墳、バックホーで堀り出し作業
古墳と確定できず。
- 11月10日（晴） 1号墳主体部堀り下げ
- 11月11日（晴） 1号墳主体部盗掘坑、小さくなるが終らず。
墓壙内清掃、写真撮影
- 11月12日（晴のち曇）1号墳、写真撮影
長丘陵の隆起の切断面の写真、厚貝袖山まで撮影に行ってくる。
- 11月13日（晴） 1号墳、トレンチ断面図作製。
- 11月14日（晴） 1号墳、墓壙、南壁A-A、西壁B-B、北壁C-C、東壁D-Dを1号地層断面図作製、
ブルトーザーの掘削が進んできたので、テントを引越す。
- 11月15日（曇） 2号墳、最終的にトレンチを入れて、古墳でないことを確認する。
- 11月16日（晴） 主体部、地層断面調査、1号断面図位置測定。
- 11月17日（晴） 重機、1号墳周辺までせまり、豪音の中で調査作業、孤立状態となる。
土取り工事現場の東向いの西斜面より、縄文前期、中期、弥生後清水期、古墳

時代、平安時代、国分期などの土器片を採集。

他の作業は前日に同じ

- 11月18日（晴） 1号墳⁶、E-E、F-F、の地層断面図作製、写真撮影
11月19日（曇） 2号墳の仮定所在地の略測量を行う。
11月20日（晴） 1号墳の残りの地層断面を測図
11月21日（晴） 1号墳、残っていた地層断面図を完成させ、シート、器材を現場より南方の運動場に運搬して、シートにて覆い、調査を終了する。 （池田 実男）



第53図 田麦地区古墳位置図

2 調査の内容

(1) 中畠古墳群の調査

中野市田麦、厚貝地籍の長丘丘陵は、南北に幾筋もの起伏をもっており、ここに数多くの古墳が、築かれている。東側の線は、七瀬双子塚(453.7m)を最高所として、同3号墳、5号墳、林畔1・2号墳が、丘頂上に所在し、これらの標高は、北方に向って次第に低減して、ついには厚貝地籍で消滅している。

この丘陵より西方約1km離れた位置に、南北1.7kmの丘陵(最高点463.5m)が存在し南・西・北側は、千曲川に面した急崖で、丘頂部から東方は、畑地帯となって果樹等が栽培されている。この丘陵間に生成されたのが中畠丘陵で、地名が位置を現わしている。この丘陵は、調査した3・4・5号墳所在地から隆起が初まり、起伏しながら壁田城山に連なっている。

また、これより北西の小丘頂には、厚貝山ノ神古墳、また赤畠古墳が所在している。この丘陵の生成は、安山岩質の岩漿の隆起によってなされたことは、厚貝、長峯地籍の畑造成時の丘陵切断面の観察によって確められた。

田麦から大俣方面に通する道を西方に登ると、丘陵間の凹所の分岐点となり菱形谷地に行く道は、中畠丘陵を切断して通じ、この北側の狭小な丘頂部に、1号古墳(385.08m)が所在し、2号古墳はこの北、30m程の位置にあったが、ゲートボール場の造成時に消滅した。この1号墳の調査と一緒に探索したが、位置が確認できなかった。

ここより南方約150mの丘頂に3・4・5号墳が所在する。ここは1号墳より、やや広い丘頂平坦面をもち、ここに直線に規模の違う三基の古墳が所在した。また4号墳の裾より東側下段4mに近世—明治期までの火葬場として使用された、南北2.5m東西1.5mの長方形の平面プランが残っていた。

これらの中畠古墳の所在する丘陵の、東側は傾斜がきつく、西側は僅かな隆起となっている。このため、眺望は各調査の項目で示された如く眺望絶佳な位置を占めている。だが調査中から建設機械の音に、せまわれての調査作業で、3・4・5号は、壁田の北信合同事務所の敷地用採土、その他で、昭和61~62年で消滅し、現在はゲートボール場、田麦区の運動場として使用されており、1号墳は、62年の畑地造成工事で消滅し、昔日の面影は、みられない。

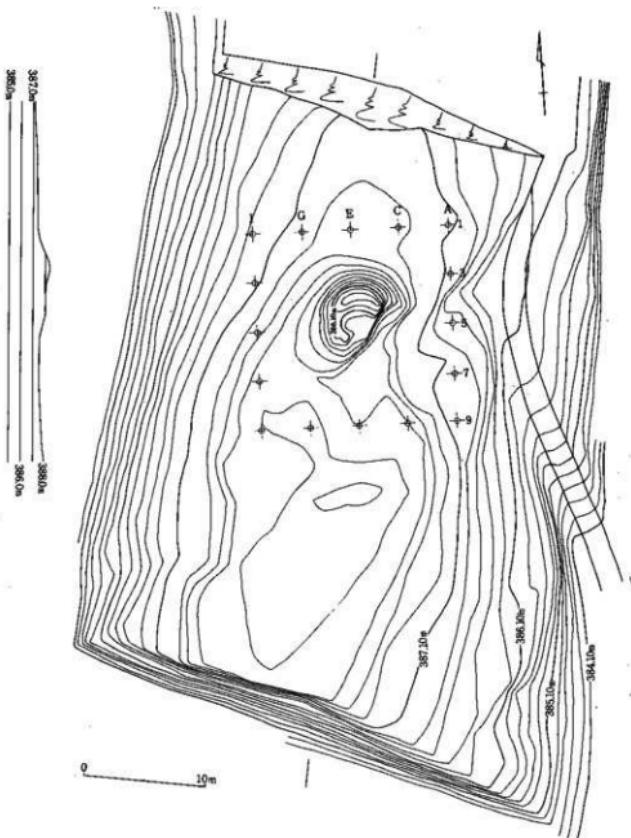
なお、この調査の行われた62年に造成工事の行われている東の丘陵斜面から(63図)の遺物を表採した。縄文時代中期、弥生時代中期～後期、古墳時代、平安時代、国分寺の各期にわたる遺物がみられ、これらの遺物との結びつきも充分考慮を必要としている。

(2) 中畠1号古墳の調査

この古墳は、昭和60年の遺跡分布調査以前から、中央部に大きな擾乱による凹所がみられ、墳丘が損われていた。さらに畑地造成工事の大型ブルが調査に先がけて墳頂を通過したため、さらにその部分が破壊をうけてしまった。古墳の標高は、385.08m、復元規模は、径7.5m、高さ1m程の円墳と推定されている。

この地点は、表土は比較的浅く、下層は円い石礫が多くみられる。このため地表にも露出している部分がみられた。

墳頂部北の高所を最高点と定めて40cm程掘り下げるとき、東西間3mに対になった石が、みられたた



第55図 田麦中歛1号古墳墳丘測量図

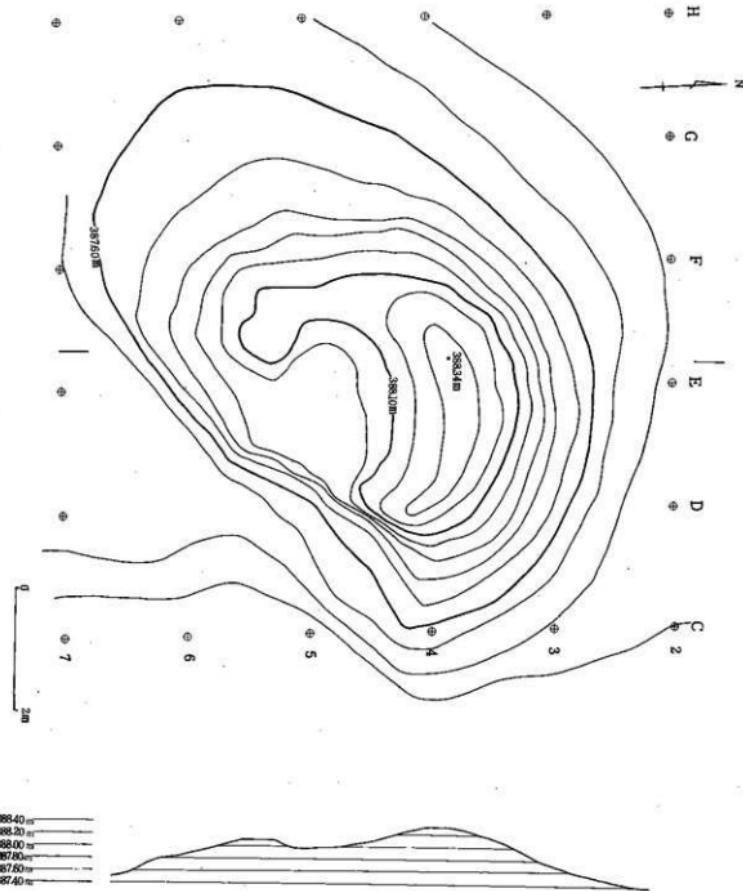
め墓拵の方向は、ほぼ、この東西線と推定できた。さらに掘り下げるに東・北・西側の壁面は、破壊を受けずに残っていたが、南側は、ほぼ全壇しており平面プランでは、墓拵の半分以上に及び、その南側部分も含めて320cm×170cmの範囲に及んでおり墓壇底部堆定面より実に深く掘られており、他の面が黒褐色の硬い地層なのに対し、黄褐色の膨軟な土が充填していた。この乱掘面は、墓壇面の中央で、1×0.6mのU字形をなして南側に広がっていた。これまでの調査で、遺物の検出は、墓壇には何もなく、墓壇西の上層から、土師の环の小さな破片が検出いただけであった。

墓壇と思われる面も下部では、南東・西部分で擾乱されない部分が残っていたため、これを頼りに

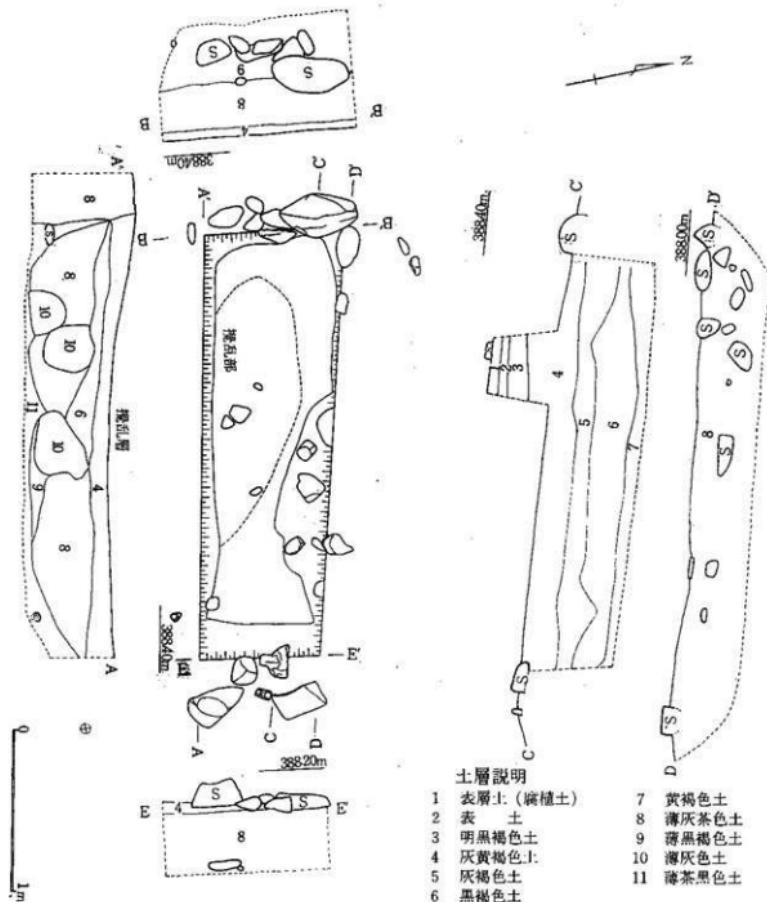
墓壙を復元すると、東西長さ2.5m、南北0.65m、方向は磁北～東105度の線に位置し、深さは表土腐植層25cm、暗黄色土23cmがあり、その下に黒褐色土47cmの部分が、主体部の深さと思われた。

このように、三方は、石の面と土層の違いにより墓壙の規模を知ることができたが、先述の如く遺物の検出ができなかったので、この墓壙に納められる箱式の木製棺は、縱2m前後、幅0.6m前後、高さ0.5m前後の大きさが推定され、充分、伸展葬できる規模を有している。従って周囲にみられる上部の石は、棺体部安置後に、押えのために置かれた石とも、みられる。

この様に主体部と思われる部分が大部分擾乱を受けていたためと、腐朽のため、遺物は残されてお



第54図 田麦中畠周辺測量図

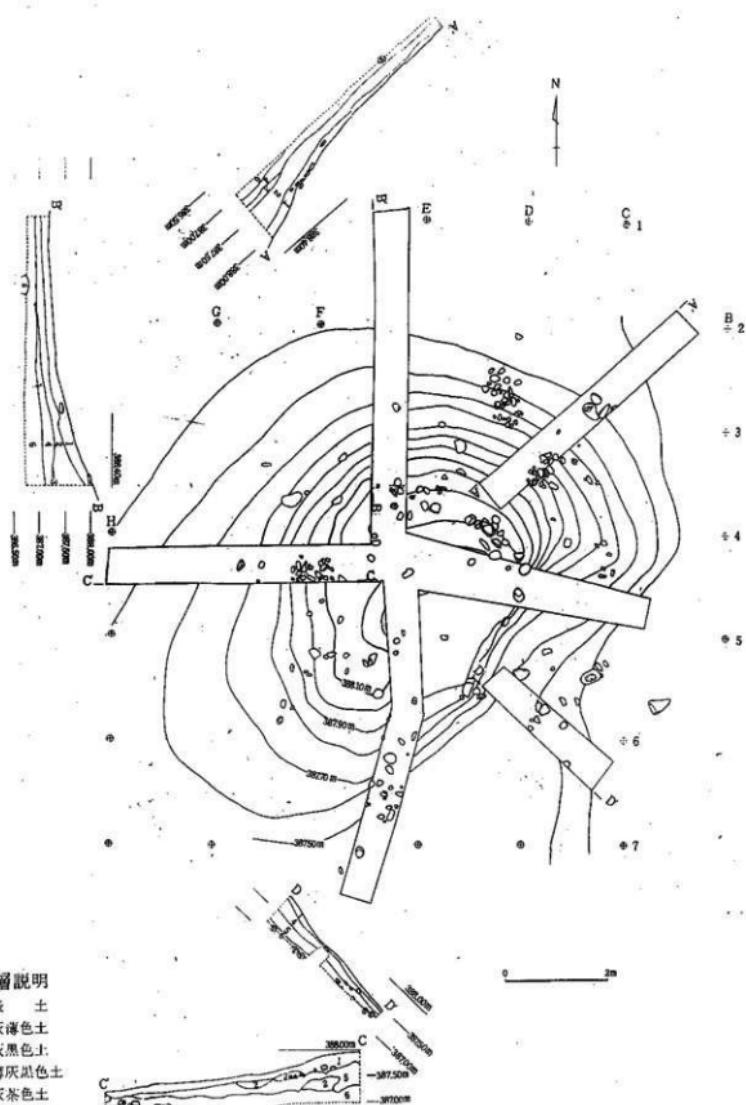


第56図 田麦中畠1号古墳主体部測量図

らす、築造された年代などの手がかりは、大きく失われていた。また、この種の古墳では遺物の検出がみられない場合も多く存在するともされている。

この様に、古墳の築造された年代の推定は困難であるが(1)、箱式棺とみられること(2)、頭位方向が東西で、北乃至、高社山方向に無いことは、仏教思想の影響から頭位方向の呪縛が薄らいだ頃のもの(3)、小型古墳の多い古墳時代末期の七世紀代の遺構ではないか、以上3点に、土師環片の検出など合せて、七世紀代の終末期古墳ではないかと、一応推論したいのである。

(榎原 長則)



第57図 田麦中歟1号古墳埴丘断面図

図版

1 中畠 1 号遠景（東から）



2 調査前状況



3 表土除去後試掘坑調査



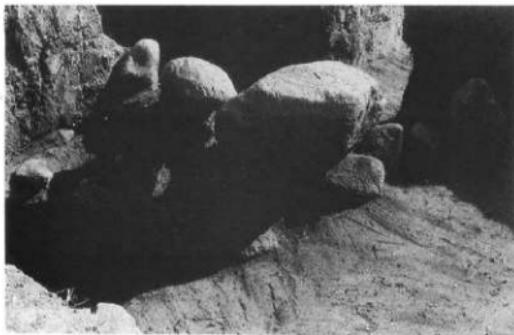
图版 2



1 中 嵩 1 号 古 墓 主 体 部



2 同 上



3 同 上

図版 3



1. Aトレンチ



2. Cトレンチ



3. Dトレンチ



4. Eトレンチ

田麦中畝 3・4・5 号古墳

